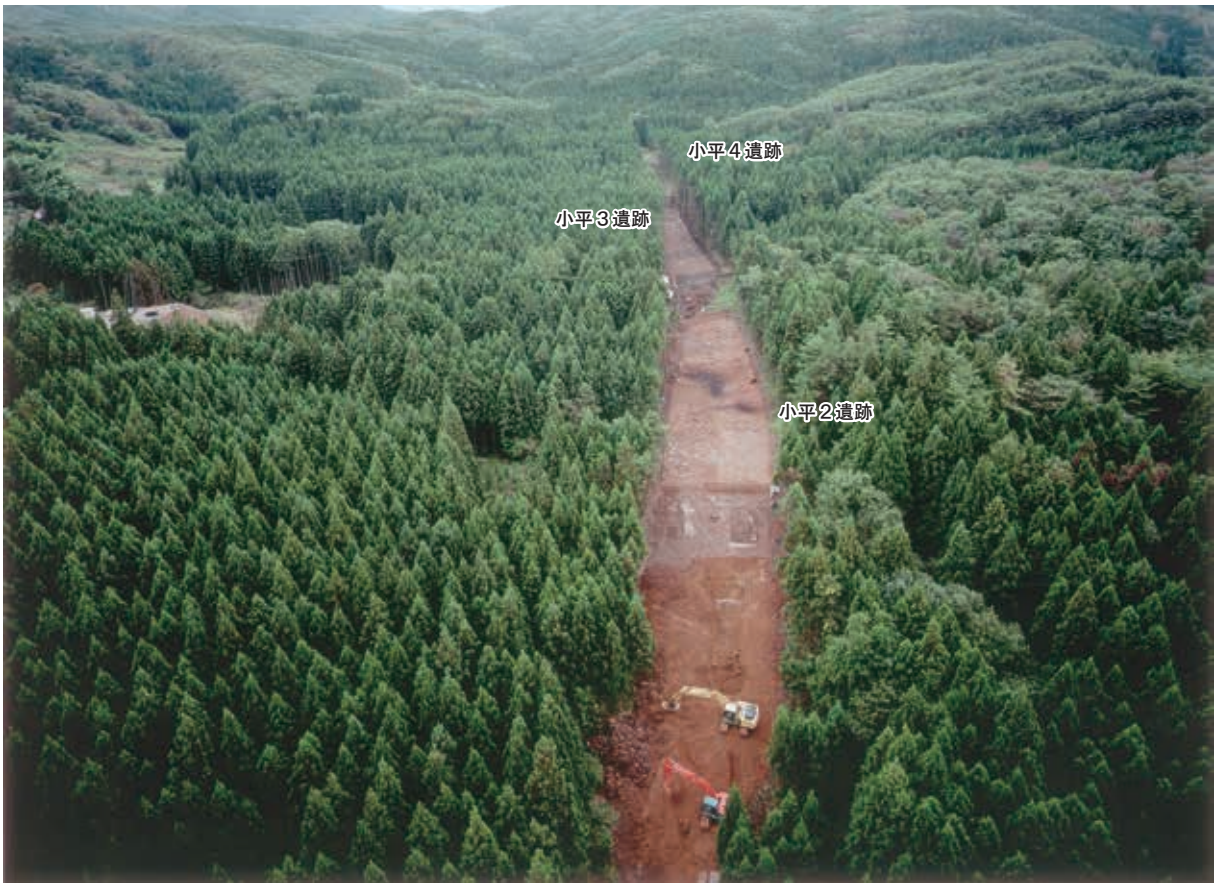
小平（こだいら）2遺跡
小平（こだいら）3遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第128集

平成16年

財団法人　山形県埋蔵文化財センター



小平２・３遺跡空中写真（北より）

小平２遺跡　SK1遺物出土状況

小平２遺跡　SK1出土遺物

小平２遺跡　SK7出土遺物

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、小平２遺跡及び小平３遺跡の調査成果をまとめたものです。

今回の発掘調査は、中山間活性化ふれあい支援農道整備事業（飽海中央地区）に伴い、平成14年度におこなわれました。

小平２遺跡・小平３遺跡は山形県の日本海側八幡町にあります。八幡町は庄内平野の西側、出羽丘陵に接する辺りに位置し、小平２遺跡・小平３遺跡の中心としている時代、古代においては特に重要な地域でした。出羽国府と考定されている城輪柵跡、出羽国分寺と考定されている堂の前遺跡、出羽国府の移転地と考定されている八森遺跡など、出羽国の中心がここを中心とした地域に存在したことは広く知られています。

小平２遺跡・小平３遺跡はこれら国府域に近接した丘陵上にあります。小平２遺跡は小平３遺跡よりも北側にそれぞれ独立して存在し、これらの全体的な位置は、八森遺跡のすぐ南側にあたります。遺跡からは、奈良・平安時代の遺物がまとまって出土し、庄内平野の古代の政治の様相を理解する上で重要な遺跡であることがわかりました。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられてきた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの貴重な責務と考えます。さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成16年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　　木　村　宰

本書は中山間活性化ふれあい支援農道整備事業（飽海中央地区）にかかる「小平２遺跡」「小平３遺跡」の発掘調査報告書である。

既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

調査は山形県庄内総合支庁産業経済部酒田農村整備課の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

出土遺物、調査記録類は、報告書作製終了後、山形県教育委員会に移管する。

調 査 要 項

遺　跡　名　小平（こだいら）２遺跡　小平（こだいら）３遺跡　平成14年度登録

所　在　地　山形県飽海郡八幡町（やわたまち）市条字小平他

事業委託者　山形県庄内総合支庁産業経済部酒田農村整備課

調 査 主 体　山形県埋蔵文化財センター

理　事　長　　木村　宰

受 託 期 間　平成14年９月１日～平成15年３月31日

現 地 調 査　平成14年９月17日～平成14年11月15日

調 査 担 当　調査第一課長　野尻　侃（中山間活性化ふれあい支援農道整備事業（飽海中央地区）関連担当）・（調査主任）

主任調査研究員　黒坂雅人

調　　査　　員　豊野潤子

副 調 査 員　粕谷　孝

整 理 期 間　平成15年４月１日～平成16年３月31日

整 理 担 当　調査第一課長　野尻　侃（調査主任）

調 査 研 究 員　山口博之

調 査 指 導　山形県教育庁社会教育課文化財保護室

調 査 協 力　山形県教育庁庄内教育事務所

八幡町教育委員会社会教育係

凡　例

1　本書の作成・執筆は、山口博之が担当した。編集は水戸部秀樹、須賀井新人が担当し、全体については、野尻侃が監修した。

2　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ⅹ系（測地成果2000）により、高さは海抜高で表す。また、方位は座標北を表す。

3　グリッドの南北軸は、磁北である。

4　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ＳＫ・土坑　　ＳＤ・溝跡　　ＳＰ・ピット

ＥＰ・遺構内柱穴　　ＲＰ・登録土器

ＲＱ・登録石製品　　Ｓ　・礫　　ＳＸ・性格不明遺構

5　本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。図版中に遺構内出土遺物として番号を記したものは、挿図中の遺物番号に一致する。

6　遺構・遺物実測図の縮尺、網点などの用法は各図に示した。

7　遺構覆土の色調の記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

8　発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力・ご助言をいただいた。（順不同、敬称略）

田嶋明人、北野博司、三上喜孝、吉田歓、百瀬正恒

9　委託業務は下記のとおりである。

基準点測量業務　　有限会社真和技建

遺構実測業務　　株式会社シン技術コンサル

理化学分析業務　　パリノ・サーヴェー株式会社

目　次

Ⅰ　調査の経過
　　1　調査に至る経過……1
　　2　調査の方法と経過……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……2
Ⅲ　周辺の遺跡……5
Ⅳ　調査の概要
　　1　調査区の概要……7
　　2　小平２遺跡の調査区と層序……7
　　3　小平３遺跡の調査区と層序……8
Ⅴ　検出された遺構
　　1　小平２遺跡の検出遺構……11
　　2　小平３遺跡の検出遺構……19
Ⅵ　出土した遺物
　　1　小平２遺跡の出土遺物……42
　　2　小平３遺跡の出土遺物……45
Ⅶ　まとめ……70

理化学分析
報告書抄録

表

表１　小平２遺跡・小平３遺跡　出土遺物計測表（１）……40
表２　小平２遺跡・小平３遺跡　出土遺物計測表（２）……41

図　版

第１図　小平２・３遺跡位置図 …… 2
第２図　庄内地方の微地形分類図…… 3
第３図　庄内平野標高分布図…… 4
第４図　周辺遺跡分布図…… 5
第５図　庄内地方古代遺跡分布図…… 6
第６図　小平２遺跡基本層序図…… 7
第７図　小平３遺跡基本層序図…… 8
第８図　調査区概要図……10
第９図　小平２遺跡遺構標高分布図……14
第10図　小平３遺跡遺構標高分布図……16
第11図　小平２遺跡　ＳＫ１(１)遺構平面図 …… 22
第12図　小平２遺跡　ＳＫ１(２)遺構出土遺物 …… 23
第13図　小平２遺跡　ＳＫ２(１)遺構平面図 …… 24
第14図　小平２遺跡　ＳＫ２(２)遺構出土遺物 …… 25
第15図　小平２遺跡　ＳＫ３(１)遺構平面図 …… 26
第16図　小平２遺跡　ＳＫ３(２)遺構出土遺物 …… 27
第17図　小平２遺跡　ＳＫ４遺構平面図・出土遺物 …… 28
第18図　小平２遺跡　ＳＫ５遺構平面図・出土遺物 …… 29
第19図　小平２遺跡　ＳＫ６遺構平面図・出土遺物 …… 30
第20図　小平２遺跡　ＳＫ７(１)遺構平面図 …… 31
第21図　小平２遺跡　ＳＫ７(２)遺構平面図 …… 32
第22図　小平２遺跡　ＳＫ７(３)遺構出土遺物 …… 33
第23図　小平２遺跡　その他の遺構(１)平面図 …… 34
第24図　小平２遺跡　その他の遺構(２)平面図 …… 35
第25図　小平３遺跡　SK4・6・7・11遺構平面図・出土遺物 …… 38
第26図　小平３遺跡　その他の遺構平面図……39
第27図　小平２遺跡　ＳＫ１遺構出土遺物(１) …… 46
第28図　小平２遺跡　ＳＫ１遺構出土遺物(２) …… 47
第29図　小平２遺跡　ＳＫ１遺構出土遺物(３) …… 48
第30図　小平２遺跡　ＳＫ１遺構出土遺物(４) …… 49
第31図　小平２遺跡　ＳＫ１遺構出土遺物(５) …… 50
第32図　小平２遺跡　ＳＫ１遺構出土遺物(６) …… 51
第33図　小平２遺跡　ＳＫ２遺構出土遺物(１) …… 52
第34図　小平２遺跡　ＳＫ２遺構出土遺物(２) …… 53
第35図　小平２遺跡　ＳＫ３遺構出土遺物(１) …… 54
第36図　小平２遺跡　ＳＫ３遺構出土遺物(２) …… 55
第37図　小平２遺跡　ＳＫ４・５・６遺構出土遺物……56
第38図　小平２遺跡　ＳＫ７遺構出土遺物(１) …… 57
第39図　小平２遺跡　ＳＫ７遺構出土遺物(２) …… 60
第40図　小平２遺跡　ＳＫ７遺構出土遺物(３) …… 61
第41図　小平２遺跡　ＳＫ７遺構出土遺物(４) …… 62
第42図　小平２遺跡　ＳＫ７遺構出土遺物(５) …… 63
第43図　小平２遺跡　ＥＰ10・12・19・38・ＳＧ68・ＳＤ17・その他のグリッド(１)出土遺物 …… 64
第44図　小平２遺跡　その他のグリッド(２)出土遺物 …… 65
第45図　小平２遺跡　ＳＫ11遺構・その他のグリッド(３)出土遺物……66
第46図　小平３遺跡　SK11遺構・グリッド(１)他出土遺物 …… 67
第47図　小平３遺跡　グリッド (２)出土遺物……68
第48図　小平３遺跡　グリッド (３)出土遺物……69
第49図　庄内地方古代遺跡(１)(８世紀後半～９世紀後半)……71
第50図　庄内地方古代遺跡(１)(９世紀後半～10世紀後半)……72
第51図　庄内地方の遺跡存続表(１) …… 74
第52図　庄内地方の遺跡存続表(２) …… 75
第53図　８世紀～10世紀の庄内地方の様相……77

写真図版

図版１　小平２・３遺跡空中写真
図版２　小平２遺跡空中写真
図版３　小平２・３遺跡完掘状況
図版４　小平２遺跡調査状況
図版５　小平２遺跡遺構検出状況(１)
図版６　小平２遺跡遺構検出状況(２)
図版７　小平２遺跡遺構検出状況(３)
図版８　小平２遺跡遺物出土状況(１)
図版９　小平２遺跡遺物出土状況(２)
図版10　小平３遺跡遺構検出状況(１)
図版11　小平３遺跡遺構検出状況(２)
図版12　小平２遺跡ＳＫ１出土遺物(１)
図版13　小平２遺跡ＳＫ１出土遺物(２)
図版14　小平２遺跡ＳＫ１出土遺物(３)
図版15　小平２遺跡ＳＫ１出土遺物(４)
図版16　小平２遺跡ＳＫ２出土遺物(１)
図版17　小平２遺跡ＳＫ２出土遺物(２)
図版18　小平２遺跡ＳＫ３出土遺物(１)
図版19　小平２遺跡ＳＫ３出土遺物(２)
図版20　小平２遺跡ＳＫ３出土遺物(３)
図版21　小平２遺跡ＳＫ４出土遺物
図版22　小平２遺跡ＳＫ５出土遺物
図版23　小平２遺跡ＳＫ６・７出土遺物(１)
図版24　小平２遺跡ＳＫ７出土遺物(２)
図版25　小平２遺跡ＳＫ７出土遺物(３)
図版26　小平２遺跡ＳＫ７出土遺物(４)
図版27　小平２遺跡ＥＰ10･12･19･38･ＳＤ17･グリッド他出土遺物(１)
図版28　小平２遺跡ＳＫ11･グリッド出土遺物(２)
図版29　小平３遺跡ＳＫ11出土遺物
図版30　小平３遺跡グリッド他出土遺物

Ⅰ　調査の経過

1　調査に至る経過

小平２遺跡及び小平３遺跡は平成14年度に事業計画された中山間活性化ふれあい支援農道整備事業に伴う緊急発掘調査である。事業実施にあたり、事業者となる庄内総合支庁酒田農村整備課では、事業区域内の文化財の所在について山形県教育委員会社会教育課文化財保護室へ照会し、遺跡詳細分布調査の依頼を行った。依頼を受けた県保護室では事業報告の聴取と、試掘による遺跡確認を行うため、平成14年７月26日から30日にかけて事業調査ならびに事業該当地域に対する試掘調査を実施した。その結果、事業実施区域内に、３箇所の文化財包蔵地(北から小平２遺跡･小平３遺跡･小平４遺跡)が確認され、今回の報告にかかる小平２遺跡･小平３遺跡は奈良･平安時代を中心とする遺跡であることが明らかとなった。県保護室では、文化財保護法による手続きが必要との結果を酒田農村整備課へ報告した。報告を受けた農村整備課では既に事業実施を採択していることから、小平２遺跡及び小平３遺跡は発掘調査を実施し、記録による保護を図ることとなった。関係機関による協議が行われた結果、建設工事事業区内について緊急発掘調査を実施して記録保存を図ることになり､小平２遺跡(調査面積1,650㎡)と小平３遺跡(調査面積1,630㎡)の２遺跡の発掘調査を実施することとなった。こうした経過を経て、財団法人山形県埋蔵文化財センターが県教育委員会から調査の委託を受け、発掘調査を実施することになった。なお、同一路線内で南側に隣接する小平４遺跡の調査は、平成15年度に実施されている。

2　調査の方法と経過

発掘調査は平成14年９月17日から開始し、11月15日に終了した。調査日数は延41日間となる。

調査では、最初にバックホーを使用しての粗掘り作業を行い、その後発掘調査作業員による遺跡面整理を繰り返しながら、遺構検出･マーキング･遺構登録･遺構精査を行った。遺構の精査に合わせて、遺構平面図･断面図の作成、遺物の検出および登録、写真撮影、土層注記等の記録作業、さらには出土遺物の取り上げ等を行った。特にこの場所は、山林であったために杉が植林され、かつ直径が太いものが多く、チェーンソーを使用しての杉の木の抜根作業は難航した。

遺物の取り上げについては、基準となる方眼(グリッド)を組んだ。調査区を覆う座標は、磁北方向杭をＹ軸の基準とし、それと直交する線をＸ軸とした。これを起点として５m四方の方眼(グリッド)を設定した(第９･10図)。Ｙ軸にはアルファベット、Ｘ軸には数字を基準として付し、グリッド名を「Ａ－４」のように表記した。遺物の取り上げはこのグリッドナンバーを基準とした。小平２遺跡、小平３遺跡の調査は併行してこれを行った。

調査終了後、平成15年には山形県埋蔵文化財センターにおいて、出土遺物整理さらには記録整理などの報告書刊行作業が行われた。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

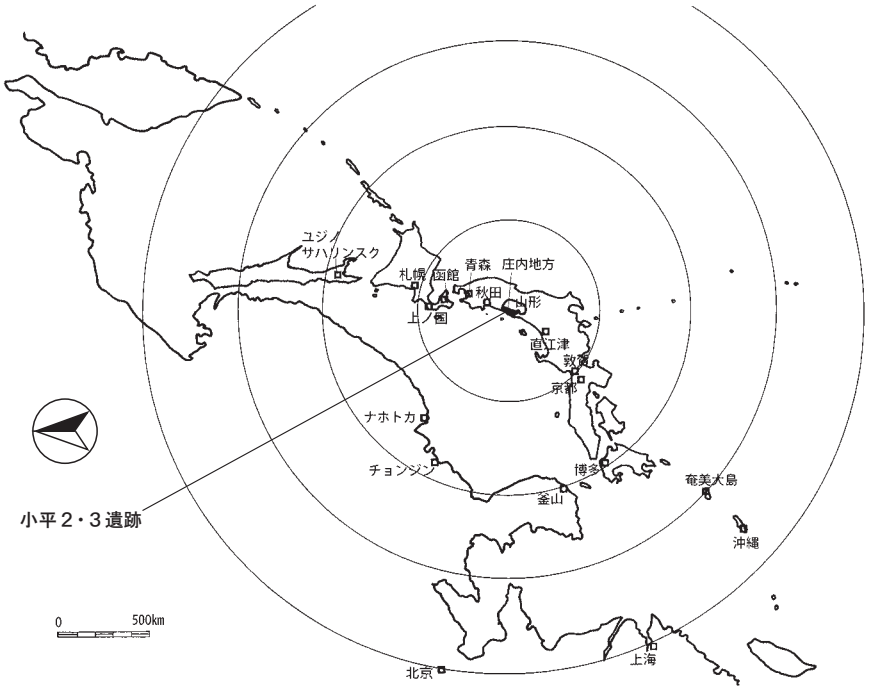
山形県は現在一つの行政区分で成立しているものの、その内部は独立的な四つの地域から成る。すなわち､「置賜」「村山」「最上」、そして小平２・３遺跡の所在する「庄内」である。その地理的状況は、日本海に面する「庄内」と、内陸地方であるそれ以外の三地域に二分される。

庄内地方

庄内地方は、最上川の河口に展開する庄内平野と、北には鳥海山、南には摩耶山、金峰山、東には月山がそびえ立ち、西側は海岸砂丘で閉ざされる。海岸砂丘は約35㎞にも及び、江戸期からの植林により、松林となっている。これらの障壁に囲まれて、南北を長軸とする細長い平野として庄内平野は存在する。南北55㎞、東西幅は最北部遊佐町付近では約３㎞、南部鶴岡市付近では約25㎞に達する。この北西約30㎞の海上には、山形県のただ一つの離島である「飛島」が浮かぶ。小平２・３遺跡の所在する八幡町は、庄内平野の東側、出羽丘陵に境を接する辺りに位置している。

小平２・３遺跡の位置

第１図は、小平２・３遺跡の位置を列島の中で表現したものであるが、当地から北側に500㎞付近には、中世の交易拠点である余市大川遺跡･上ノ国勝山館･志海苔館が所在する。この地域から札幌にかけては９～10世紀代には須恵器がより南の地域から持ち込まれ、活発な交易が行われていたことが知られている。同じく南側には敦賀･平安京が位置する。古代出羽国とこれらの都市の重要な関係は言うまでもないことである。1000㎞付近には北サハリン南端のユジノサハリンスク、南に釜山･博多･太宰府、同じく2,000㎞付近には西に北京、南に上海が位置する。



第１図　小平２・３遺跡位置図

庄内砂丘

海岸砂丘は「庄内砂丘」と呼ばれ、北は吹浦から南は湯野浜までの約35㎞、東西は約2.5㎞であり、途中いくつかの河川で切断されるものの、日本では鳥取砂丘に次ぐ規模を有している。庄内砂丘を切断する河川は、最上川、赤川、日向川の３河川を数えるが、現赤川河口は新しく開削されたものであり、旧流路は最上川の河口付近の砂堆の内側で合流していた（第２・３図、第２図出典は有賀友子 1984「庄内平野の地形発達」『東北地理』第36巻１号より）。当地域の河川の位置と標高の分布を現況で図示したのが第３図である。

庄内平野の形成

有賀友子は庄内平野の形成史を整理している（第２図）。約4,000yB.P.には、現在の海水準とほぼ同じ高さに位置し、約1,200yB.P.では、海岸砂丘は形成され、扇状地の形成も安定し、各河川は沖積面を下刻する傾向にあるという（有賀1984）。

基本的には現在の地形の形成をこの時代までに溯って見ることが出来ることになり、小平２・３遺跡に関連する時期では、ほとんど現況地形と相違がないと見ることができる。

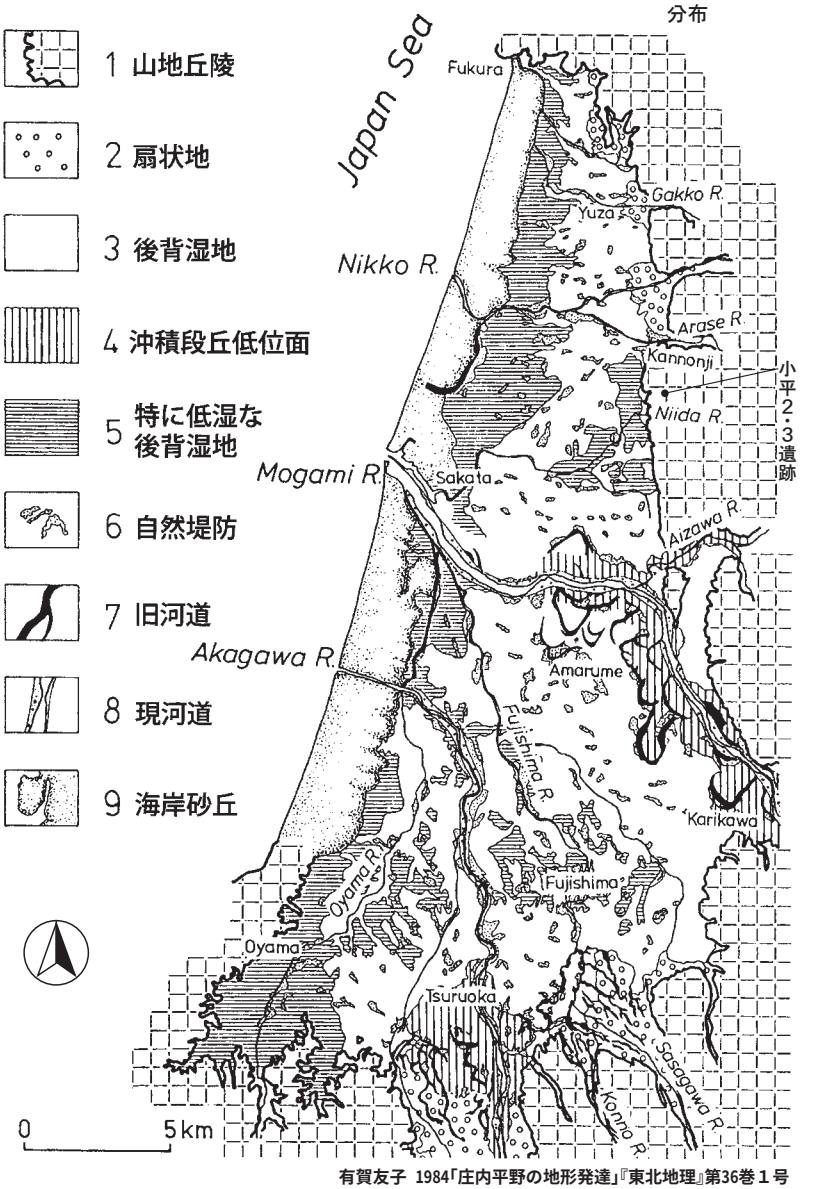
各砂丘の形態と分布

角田清美は各砂丘の形態と分布を検討している。砂丘は５つの砂丘列に分かれ、それぞれが時間差を持って成立しているという。砂丘内には考古遺物を含む場合のある「クロスナ層」が３層形成され、砂丘形成の休止期に発達する古土壌である「クロスナⅠ～Ⅲ層」の成立時期は、それぞれ、4000年以前、3500年から1500年～1000年以前、16世紀代となるという（角田1976）。

小平２・３遺跡に関連する時期について注目すれば、クロスナⅡ層が重要であり、この時期は、砂丘の活動に静穏な様相を窺うことができる。

砂堆の下から弥生土器あるいは須恵器や土師器が出土する事例がいくつか知られている。

佐々木七郎は酒田市黒森、鶴岡市七窪、鶴岡市三瀬宮の前の各遺跡から出土した弥生土器について報告している（佐々木七郎1976「砂丘出土の土器」『庄内考古学』第13号）。これらは天王山式の特徴を持ち、弥生時代終末に

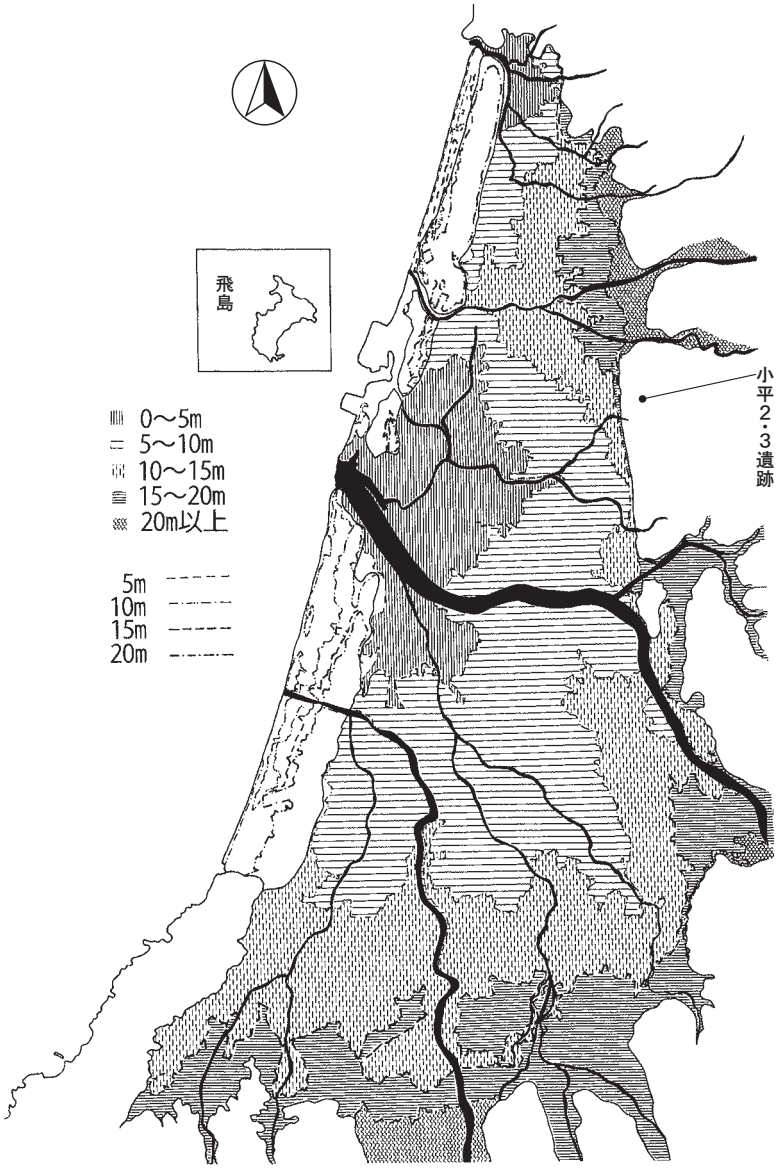


有賀友子 1984「庄内平野の地形発達」『東北地理』第36巻１号

第２図　庄内地方の微地形分類図

位置付けられる。小野忍は、このうちの酒田市黒森遺跡からは、土師器や須恵器も出土していると報告している。これらは1921年～1927年まで行われた赤川の河口の開削事業に伴い、砂丘を断ち割ったところ、砂丘下から現れた泥炭層から出土したものという（小野忍1976「酒田市黒森遺跡」『庄内考古学』第13号）。角田はこの地層を「クロスナⅡ層」と見ている（角田清美1976「庄内平野の地形について」『庄内考古学』第13号）。得られた土師器は小野によれば、「回転糸切り痕を伴う内黒土師器坏である」ということから、この年代は当地域の土器編年に照らせば９世紀中葉を中心とした時期と考えられよう。９世紀代かそれ以前の遺跡は、現在の砂丘下にも展開していることが想定出来る。

最上川北岸の平坦で低湿地にかからない土地は、出羽丘陵側に沿って細長く伸びている。開発に適した土地は限られ、最上川南岸の地域の方が低湿地にかからない土地が多い。とくに遊佐の南部から、酒田にかけての砂丘の内側は低湿であり、この地域では自然堤防の高まりを除いては遺跡が構えられることはない（第２図）。最上川南岸旧赤川の最上川との合流点付近も同様である。砂丘の東側には、最上川以北以南を問わず、広く後背湿地が分布する状況である。特に低湿な後背湿地や後背湿地を除いた部分というのは、平野部ではわずかであり、開発地として適切な箇所は少ない状況が見て取れる。最上川北岸の飽海郡ではこの傾向は著しい。また、低湿な後背湿地の中に島状に点在する自然堤防の存在は、遺跡の立地上重要である。



第３図　庄内平野標高分布図

Ⅲ　周辺の遺跡

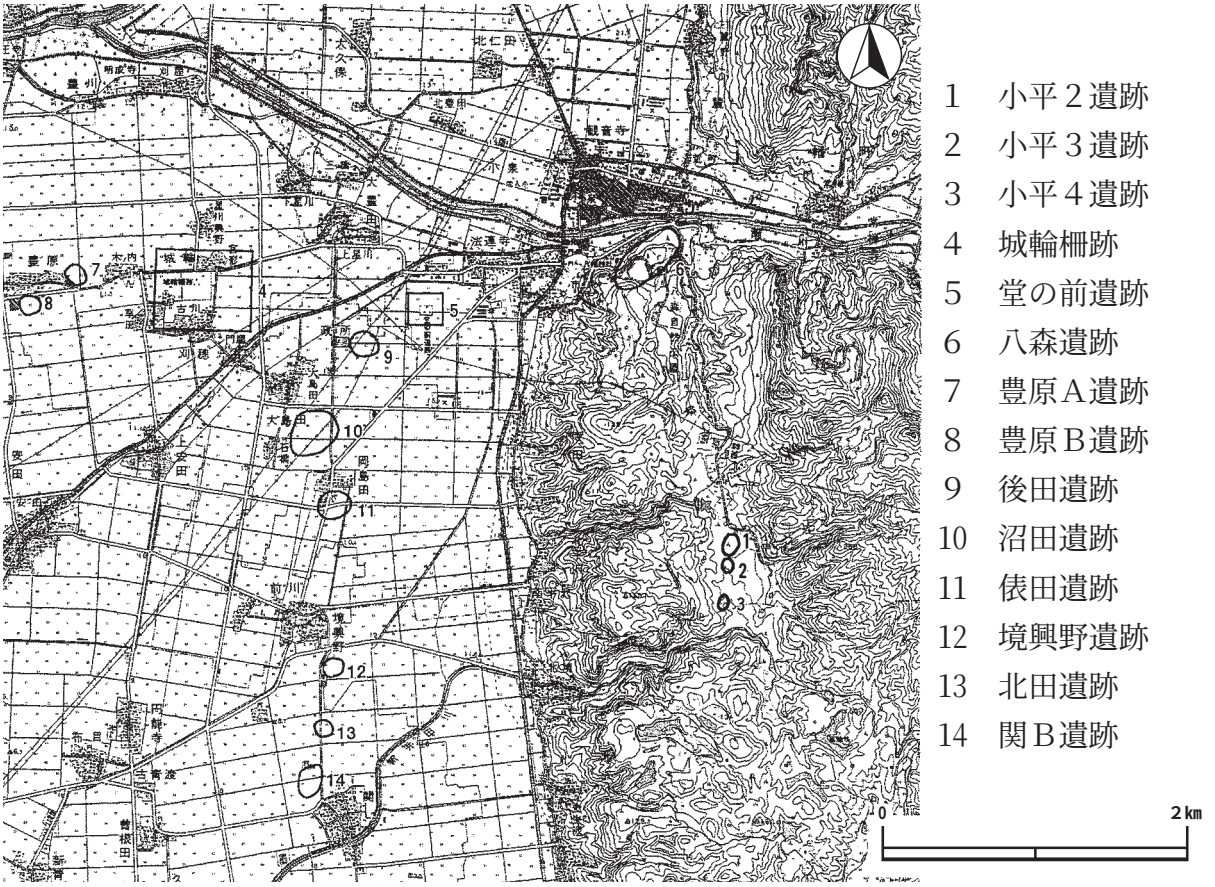
出羽国

現在の行政区分の山形県を指すであろう古代の国名は出羽国である。出羽国建国に関わる記事の初出は、越後国のより北方に突出した、現在の庄内地方のおそらく南部を割いて出羽郡を置くという、「続日本紀」の和銅元年(708)９月28日の記事である。出羽国の開発の一つの中心がこの日本海沿いの地域にあったことを示している。

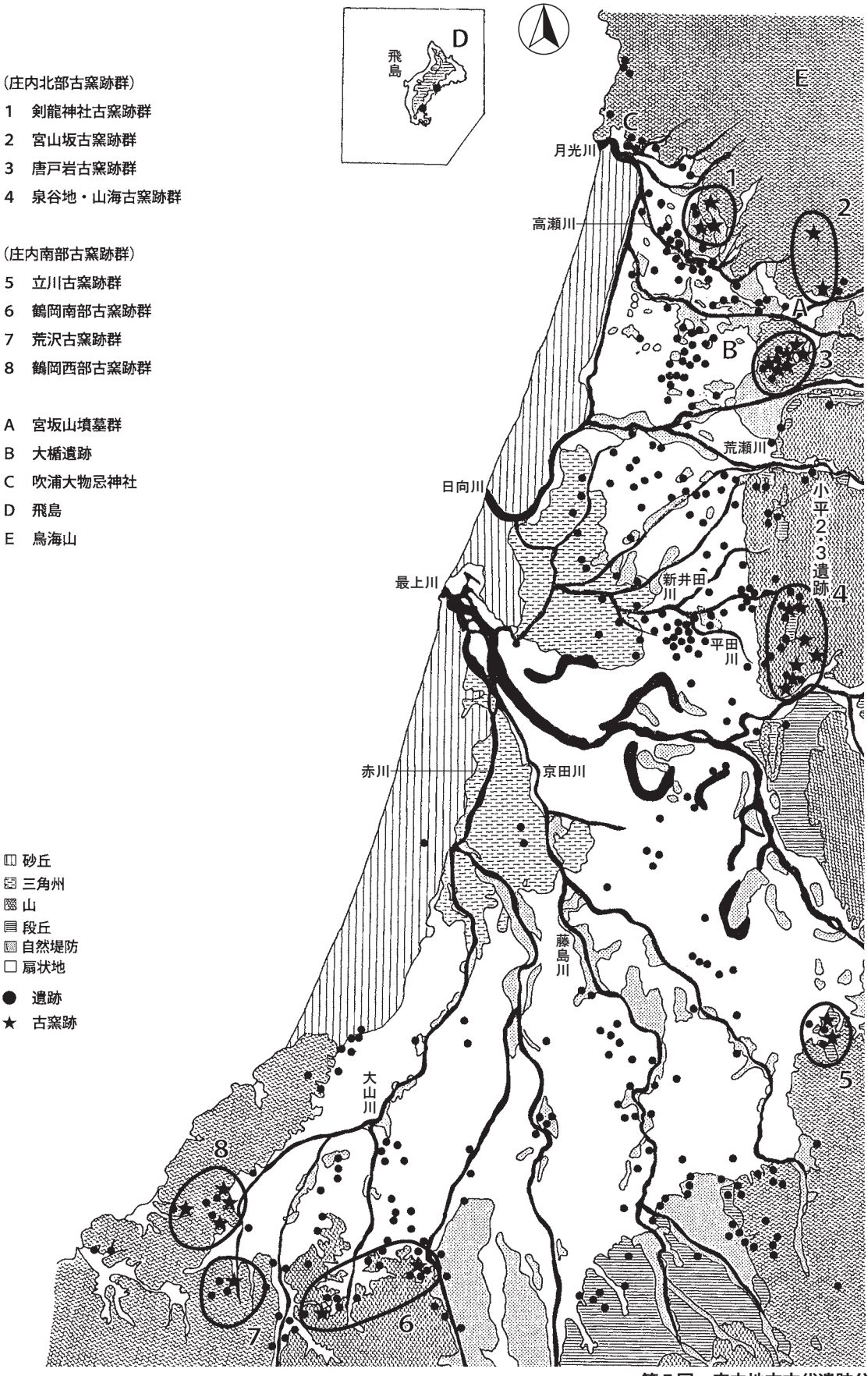
城輪柵跡

小平２・３遺跡が存在する地域は、出羽国経営に関連する遺跡が集中している(第４図)。北西４㎞には酒田市本楯に所在する「城輪柵跡」がある。『三代実録』仁和三年(887)の記事に『国府在井口』と見える出羽国府と考定されている。北西３㎞には出羽国分寺と考定されている「堂の前遺跡」、北方には移転出羽国府と考定されている「八森遺跡」が存在する。小平２・３遺跡の前面出羽国の主要官衙群が立地する場所には、遺跡が集中する傾向がある(第５図)。出羽丘陵中には、庄内北部古窯跡群のうち、泉谷地・山海古窯跡群が位置する。泉谷地窯跡群中には、出羽国府「城輪柵跡」の創建瓦を焼造したと考定される泉森窯跡も含まれている。これらの窯跡群は９世紀第１四半期を中心とした時期に最盛期を迎える。そして、９世紀第３四半期を中心とした時期に終焉をむかえることになる。こうした、生産遺跡のありかたはほぼ小平２・３遺跡の年代と相応する。

庄内北部古窯跡群



第４図　周辺遺跡分布図



第５図　庄内地方古代遺跡分布図

Ⅳ　調査の概要

1　調査区の概要

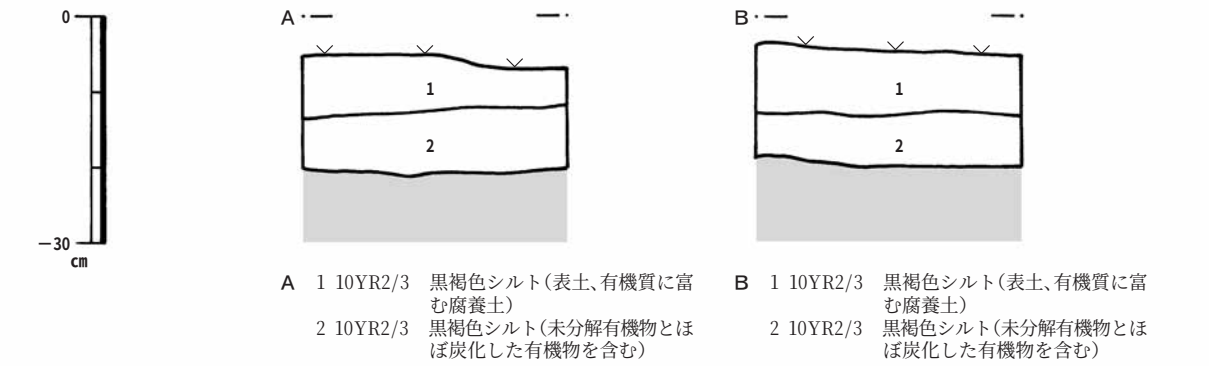
小平２・３遺跡は、庄内平野の平地部が丘陵に突き当たる、庄内平野の東辺を形成する出羽丘陵の中に位置している（巻頭カラー写真）。調査では農道の本道部分が調査され、南北に細長い調査区になっている。小平２遺跡の南側50m程の所に小平３遺跡は位置しており、さらに小平３遺跡の150m程南側に小平４遺跡が位置している。（第８図）

全体の位置関係としては、小平２遺跡がもっとも高所に位置し、標高は北側の最高地点で94mを測り、調査区の南端では74mとなり、急斜な地形となっている。遺構は北側の最高地点付近に集中している（第６・９図）。小平３遺跡は全体的な景観からすれば、小平２遺跡の小さな谷を隔てた南側になる。小平３遺跡では、北側での標高は80mを測り、調査区の南側では75mを測る。こちらは、小平２遺跡に比べ、やや緩やかな斜面となる。遺構は全体的にまばらに営まれている（第７・10図）。

2　小平２遺跡の調査区と層序

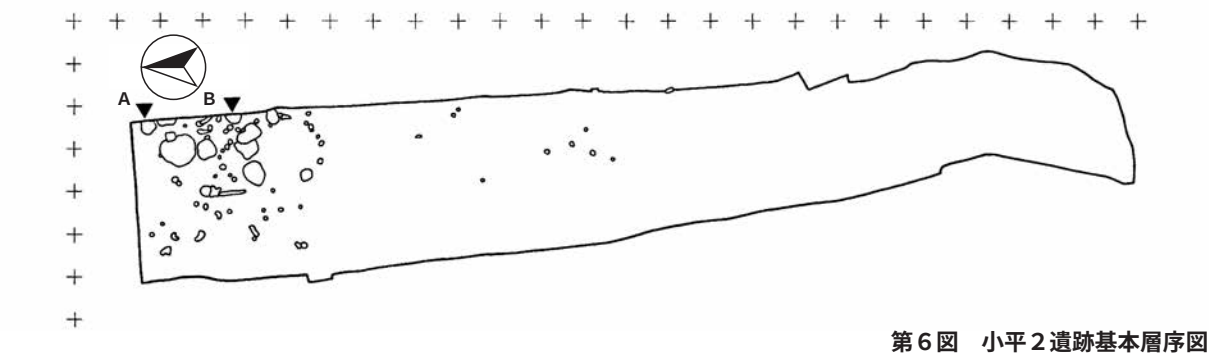
小平２遺跡の基本層序

小平２遺跡の基本層序を見てみれば、遺跡の地山を成すのはローム層であった。その上位に、シルト層があり、さらにその上には、現地表をなす黒褐色シルト層がある。この２層が遺物包含層となり、地山は遺構の基底面を形成していた。



A　1 10YR2/3　黒褐色シルト（表土、有機質に富む腐養土）
　　2 10YR2/3　黒褐色シルト（未分解有機物とほぼ炭化した有機物を含む）

B　1 10YR2/3　黒褐色シルト（表土、有機質に富む腐養土）
　　2 10YR2/3　黒褐色シルト（未分解有機物とほぼ炭化した有機物を含む）



第６図　小平２遺跡基本層序図

遺構面は１面検出され、奈良･平安時代の遺構･遺物が出土した。旧石器時代、縄文時代に属する遺物も少量検出されたが、遺物はすべてこの層から出土している。Ａ～Ｂとして、調査区の基本層序を採集した(第６図)。基本層序の採用にあたって、地層の堆積が明確であった場所を特に選んだ。Ａ～Ｂの土層断面図によれば、調査面までは20～30㎝程の堆積が見受けられる。

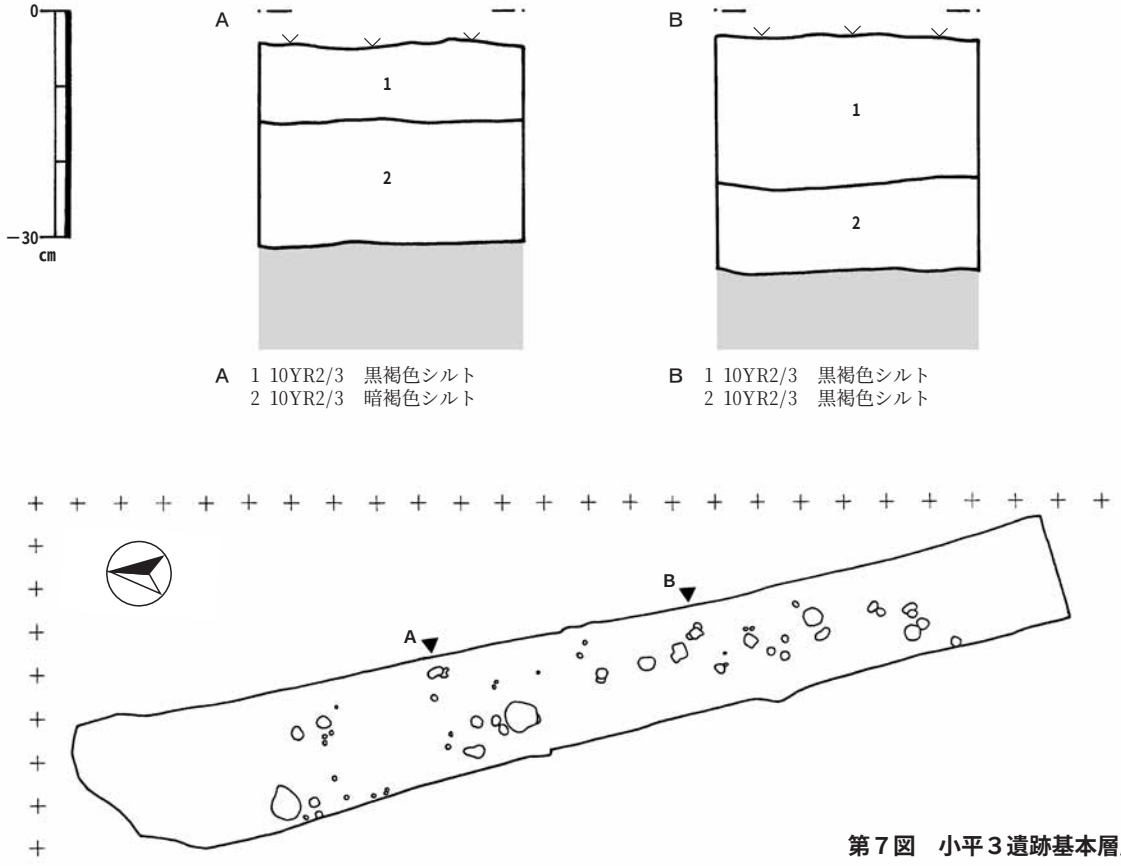
遺構は北側の最高地点付近に集中して位置している。ここには、平坦部分はわずか20m四方程度であるが、遺構の大部分がここに集中している。遺構には、土器の一括廃棄土坑、あるいは焼成土坑と思われるものがあり、焼成土坑としての可能性がある土坑については、巻末に分析の結果を載せている。今回の調査では、集落の周辺を調査している可能性がある。

３　小平３遺跡の調査区と層序

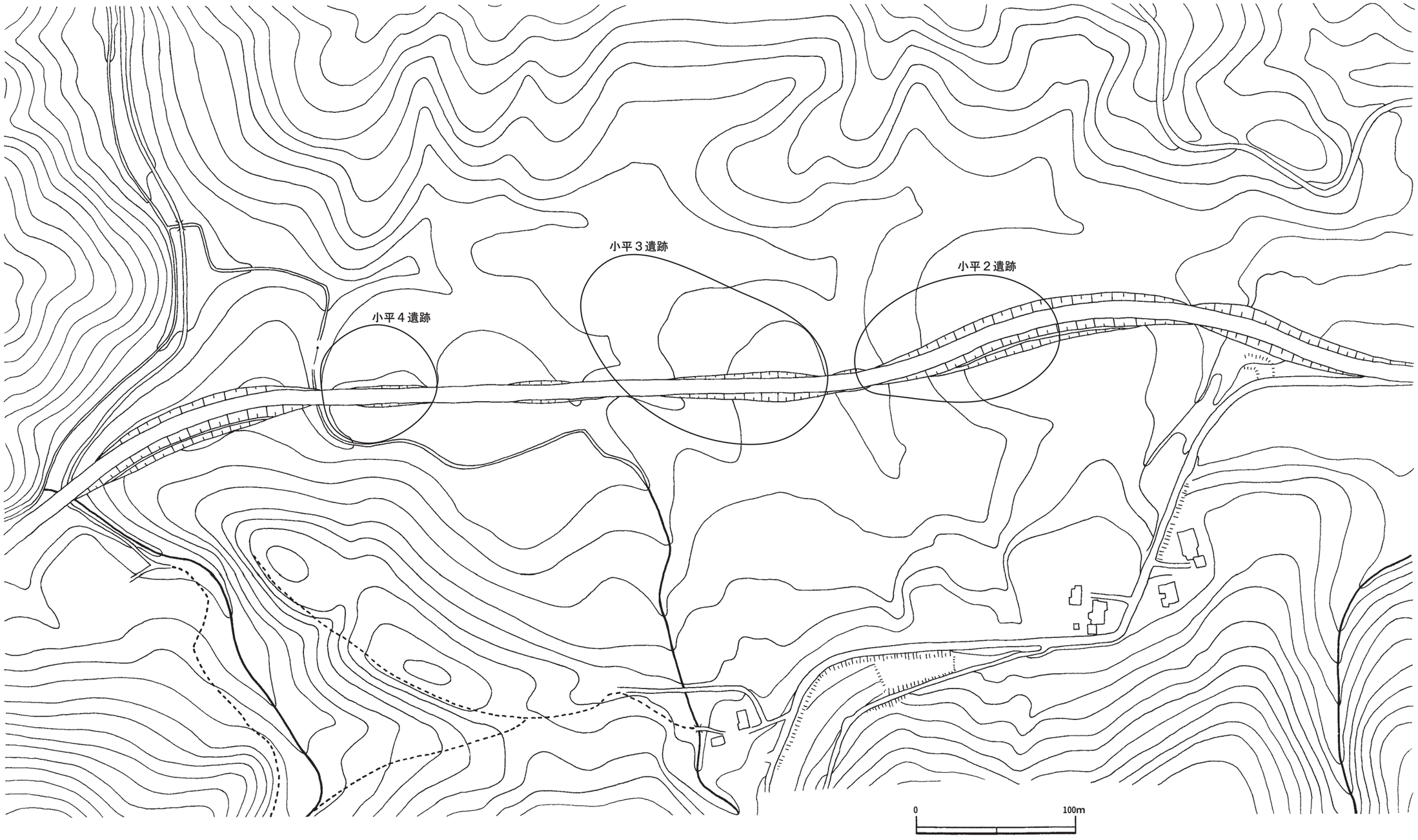
小平３遺跡の基本層序

小平３遺跡の基本層序を見てみれば、小平２遺跡の基本層序と同様であり、遺跡の地山を成すのはローム層であった。その上位に、シルト層があり、さらにその上には、現地表をなす黒褐色シルト層がある。この２層が遺物包含層となり、地山は遺構の基底面を形成していた。

遺構面は１面検出され、縄文時代、奈良･平安時代の遺構･遺物が出土した。旧石器時代、縄文時代に属する遺物も少量検出されたが､奈良･平安時代の遺物と一緒にすべてこの層から出土している。今回の調査では、集落の周辺を調査している可能性がある。Ａ～Ｂとして調査区の基本層序を採用した(第７図)。基本層序の採用にあたって、地層の堆積が明確であった場所を特に選んだ。Ａ～Ｂの土層断面図によれば、調査面までは20～30㎝程の堆積が見受けられる。



第７図　小平３遺跡基本層序図



第８図　調査区概要図

Ⅴ　検出された遺構

小平２・３遺跡から検出された遺構について、次に述べることとする。最初に小平２遺跡の遺構について述べ、次に小平３遺跡の遺構について述べる。

小平２遺跡からは、奈良・平安の時期の遺構が主に検出された。一部に、旧石器時代、縄文時代、近現代の遺物も検出されてはいるが、これらの時代に対応するような遺構の検出はできなかった。このため、この報告で図化できた遺構は、縄文時代が１遺構、奈良・平安時代が10遺構、時期不明が１遺構となっている。

小平２遺跡の遺構

小平３遺跡からは、奈良・平安を中心とする時期の遺構が主に検出された。一部に、縄文時代、近現代の遺物も検出されてはいるが、とくに近現代の時代に対応するような遺構の検出はできなかった。このために、ここで図化できた遺構は、奈良・平安時代が４遺構、時期不明が12遺構である。

小平３遺跡の遺構

図は、遺構平面図と、遺物出土状況、さらには遺構毎の出土遺物について提示している。こうした図をもとにしながら、最初に小平２遺跡の遺構について、次に小平３遺跡の遺構について、述べていきたい。

１　小平２遺跡の検出遺構

ＳＫ１遺構（第11・12・27～32図　図版５・６・12～15）

ＳＫ１遺構

調査区の北側中央に位置する、E-４・E-５・F-４・F-５グリッドで検出された。ここは、発掘区の高い部分にあたるところである。検出された土壙の規模については次のようになる。

平面形は円形を呈するものと思われる。長軸、短軸ともに約1.5m、検出面からの深さは約30㎝であり、比較的深い。ＳＫ１を切っている土壙と重なっている。新旧は、ＳＫ１土壙のほうが古い。

覆土の様子は人為堆積であり、５層に分けることができる。１層には炭化物を多く含む。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は平坦になっている。床面から遺構検出面にかけては、遺物が多い。検出面から底面まで、ほとんどまんべんなく遺物が含まれる。遺構の中央部に遺物が集中する傾向がある。遺物の土壙内の状況については、第11図で示した。完形の遺物は少ない。ほとんどが破片資料であるが、そのほとんどが復元によって、器形を知ることができる。

出土遺物としては、須恵器坏・高台付坏・蓋・長頸瓶、土師器坏・蓋・小型壺・長胴甕・鉢・堝、土師器内黒鉢の各器種がある（第12・27～32図、図版12～15）。従来庄内地方では検出例のほとんどない平底の長胴甕が注目される。この平底の長胴甕は山形市を中心とする山形県内陸地方に顕著な遺物であり、この地域の出土遺物としては、様相を違えている。

平底の長胴甕

ＳＫ２遺構（第13・14・33・34図　図版５・６・16・17）

ＳＫ２遺構

調査区の北東に位置する、F-４・F-５・G-４・G-５グリッドで検出された。ここは、発掘区の高所の遺構密集地点にあたるところである。検出された土壙の規模については次のようになる。

平面形はほぼ円形を呈するものと思われる。長軸は約2.5m、短軸は約２m、検出面からの深

さは約20㎝であり、比較的浅い。

覆土の様子は人為堆積であり、７層に分けることができる。炭化物、焼土を含む。壁の立ち上がりは割合に緩やかであり、床面は、ほぼ平坦になっている。検出面から底面まで、ほとんどまんべんなく遺物が含まれる。遺物の存在は遺構の東側に遺物が集中する傾向がある。遺物の土壙内の状況については、第13図で示した。やはり完形の遺物は少ない。ほとんどが破片資料であるが、そのほとんどが復元によって、器形を知ることができる。底部には、一つのピットが存在するが、むしろ底面の凹凸の可能性が強い。

出土遺物としては、須恵器坏・長頸瓶、土師器小型壺・長胴甕・堝、土師器内黒坏の各器種がある（第14・33・34図、図版16・17）。この遺物には、土師器堝、土師器長胴甕などの大型の遺物が多い。また、土師器堝には、平底のものと丸底のものとがあり、大型である。土師器長胴甕の底部は丸底を呈するものと思われる。

ＳＫ３遺構

ＳＫ３遺構（第15・16・35・36図　図版５・６・18～20）

調査区の北東に位置する、Ｆ-４・Ｇ-４グリッドで検出された。ここは、発掘区のもっとも高所の遺構密集地点にあたるところである。検出された土壙の規模については次のようになる。

平面形はほぼ円形を呈するものと思われる。長軸は約3.7m、短軸は約3.2m、検出面からの深さは約50㎝であり、比較的深い。周囲の土壙の中で一番規模が大きい。

覆土の様子は人為堆積であり、７層に分けることができる。炭化物、焼土を含む。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は平坦になっている。床面には遺物はまばらだが、検出面から底面までの覆土にはまんべんなく遺物が含まれる。遺物は東側にやや集中する傾向があり、東側から廃棄された様相を示している。

出土遺物としては、須恵器坏・高台付坏・蓋・鉢（佛生鉢）、土師器坏・壺・堝、土錘の各器種がある（第16・35・36図、図版18～20）。土壙内からの土錘の出土は、周囲の土壙には見られず、この土壙のみの事例となる。注目すべきは鉢（佛生鉢）の出土である。これは、仏教に関連する遺物として注目されているが、庄内地方での出土例には恵まれていなかった。

鉢

ＳＫ４遺構

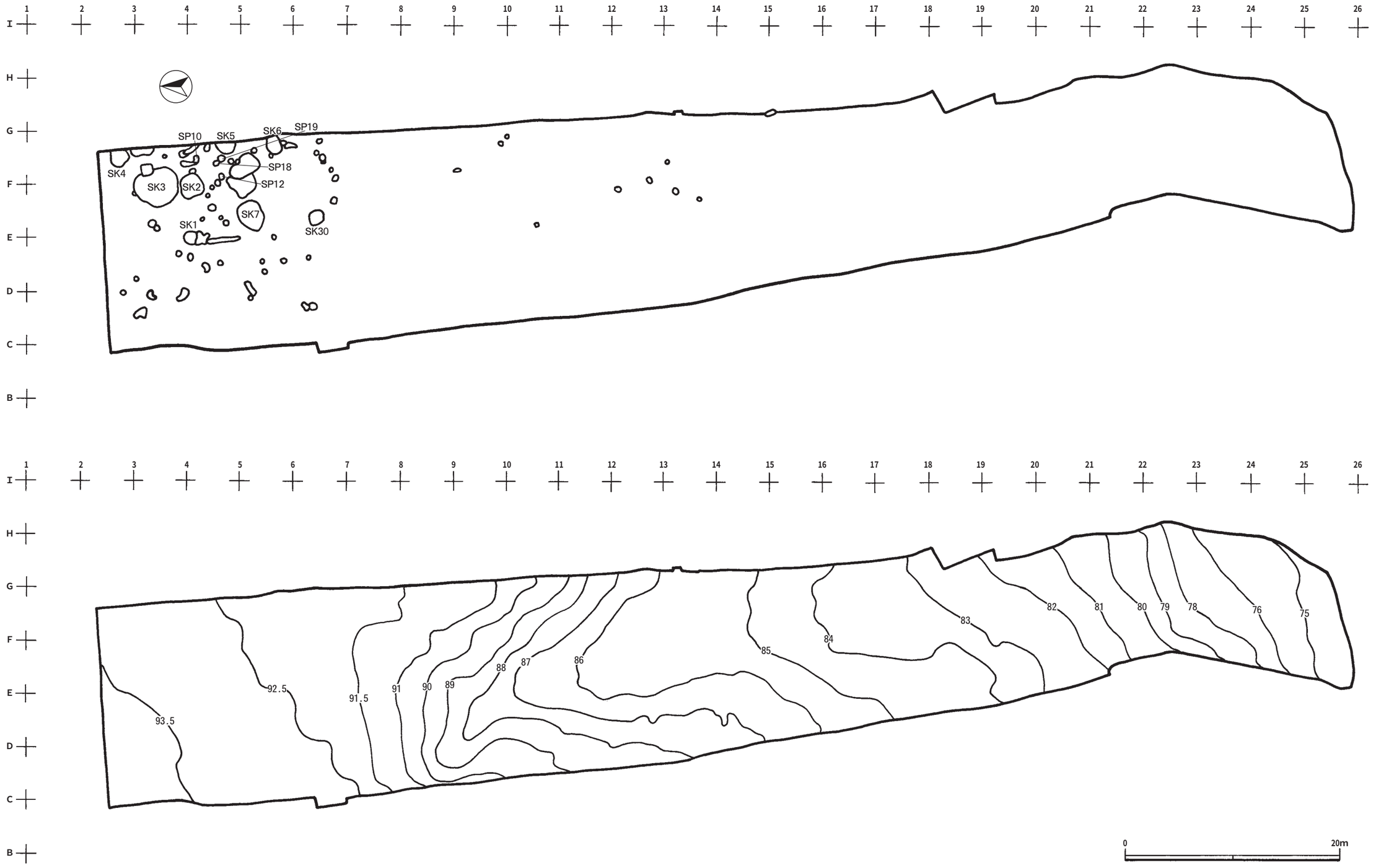
ＳＫ４遺構（第17・37図　図版６・21）

調査区の北東隅に位置する、Ｇ-３グリッドで検出された。ここは、発掘区の高所の遺構密集地点付近にあたるところである。検出された土壙の規模については次のようになる。

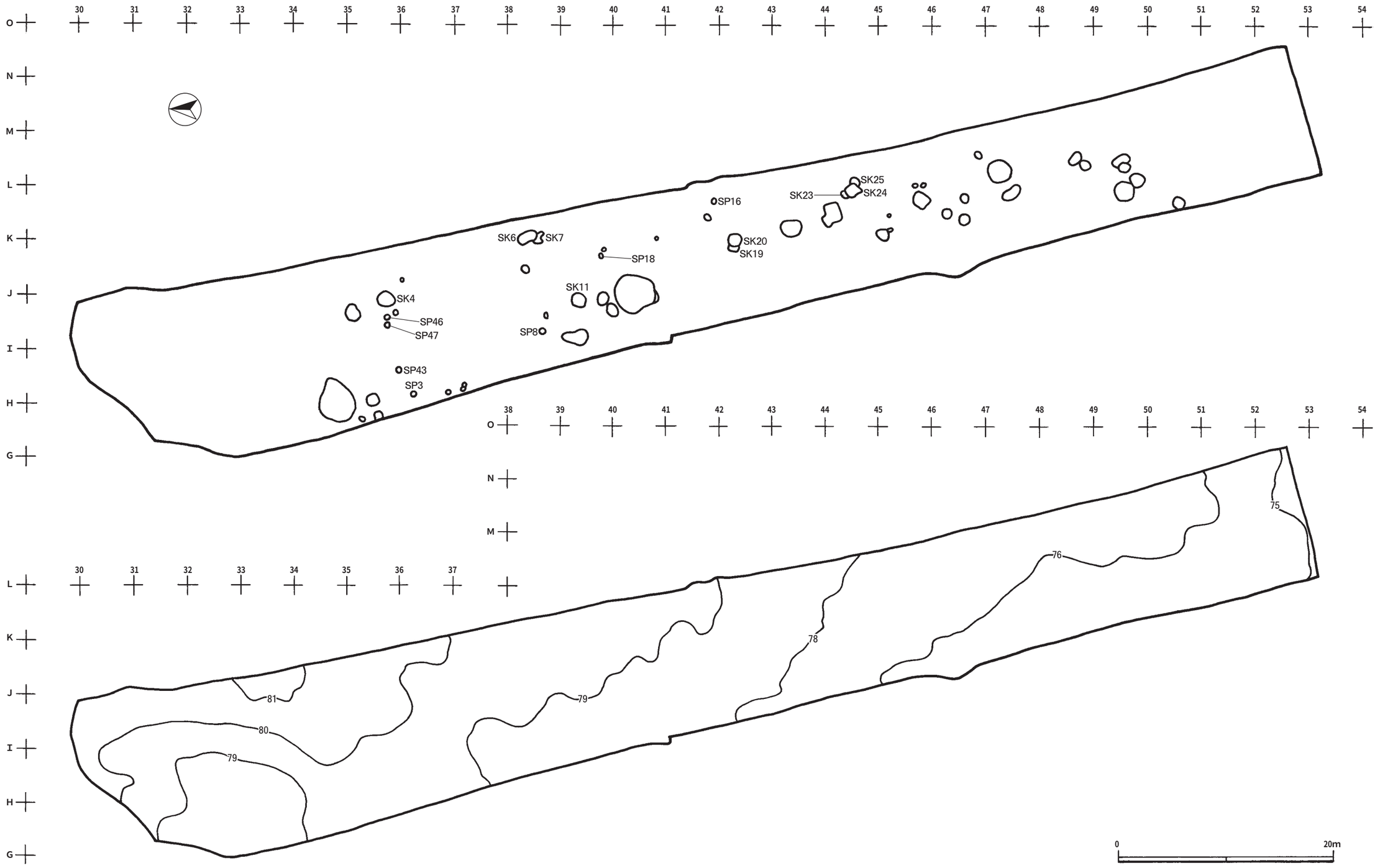
平面形はほぼ円形を呈するものと思われるが、調査区では調査区の壁に隠れており、一部しか検出されていないため、長軸は不明である。短軸は約2.5m、検出面からの深さは約20㎝であり、比較的深い。土壙内に小さなピットがあるが、性格は不明である。おそらく東西に長軸を持つ長楕円形を呈するものと思われる。

覆土の様子は人為堆積であり、２層に分けることができる。第１層には炭化物を含む。壁の立ち上がりは割合に緩やかであり、床面は平坦になっているが、一部のみの検出のため判然としない。出土遺物は発掘区の境界付近に一部が密集した状況で見られる。以前の土壙と同じく、東側から廃棄された可能性がある。

出土遺物としては、須恵器坏・大甕、土師器堝の各器種がある（第17・37図、図版21）。この土壙出土の土師器堝は、いづれも丸底のものである。須恵器大甕は破片がいくつか出土しているが、接合の状態はよくなかった。



第９図　小平２遺跡遺構標高分布図



第10図　小平３遺跡遺構標高分布図

ＳＫ５遺構（第18･37図　図版６･22）　ＳＫ５遺構

調査区の北東に位置する、G-５グリッドで検出された。ここは、発掘区の高所の遺構密集地点にあたるところである。検出された土壙の規模については次のようになる。

平面形はほぼ円形を呈するものと思われるが、調査区の壁に一部がかかってしまっているために、今回の調査区では一部しか検出されていない。このため平面形は不明といわざるを得ないが、おそらく円形を呈するものと考えられる。長軸は不明であるが、現存の短軸は約２m、検出面からの深さは約20㎝であり、比較的深い。

覆土の様子は人為堆積であり、４層に分けることができる。４層は炭化物層であり、すべての層に焼土を含む。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は平坦になっている。床面は一部のみの検出のため、遺物出土量はあまり多いとはいえないが、検出面から底面まで、まんべんなく遺物が含まれる。特に、西側に多く遺物が含まれている状況を見ることができる。遺物は破片が多いが、少量接合するものがある。

出土遺物としては、須恵器坏･横瓶･大甕、土師器長胴甕底部の各器種がある（第18･37図、図版22）。ＳＫ７遺構出土遺物と接合した横瓶破片の出土が注目され、このＳＫ５遺構とほぼ同時期の営みである可能性が高い。

ＳＫ６遺構（第19･37図　図版７･23）　ＳＫ６遺構

調査区の北東に位置する、G-６グリッドで検出された。ここは、発掘区の高所の遺構密集地点にあたるところである。検出された土壙の規模については次のようになる。

平面形は南北に長軸を持つ楕円形を呈するものと思われるが、調査区では一部しか検出されていないため、全体の形状は不明である。現存の短軸は約1.6m、検出面からの深さは約10㎝であり比較的浅い。

覆土の様子は人為堆積であり、２層に分けることができる。１層に焼土を含む。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は平坦になっており遺物は少ない。遺物は全体にまんべんなく薄く分布している。

出土遺物としては、土師器堝がある。あわせて、図示した土師質の遺物も出土しているが、破片資料であり、器形、用途は不明である。この遺物は、おそらく円形を呈する平面形を有し、底面は平坦となる。底面から上部にかけては透かしが入れられているものである。（第19･37図、図版23）。

ＳＫ７遺構（第20～22･38～42図　図版７･23～26）　ＳＫ７遺構

調査区の北側中央付近に位置する、F-５･F-６グリッドで検出された。ここは、発掘区の高所の遺構密集地点にあたるところである。検出された土壙の規模については次のようになる。

平面形はほぼ円形を呈するものと思われる。長軸は約3m、短軸は約2.2m、検出面からの深さは約10～15㎝であり、比較的浅い。土壙内に２つの小さなピットがあるが、性格は不明である。

覆土の様子は人為堆積であり、２層に分けることができる。１層には炭化物を含む。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は平坦になっている。床面には遺物が多く、遺構内南半に集中している。おそらく、東南の方向から廃棄されているものと考えることができる。遺物の土壙内の状況については、第21図で示した。遺物は破片であり、全形を知りうる状態で廃棄されているものは少なかった。遺物は密集した状態で存在している。完形の遺物は少ないが、ほと

んどが復元によって、器形を知ることができる。

出土遺物としては、須恵器坏・高台付坏・蓋・長頸瓶・横瓶・大甕、土師器小型壺・長胴甕・堝の各器種がある（第22・38～42図、図版23～26）。ＳＫ５出土遺物と接合した横瓶の出土が注目される。おそらくＳＫ５遺構と同時期に営まれている遺構であろうことがわかる。またかなり大型の長胴甕（50）が出土していることも興味深い。この長胴甕の破片はＳＫ１からも出土し、両者は接合した。これによって、ＳＫ１・ＳＫ５・ＳＫ７の各遺構は時期的に関連性を有していることがわかった。

ＳＫ30遺構

ＳＫ30遺構（第23図　図版９）

調査区の北側中央付近に位置する、Ｆ-７グリッドで検出された。ここは、発掘区の高所の遺構密集地点付近にあたるところである。検出された土壙の規模については次のようになる。

平面形はほぼ円形を呈するものと思われる。長軸は約1.3m、短軸は約1.5m、検出面からの深さは約１mであり、非常に深い。

覆土の様子は人為堆積であり、４層に分けることができる。１、２層に炭化物を少量含む。壁の立ち上がりは非常に急であり、床面は平坦になっている。遺物は出土していない。土壙中心部にあるピットは、何らかの杭状の構造を有した痕跡と思われる。土壙の性格としては、動物の狩猟で使われる、陥とし穴遺構と考えられる。こうした遺構は、等高線などに並んで営まれることが多いのだが、ここではこの遺構だけが検出されている。おそらく、調査区以外の部分にこうした遺構が並ぶものと考えられる。造営時期は類例からして縄文時代であろうと考えておきたい。

陥とし穴

ＳＰ12遺構

ＳＰ12遺構（第23・43図　図版８・27）

調査区の北東に位置する、G-５グリッドで検出された。ここは、発掘区の高所の遺構密集地点にあたるところである。検出されたこの小ピットの規模について述べれば、次のようになる。

平面形はほぼ円形を呈するものと思われる。長軸は約60㎝、短軸は約50㎝、検出面からの深さは約10～20㎝であり、比較的浅い。小ピット内に、２つずつ大きさの異なるピットが４つあるが、性格は不明である。

覆土の様子は人為堆積であり、５層に分けることができる。１層に炭化物と焼土粒を含む。３層からは遺物が出土している。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は多少凹凸になっている。この遺構の性格としては木の根などによる攪乱あるいは、数個のピットの集合体である可能性がある。

出土遺物としては、須恵器坏がある（第43図、図版27）。

ＳＰ10遺構

ＳＰ10遺構（第24・43図　図版８・27）

調査区の北東に位置する、G-５グリッドで検出された。ここは、発掘区の高所の遺構密集地点にあたるところである。検出されたピットの規模については次のようになる。

平面形はほぼ円形を呈するものと思われる。長軸は約60㎝、短軸は約50㎝、検出面からの深さは約30㎝であり、比較的深い。小ピット内にひとまわり小さなピットがあり、遺物が出土しているが、性格は不明である。

覆土の様子は人為堆積であり、２層に分けることができる。１層に炭化物を含む。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は平坦になっている。

このピットの性格としては、建物の柱穴である可能性が高いと思われる。しかしながら、周囲にこの柱穴と組むような柱穴は検出することができなかった。

出土遺物としては、須恵器坏がある(第43図、図版27)。

ＳＰ18遺構（第24図）　ＳＰ18遺構

調査区の北東に位置する、G-５グリッドで検出された。ここは、発掘区の高所の遺構密集地点にあたるところである。検出された小ピットの規模については次のようになる。

平面形はほぼ円形を呈するものと思われる。長軸は約50㎝、短軸は約40㎝、検出面からの深さは約20㎝であり、比較的深い。付属するようなかたちで極小ピットがあるが、性格は不明である。

覆土の様子は人為堆積であり、１層のみで、炭化物を含む。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は平坦になっている。

この遺構の性格としては木の根などによる攪乱あるいは、数個のピットの集合体である可能性がある。建物の柱穴である可能性もあるが、周囲にこの柱穴と組むような柱穴は検出することができなかった。

遺物の出土はほとんどなかった。

ＳＰ19遺構（第24･43図　図版８･27）　ＳＰ19遺構

調査区の北東に位置する、G-５グリッドで検出された。ここは、発掘区の高所の遺構密集地点にあたるところである。検出された小ピットの規模については次のようになる。

平面形はほぼ円形を呈するものと思われる。長軸は約50㎝、短軸は約40㎝、検出面からの深さは約20㎝であり、比較的深い。ＳＰ19を切っている小ピットと重なっている。付属するようなかたちでこれよりも小さいピットがある。建物の柱穴である可能性もあるが、周囲にこの柱穴と組むような柱穴は検出することができなかった。性格は不明である。

覆土の様子は人為堆積であり、２層に分けることができる。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は平坦になっている。

出土遺物としては、須恵器高台付坏がある(第43図、図版27)。

２　小平３遺跡の検出遺構

ＳＫ11遺構（第25･46図　図版10･29）　ＳＫ11遺構

調査区の中央部北寄りに位置する、Ｊ-40･Ｋ―40グリッドで検出された。ここは、発掘区の比較的なだらかな中間地点にあたるところである。検出された土壙の規模については次のようになる。

平面形は各辺はそろわないものの、方形を呈するものと思われる。長軸、短軸ともに約1.2ｍを示している。検出面からの深さは約20㎝であり、比較的深い。

覆土の様子は人為堆積であり、３層に分けることができる。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は平坦になっている。１、２層に炭化物を含む。２層西側壁周には焼土層がある。西側から投げ込んだように、拳大からそれよりもやや大きい礫が集中して存在している。この礫の間に挟まれる形で、遺物も存在していた。遺物は破片になっていたが、復元によって全形を知ることができるものがある。床面には大きな礫が多い。

出土遺物としては、須恵器大甕、土師器長胴甕・壺の各器種がある（第46図）。須恵器大甕には、別個体と融着した部分がある。土師器長胴甕・壺は、隣接するＪ-39グリッドの出土遺物と接合し、同時性を知ることができ、さらには復元によって器形の全体を知ることができる。

ＳＫ４遺構

ＳＫ４遺構（第25図　図版10）

調査区の北側に位置する、J-36・K-36グリッドで検出された。ここは、発掘区の比較的高所で、周囲に小ピットが点在するところである。検出された土壙の規模については次のようになる。

平面形はややふくらむ円形を呈するものと思われる。楕円形とまでは言い切れないであろう。この土壙の長軸は約1.6m、短軸は約1.5mである。検出面からの深さは約30㎝であり、比較的深い。

覆土の様子は人為堆積であり、２層に分けることができる。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は平坦になっている。１層には炭化物を含む。１、２層から床面かけて大小の礫が混入している。こうした状況はＳK11と似るが、ＳK11と比較すればこちらのＳＫ４の方が礫の遺存状況は少ない。礫は土壙の東側に多く、東側から投げ込まれたような状況を示している。

遺物の出土はほとんどなかった。

ＳＫ６遺構

ＳＫ６遺構（第25図　図版11）

調査区の中央部北寄りに位置する、K-39、L-39グリッドで検出された。ここは、発掘区の比較的なだらかな中間地点にあたるところである。検出された土壙の規模については次のようになる。

断面図ではＳＫ７との切り合いが見られるが、平面図では明確に確認することができなかった。平面形は、ＳＫ７と合わせて楕円形を呈し、長軸は約2.2m、短軸は約1.2mである。検出面からの深さは約10㎝であり、比較的浅い。ＳＫ６・７内に小ピットを１つ含んでいるが、性格は不明である。

覆土の様子は人為堆積であり、３層に分けることができる。１層に炭化物を含み、１、２層には焼土を含む。壁の立ち上がりは割合に緩やかであり、床面はほぼ平坦だが、一部に凹凸がみられる。

遺物の出土はほとんどなかった。

ＳＫ７遺構

ＳＫ７遺構（第25図　図版11）

調査区の中央部北寄りに位置する、K-39、L-39グリッドで検出された。ここは、発掘区の比較的なだらかな中間地点にあたるところである。検出された土壙の規模については次のようになる。

断面図ではＳＫ６との切り合いが見られるが、平面図では明確に確認することができなかった。平面形は、ＳＫ６と合わせて楕円形を呈し、長軸は約2.2m、短軸は約1.2mである。検出面からの深さは約15㎝であり、比較的浅い。ＳＫ６・７内に小ピットを１つ含んでいるが、性格は不明である。

覆土の様子は人為堆積であり、２層に分けることができる。壁の立ち上がりはやや急であり、床面は平坦になっている。

遺物の出土はほとんどなかった。

ＳＫ19・20遺構

ＳＫ19・20遺構（第26図）

調査区の中央部に位置する、K-43、L-43グリッドで検出された。ここは、発掘区の比較的なだらかな中間地点にあたるところである。検出された土壙の規模については次のようになる。

断面図ではＳＫ19･20との切り合いが見られるが、平面図では明確に確認することができなかった。平面形は、ＳＫ19･20と合わせて歪な円形を呈し、長軸は約1.8m、短軸は約1.5mである。検出面からの深さは約10～30㎝程と見られるが、ＳＫ20との境界は不明確である。このために、一括して表記した。

覆土の様子は人為堆積であり、３層に分けることができる。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は深さの異なる部分があり、それぞれにほぼ平坦となっている。

遺物の出土はほとんどなかった。

ＳＫ23遺構（第26図）　ＳＫ23遺構

調査区の中央部南寄りに位置する、L-45グリッドで検出された。ここは、発掘区の比較的なだらかな中間地点にあたるところである。検出された土壙の規模については次のようになる。

断面図ではＳＫ24との切り合いが見られるが、平面図では明確に確認することができなかった。平面形は、ＳＫ24･ＳＫ25と合わせて歪な楕円形を呈し、長軸は約2.1m、短軸は約1.2mである。検出面からの深さは約10㎝であり、比較的浅い。

覆土の様子は人為堆積であり、１層のみである。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は平坦になっている。

遺物の出土はほとんどなかった。

ＳＫ24遺構（第26図）　ＳＫ24遺構

調査区の中央部南寄りに位置する、L-45グリッドで検出された。ここは、発掘区の比較的なだらかな中間地点にあたるところである。検出された土壙の規模については次のようになる。

断面図ではＳＫ23･ＳＫ25との切り合いが見られるが、平面図では明確に確認することができなかった。平面形は、ＳＫ24･ＳＫ25と合わせて歪な楕円形を呈し、長軸は約2.1m、短軸は約1.2mである。検出面からの深さは約30㎝であり、比較的深い。

覆土の様子は人為堆積であり、２層に分けることができる。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は平坦になっている。床面には礫を多く含んでいる。

遺物の出土はほとんどなかった。

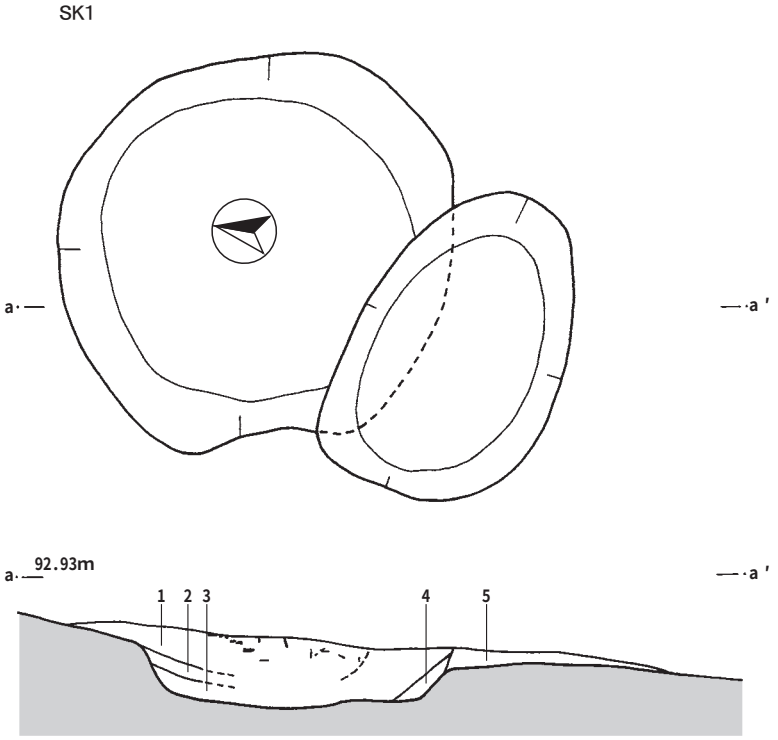
ＳＫ25遺構（第26図）　ＳＫ25遺構

調査区の中央部南寄りに位置する、L-45･M-45グリッドで検出された。ここは、発掘区の比較的なだらかな中間地点にあたるところである。検出された土壙の規模については次のようになる。

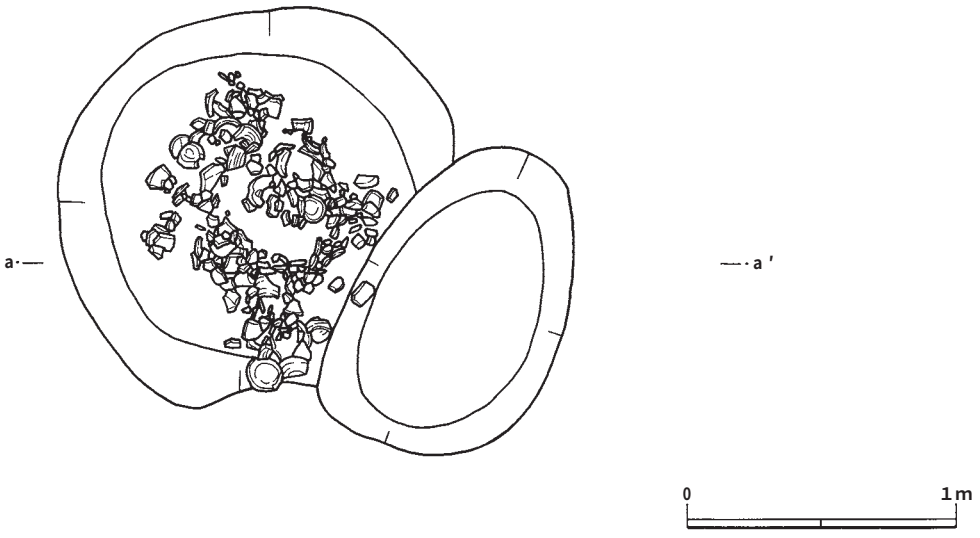
断面図ではＳＫ23･ＳＫ25との切り合いが見られるが、平面図では明確に確認することができなかった。平面形は、ＳＫ24･ＳＫ25と合わせて歪な楕円形を呈し、長軸は約2.1m、短軸は約1.2mである。検出面からの深さは約25㎝であり、比較的深い。

覆土の様子は人為堆積であり、２層に分けることができる。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は平坦になっている。床面から検出面まで、２層にまたがり大きな石が存在する。

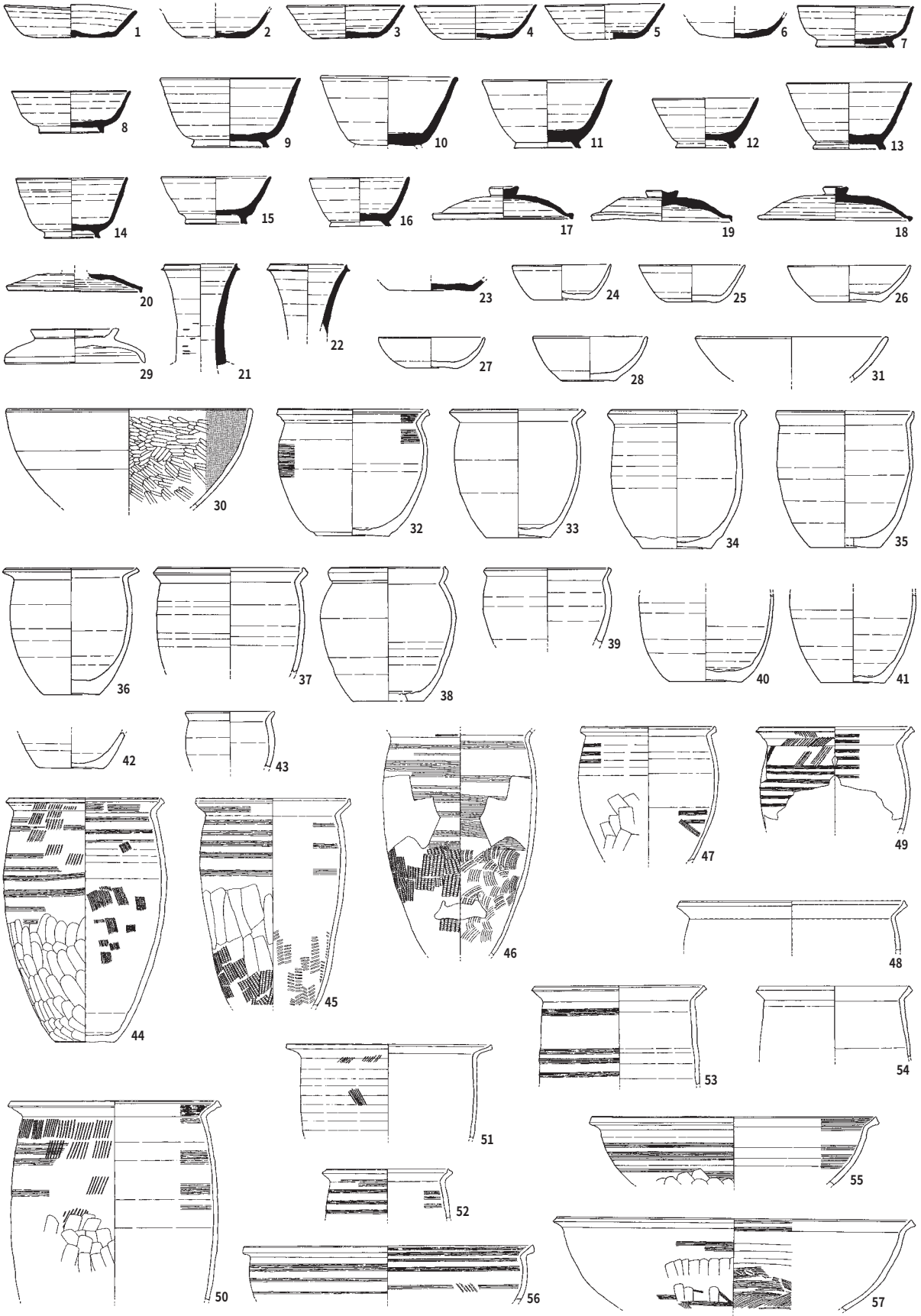
遺物の出土はほとんどなかった。



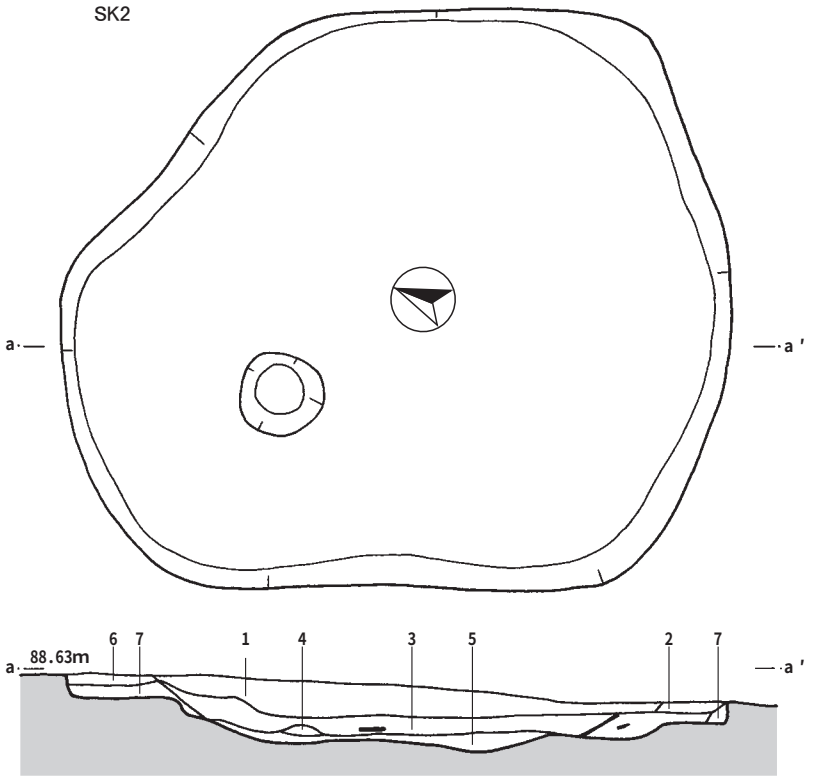
SK1
1 10YR2/3　黒褐色シルト（炭化物を多く含む。土器包含）
2 10YR2/3　黒褐色シルト（10YR4/4褐色粘土質シルトをブロック状で10%含む）
3 10YR3/3　暗褐色シルト（2に同じ）
4 10YR3/3　暗褐色粘土質シルト（10YR4/4褐色粘土質シルトをブロック状で5%含む）
5 10YR4/4　褐色粘土質シルト（10YR2/3黒褐色シルトをブロック状で20%含む）



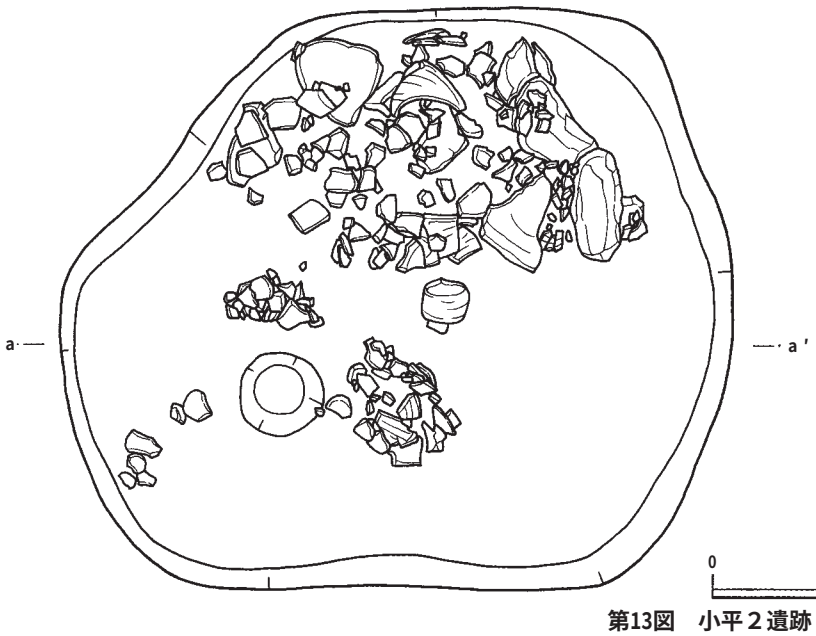
第11図　小平２遺跡　SK1(1)遺構平面図



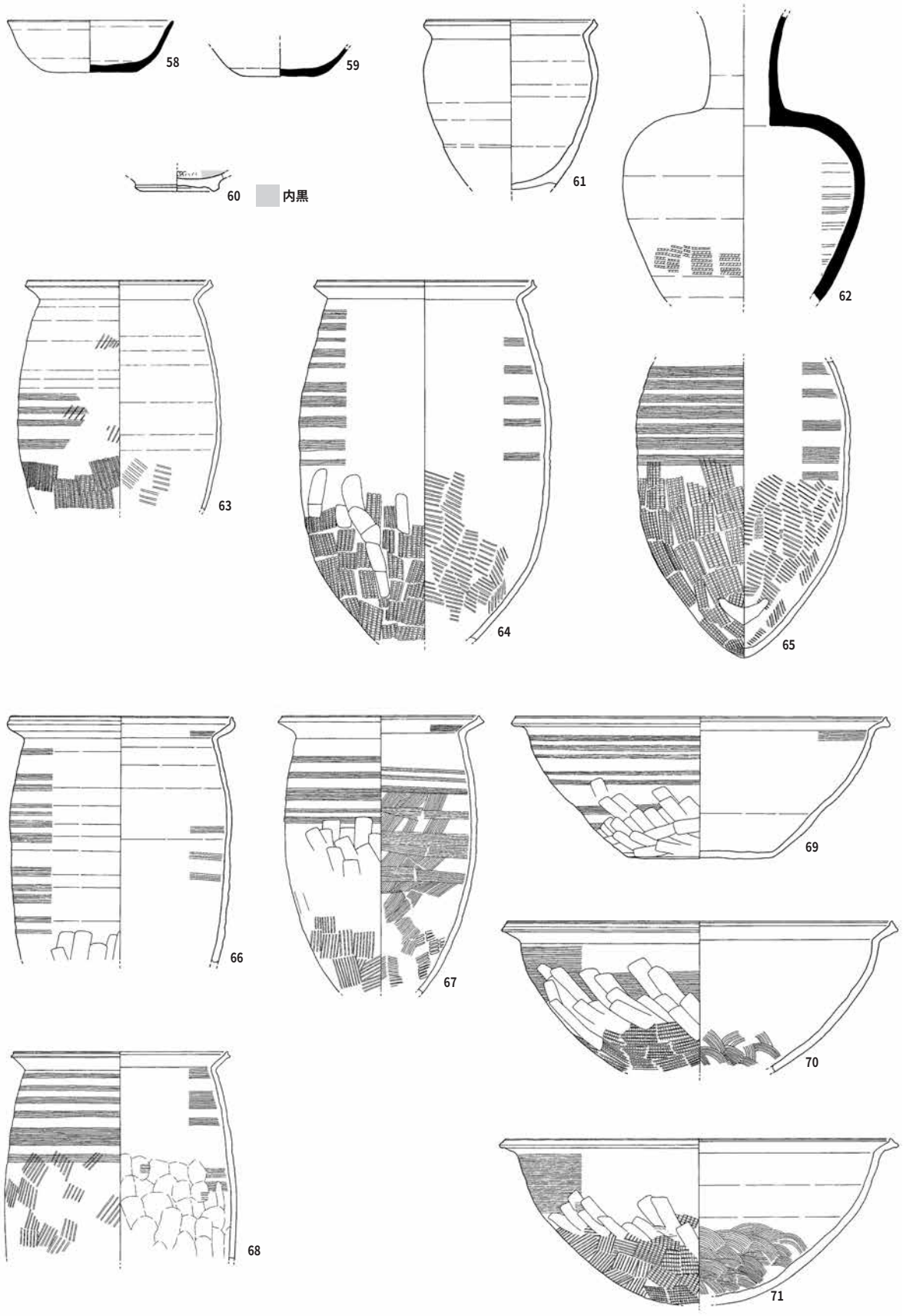
第12図　小平２遺跡　SK1(2)遺構出土遺物



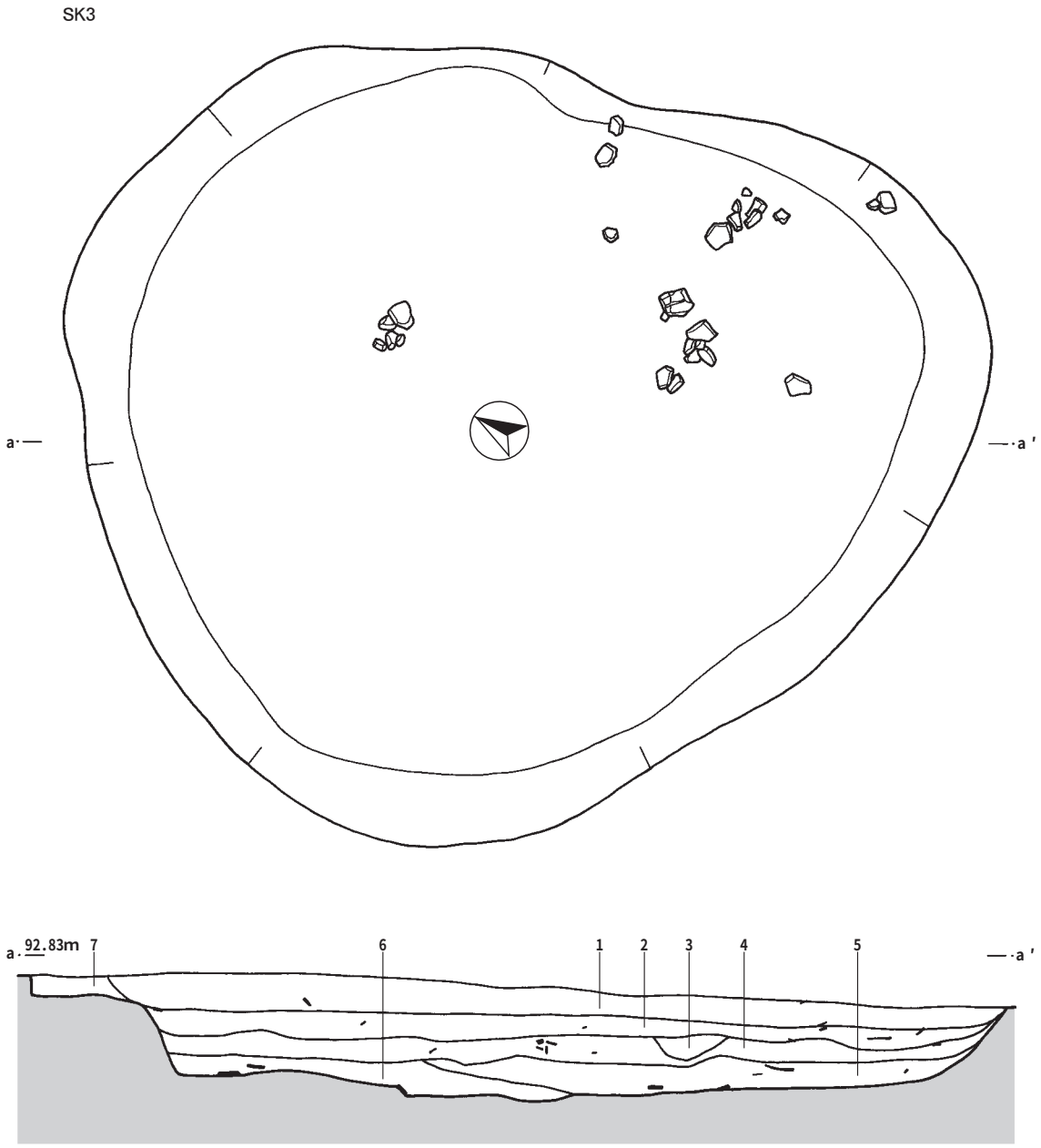
SK2
1 7.5YR2/3 黒褐色粘土質シルト（炭化物を含む。5YR5/6赤褐色焼土を斑点状に5%含む）
2 7.5YR2/3 黒褐色粘土質シルト（土器包含。炭化物と焼土をブロック状で20%含む）
3 7.5YR3/3 暗褐色粘土質シルト（灰白色粘土をブロック状で5%含む。炭化物と焼土粒を5%含む）
4 7.5YR3/3 暗褐色粘土質シルト（灰白粘土ブロック30%含む）
5 7.5YR2/2 黒褐色シルト（炭化物層を帯状に含む。焼土をブロック状で10%含む）
6 10YR3/3　暗褐色粘土質シルト(炭化物を含む)
7 10YR3/3　暗褐色粘土質シルト(10YR4/4褐色粘土質シルトをブロック状で10%含む)



第13図　小平２遺跡　SK2(1)遺構平面図

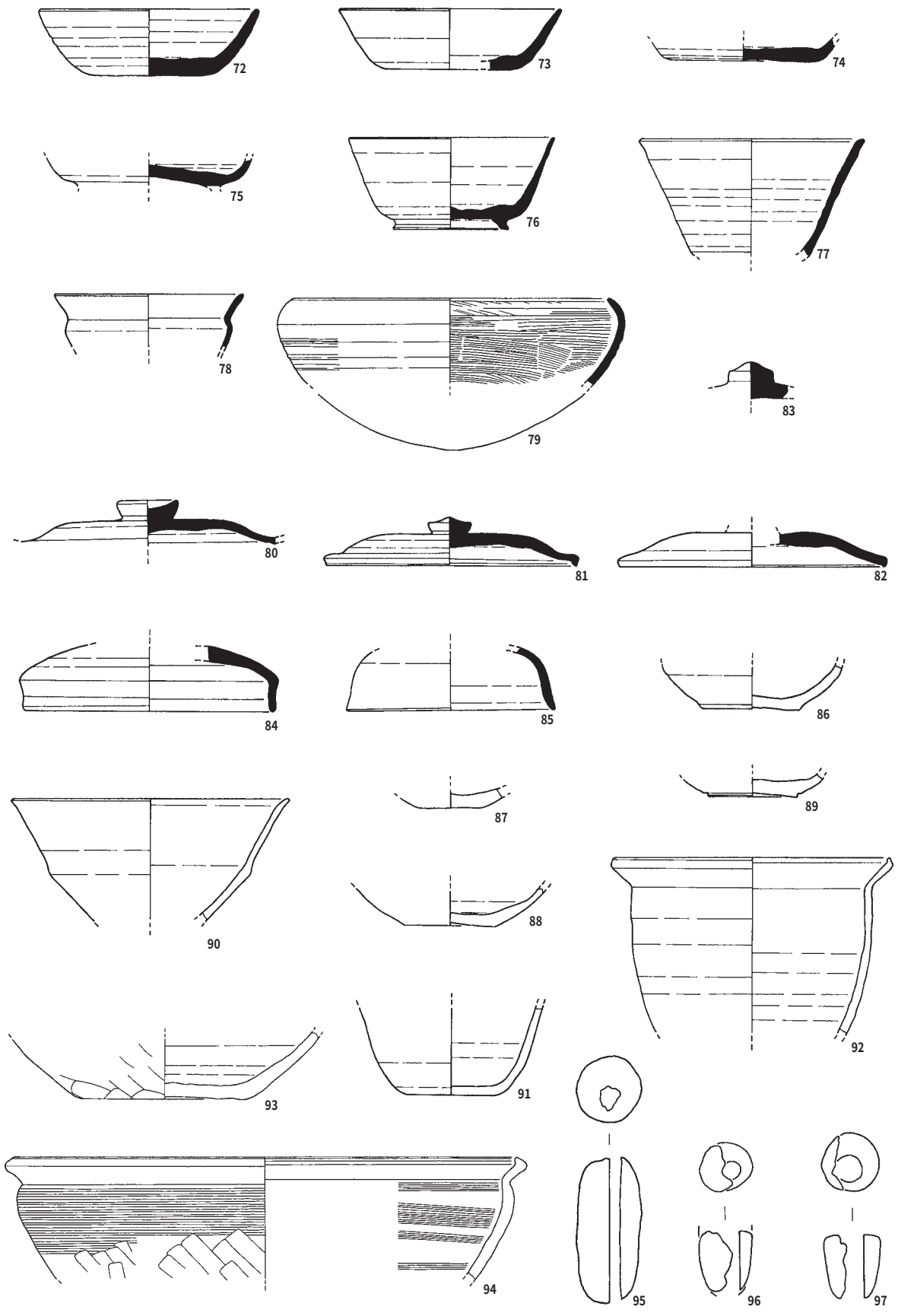


第14図　小平２遺跡　SK2(2)遺構出土遺物

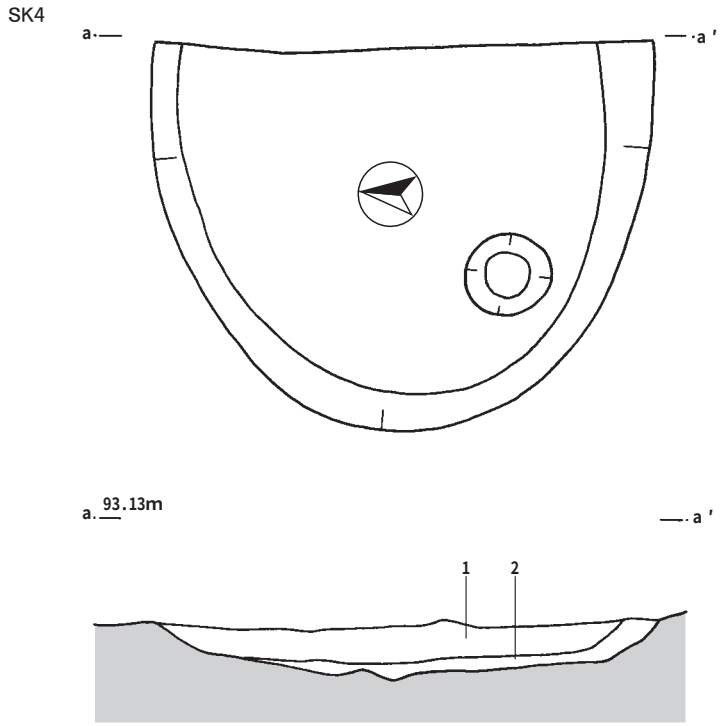


SK3
1 10YR2/3　黒褐色シルト（土器包含。炭化物を含む）
2 10YR3/3　暗褐色シルト（同上）
3 10YR3/3　暗褐色シルト（炭化物と5YR5/6明赤褐色焼土ブロックを含む）
4 7.5YR3/3 暗褐色シルト（5YR5/6明赤褐色焼土ブロック3%含む。炭化物を含む）
5 炭化物層（焼土を帯状・ブロック状で5%含む）
6 10YR3/4　暗褐色粘土質シルト（10YR4/4褐色粘土質シルトをブロック状で10%含む）
7 10YR2/3　黒褐色シルト（10YR4/4褐色粘土質シルトをブロック状で10%含む）

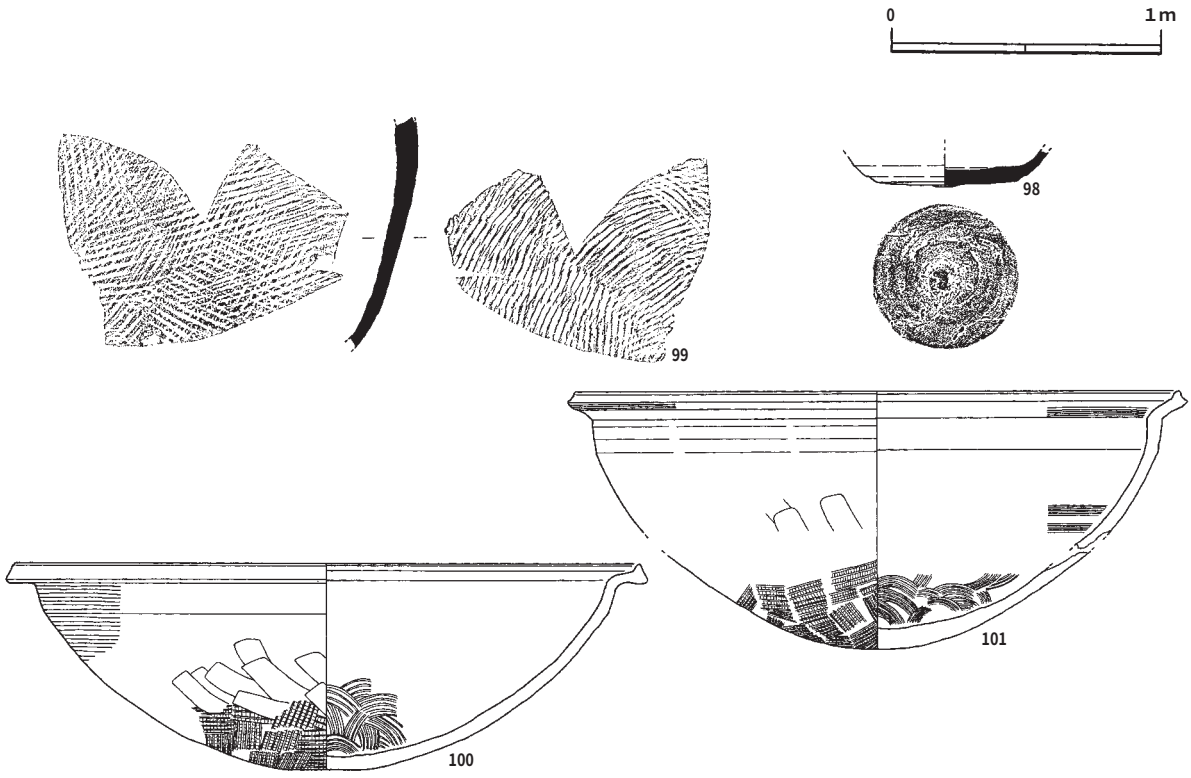
第15図　小平２遺跡　SK3（1）遺構平面図



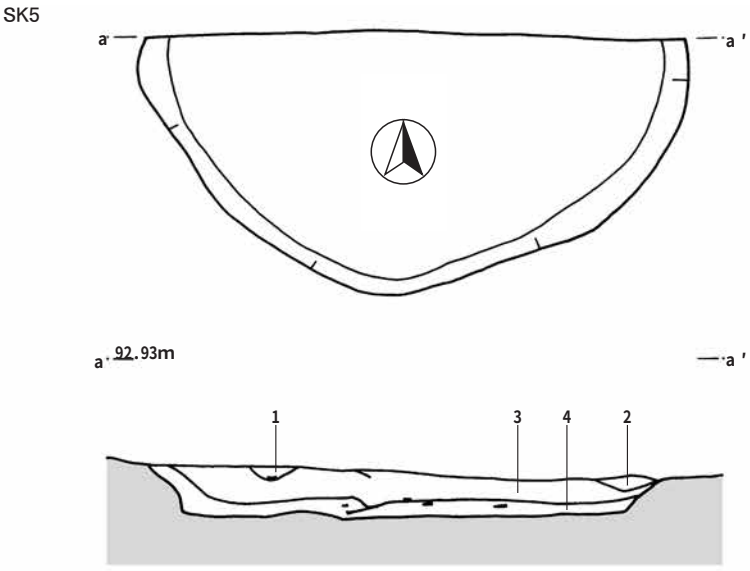
第16図　小平２遺跡　SK3(2)遺構出土遺物



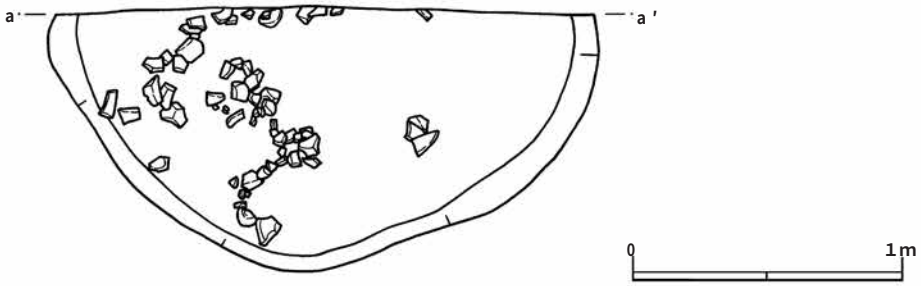
SK4
1 10YR2/3　黒褐色シルト（土器包含。炭化物を含む。10YR4/4褐色粘土質シルトをブロック状で5%含む）
2 10YR3/3　暗褐色シルト（10YR4/4褐色粘土質シルトをブロック状で20%含む）

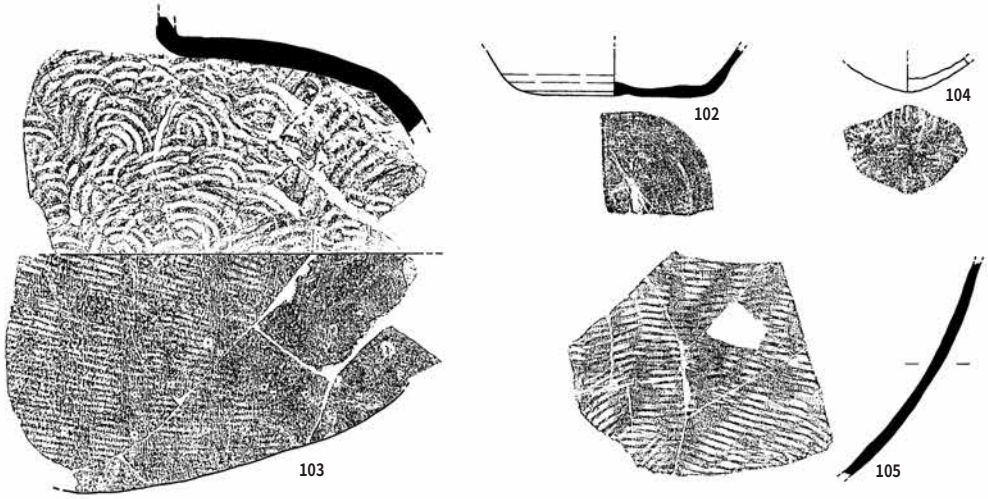


第17図　小平２遺跡　SK4遺構平面図・出土遺物

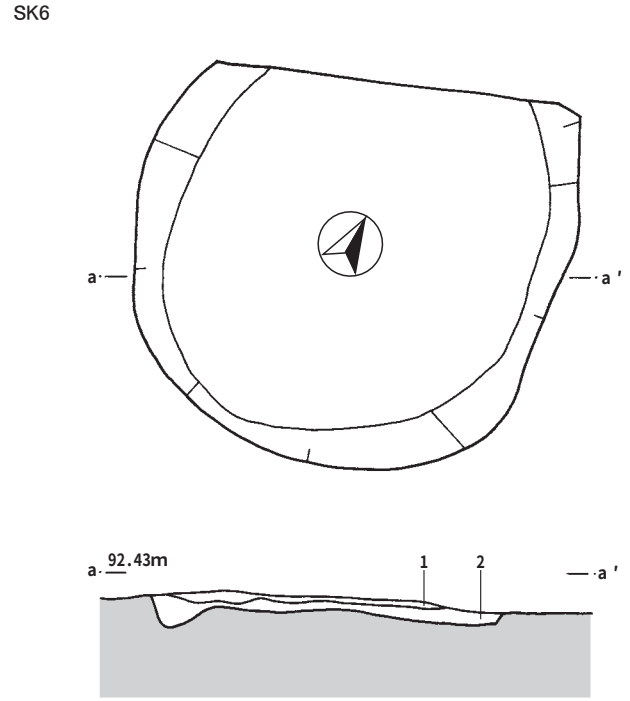


SK5
1 5YR2/3　赤褐色焼土塊
2 10YR2/3　黒褐色シルト（焼土を斑点状に含む）
3 10YR2/3　黒褐色シルト（炭化物と10YR2/1黒色炭層をブロック状で20%含む。焼土を斑点状で5%含む）
4 炭化物層（土器包含。焼土を帯状・ブロック状で10%含む）

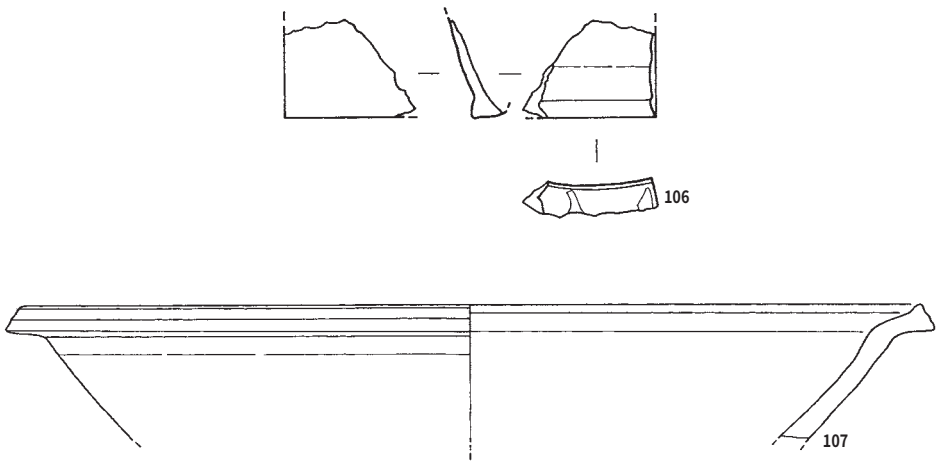




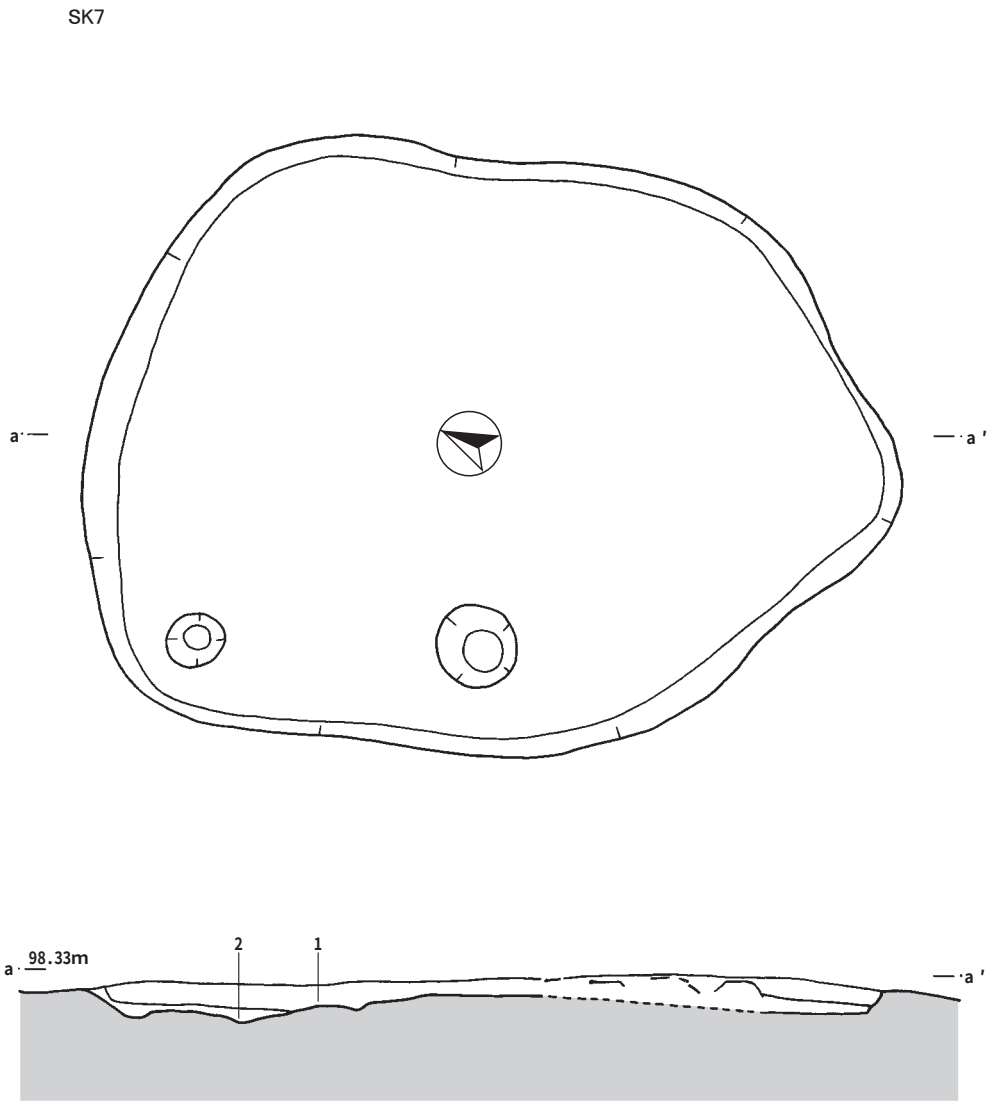
第18図　小平２遺跡　SK5遺構平面図・出土遺物



SK6
1 7.5YR3/3 暗褐色粘土質シルト（5YR5/6赤褐色焼土を帯状・ブロック状で20%含む）
2 10YR4/4　褐色粘土質シルト（粘土質シルトをブロック状で30%含む）



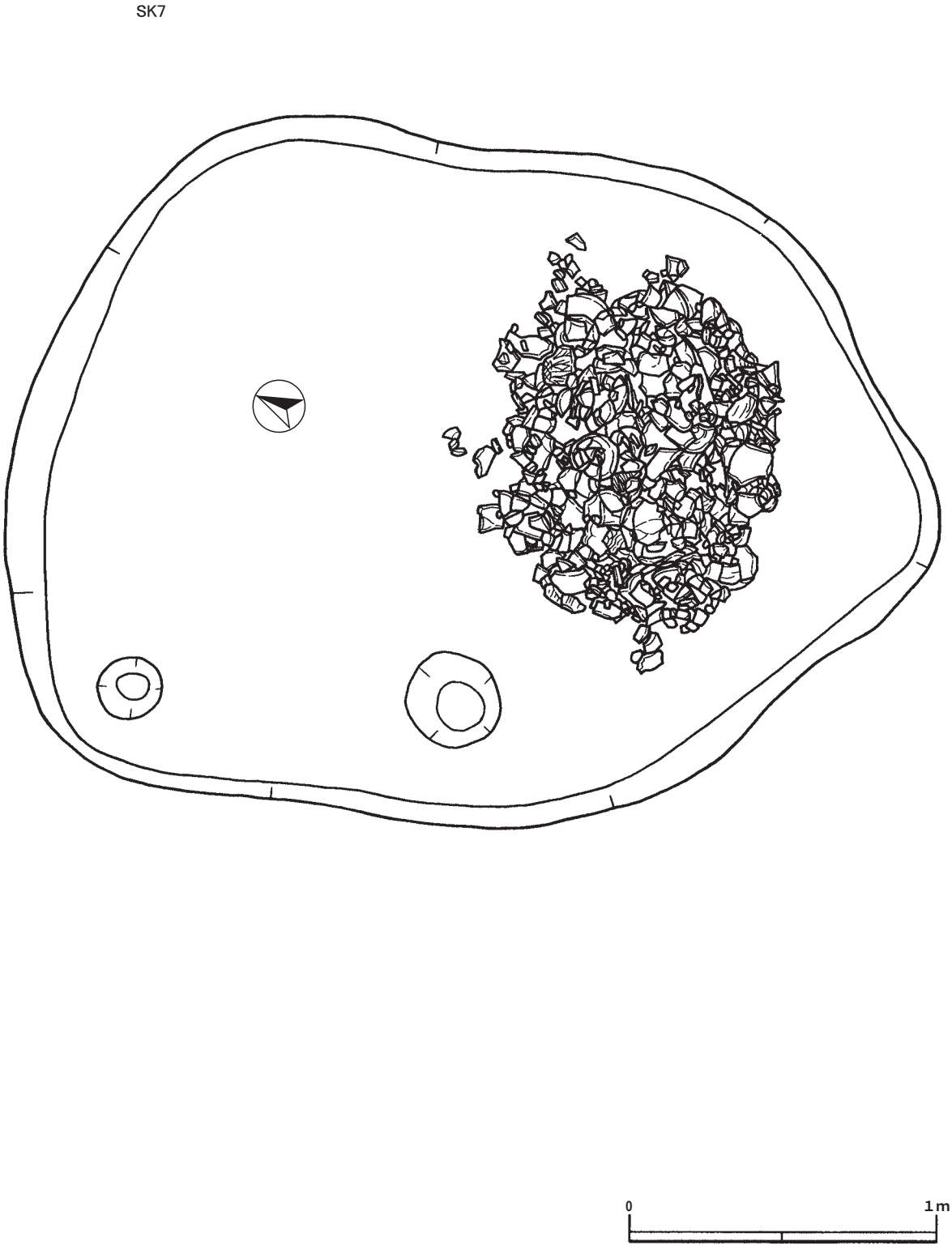
第19図　小平２遺跡　SK6遺構平面図・出土遺物



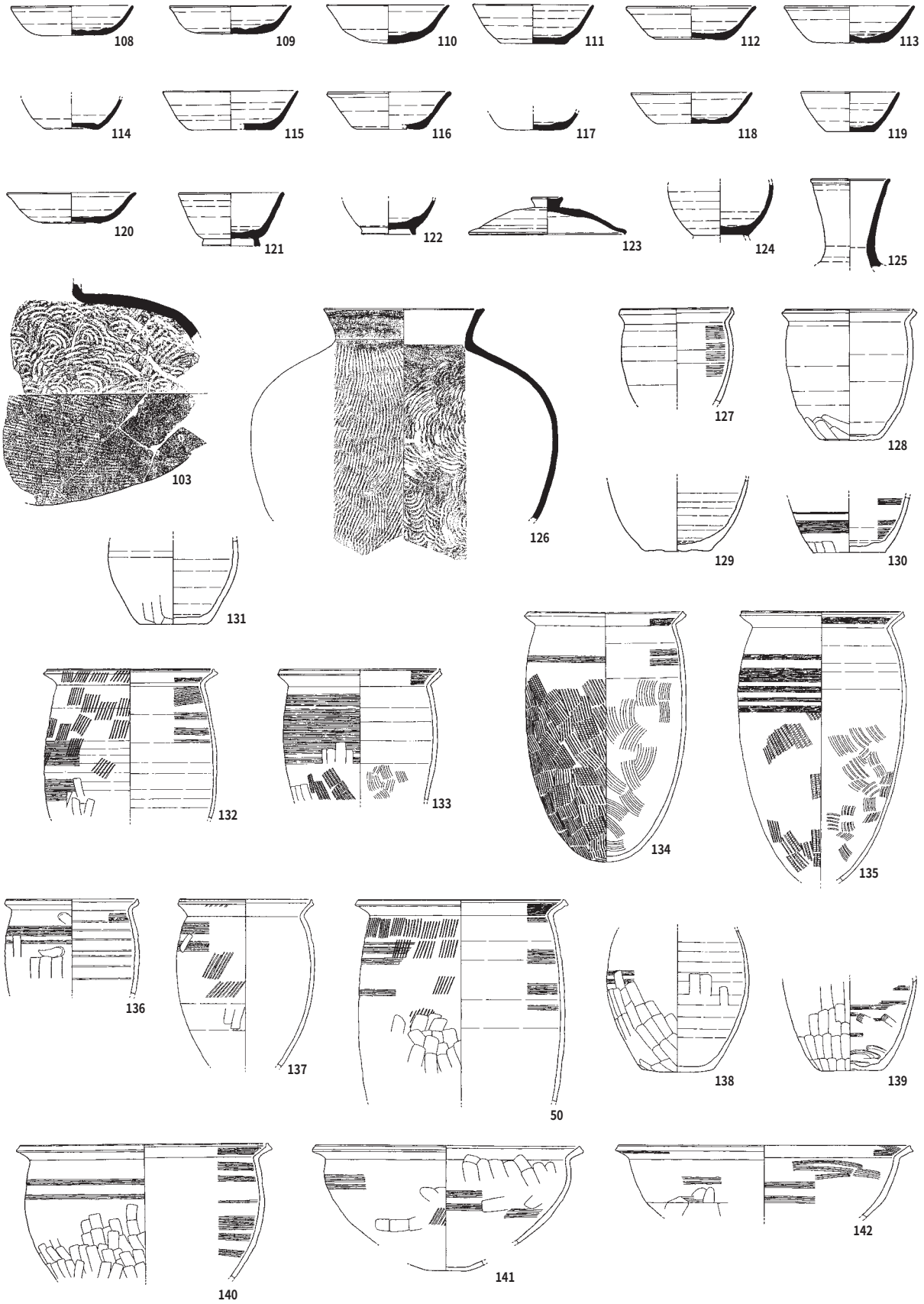
SK7
1 10YR3/3　暗褐色粘土質シルト（炭化物あり。10YR2/2黒褐色シルトをブロック状で5%含む。土器包含）
2 10YR4/4　褐色粘土質シルト（10YR3/3暗褐色シルトをブロック状で10%含む）

0　1m

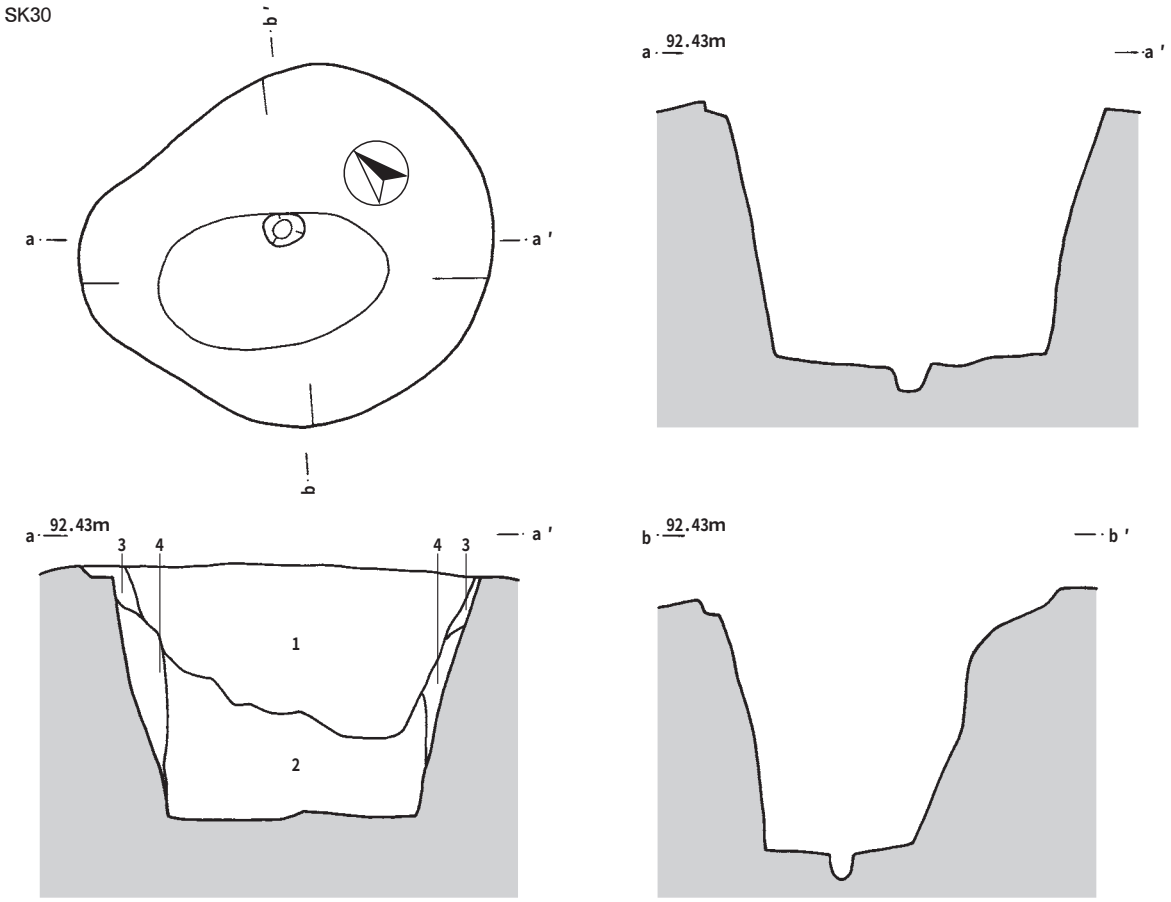
第20図　小平２遺跡　SK7(1)遺構平面図



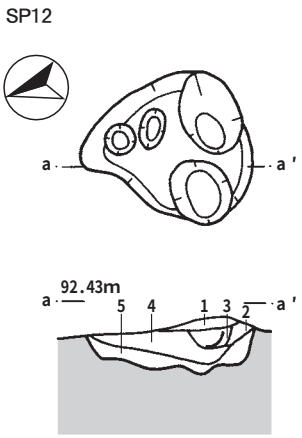
第21図　小平２遺跡　SK7(2)遺構平面図



第22図　小平２遺跡　SK7(3)遺構出土遺物

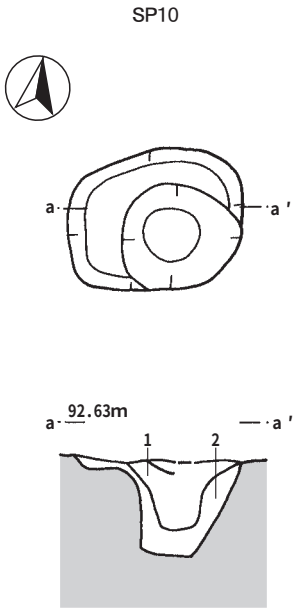


SK30
1 10YR2/3　黒褐色シルト（炭化物少量。10YR4/4褐色粘土質シルトをブロック状で10%含む）
2 10YR3/3　暗褐色シルト（炭化物少量。10YR4/4褐色粘土質シルトをブロック状で20%含む）
3 10YR3/4　暗褐色粘土質シルト
4 10YR4/4　褐色粘土質シルト（地山）

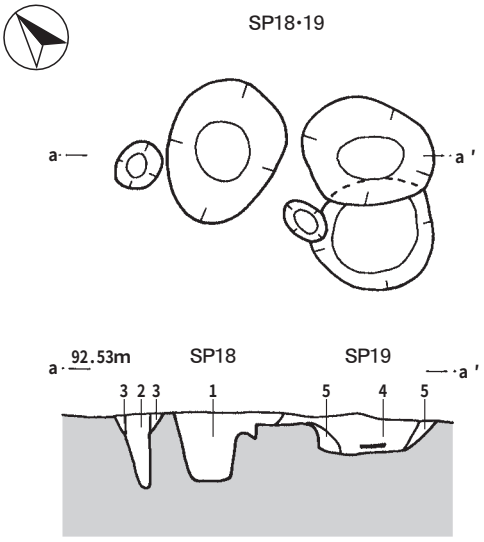


SP12
1 10YR2/3　黒褐色シルト（炭化物と焼土粒を含む）
2 10YR2/3　黒褐色粘土質シルト（にぶい黄橙色粘土を斑点状に含む）
3 10YR　にぶい黄橙色粘土（10YR2/3黒褐色粘土質シルトをブロック状で20%含む）
4 10YR2/3　黒褐色粘土質シルト（10YR4/4褐色粘土質シルトをブロック状で5%含む）
5 10YR4/4　褐色粘土質シルト（10YR2/3黒褐色粘土質シルトをブロック状で10%含む）

第23図　小平２遺跡　その他の遺構(1)平面図



SP10
1 10YR3/3　暗褐色粘土質シルト（炭化物を含む。10YR4/4褐色粘土質シルトをブロック状で10%含む）
2 10YR4/4　褐色粘土質シルト（10YR3/3暗褐色粘土質シルトをブロック状で20%含む）



SP18･19
1 10YR3/3　暗褐色粘土質シルト（炭化物を含む。灰白色粘土をブロック状で5%含む）
2 10YR2/3　黒褐色シルト（10YR4/4褐色粘土質シルトをブロック状で5%含む）
3 10YR3/3　暗褐色粘土質シルト（10YR4/4褐色粘土質シルトをブロック状で10%含む）
4 10YR3/3　暗褐色粘土質シルト（灰白色粘土をブロック状で10%含む）
5 10YR4/4　褐色粘土質シルト（地山）

第24図　小平２遺跡　その他の遺構(2)平面図

ＳＰ３遺構

ＳＰ３遺構（第26図　図版11）

調査区の北西部に位置する、Ⅰ-37グリッドで検出された。ここは、発掘区の高所付近にあたるところである。検出された小ピットの規模については次のようになる。

平面形は円形を呈するものと思われる。長軸、短軸ともに約45m、検出面からの深さは約10～20㎝であり、比較的浅い。極小ピットと切り合い関係にある。

覆土の様子は人為堆積であり２層に分けることができる。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は傾斜している。

遺物の出土はほとんどなかった。

ＳＰ８遺構

ＳＰ８遺構（第26図　図版11）

調査区の中央部北寄りに位置する、Ｊ-39グリッドで検出された。ここは、発掘区の比較的なだらかな中間地点にあたるところである。検出された小ピットの規模については次のようになる。

平面形は楕円形を呈するものと思われる。長軸は約60m、短軸は約40m、検出面からの深さは約10㎝であり、比較的浅い。

覆土の様子は人為堆積であり、１層のみである。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は平坦になっている。浅いすり鉢状のピットである。

遺物の出土はほとんどなかった。

ＳＰ16遺構

ＳＰ16遺構（第26図）

調査区の中央部に位置する、Ｌ-42グリッドで検出された。ここは、発掘区の比較的なだらかな中間地点にあたるところである。検出された小ピットの規模については次のようになる。

平面形は円形を呈するものと思われる。長軸、短軸ともに約30m、検出面からの深さは約10～15㎝であり、比較的浅い。

覆土の様子は人為堆積であり、１層のみである。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は傾斜している。

遺物の出土はほとんどなかった。

ＳＰ18遺構

ＳＰ18遺構（第26図）

調査区の中央部に位置する、Ｋ-40グリッドで検出された。ここは、発掘区の比較的なだらかな中間地点にあたるところである。検出された小ピットの規模については次のようになる。

平面形は円形を呈するものと思われる。長軸、短軸ともに約35m、検出面からの深さは約10㎝であり、比較的浅い。

覆土の様子は人為堆積であり、２層に分けることができる。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は平坦になっている。

遺物の出土はほとんどなかった。

ＳＰ43遺構

ＳＰ43遺構（第26図）

調査区の北西部に位置する、Ⅰ-36･Ⅰ-37グリッドで検出された。ここは、発掘区の高所付近にあたるところである。検出された小ピットの規模については次のようになる。

平面形は円形を呈するものと思われる。長軸、短軸ともに約35m、検出面からの深さは約30㎝であり、比較的深い。

覆土の様子は人為堆積であり、４層に分けることができる。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は平坦になっている。こうした遺構の性格としては木の根などによる攪乱あるいは、数個のピットの集合体である可能性がある。しっかりとした立ち上がりと、遺構の深さからすれば、建物の柱穴である可能性もあるが、周囲にこの柱穴と組むような柱穴は検出することができなかった。

遺物の出土はほとんどなかった。

ＳＰ46遺構（第26図　図版11）　ＳＰ46遺構

調査区の北西部に位置する、Ｊ-36グリッドで検出された。ここは、発掘区の高所付近にあたるところである。検出された小ピットの規模については次のようになる。

平面形は円形を呈するものと思われる。長軸、短軸ともに約30m、検出面からの深さは約30㎝であり、比較的深い。周囲には数個のピットが密集している。

覆土の様子は人為堆積であり、２層に分けることができる。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は平坦になっている。こうした遺構の性格としては木の根などによる攪乱あるいは、数個のピットの集合体である可能性がある。しっかりとした立ち上がりと、遺構の深さからすれば、建物の柱穴である可能性もあるが、周囲にこの柱穴と組むような柱穴は検出することができなかった。

遺物の出土はほとんどなかった。

ＳＰ47遺構（第26図）　ＳＰ47遺構

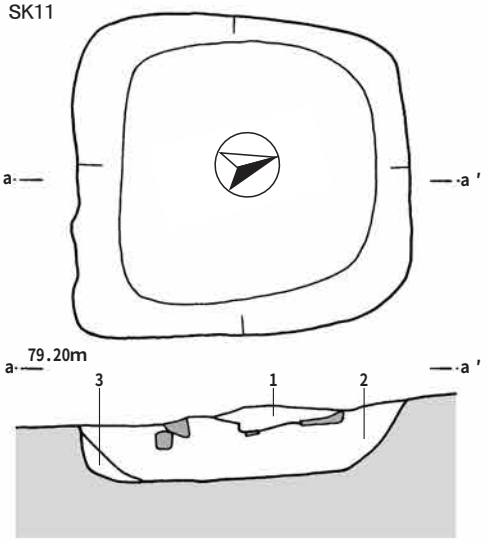
調査区の北西部に位置する、Ｊ-36グリッドで検出された。ここは、発掘区の高所付近にあたるところである。検出された小ピットの規模については次のようになる。

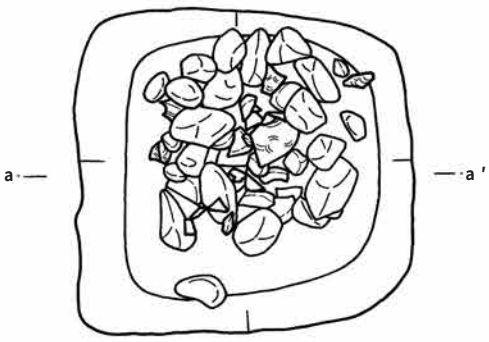
平面形は円形を呈するものと思われる。長軸、短軸ともに約35m、検出面からの深さは約10～20㎝であり、浅い部分と深い部分がある。周囲には数個のピットが密集している。

覆土の様子は人為堆積であり、２層に分けることができる。１層に炭化物を含む。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は傾斜している。

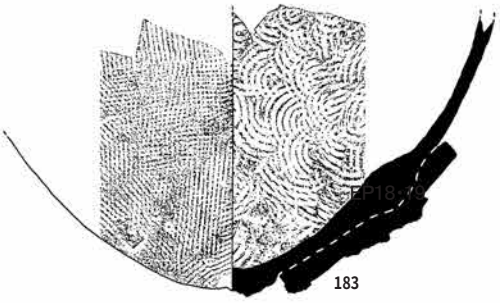
遺物の出土はほとんどなかった。

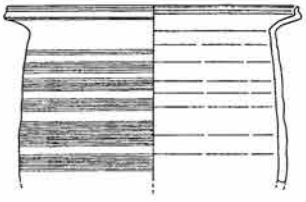
SK11

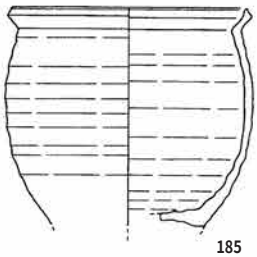




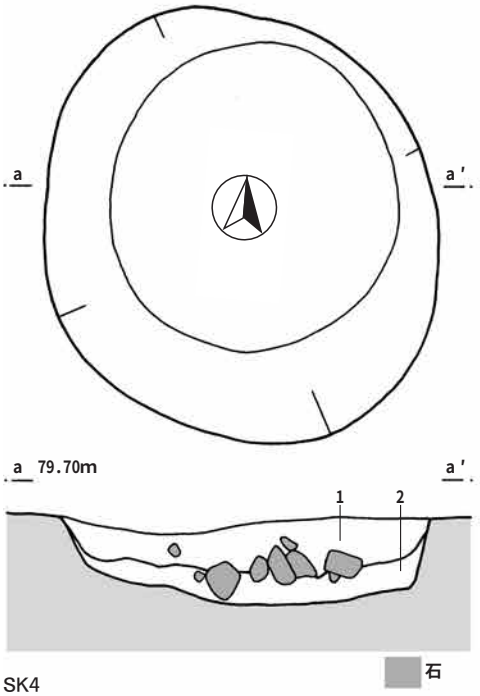
SK11
1 10YR2/3　黒褐色シルト（砂混じり。炭化物含む）
2 10YR2/1　黒色シルト（炭化物混入。灰白色粘土をブロック状で10%含む。
　　西側壁周に焼土層あり）
3 10YR4/4　褐色砂質シルト（地山）





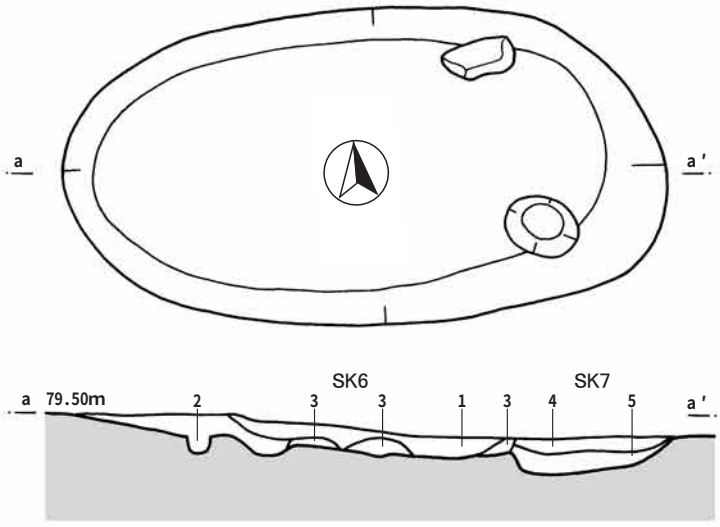


SK4



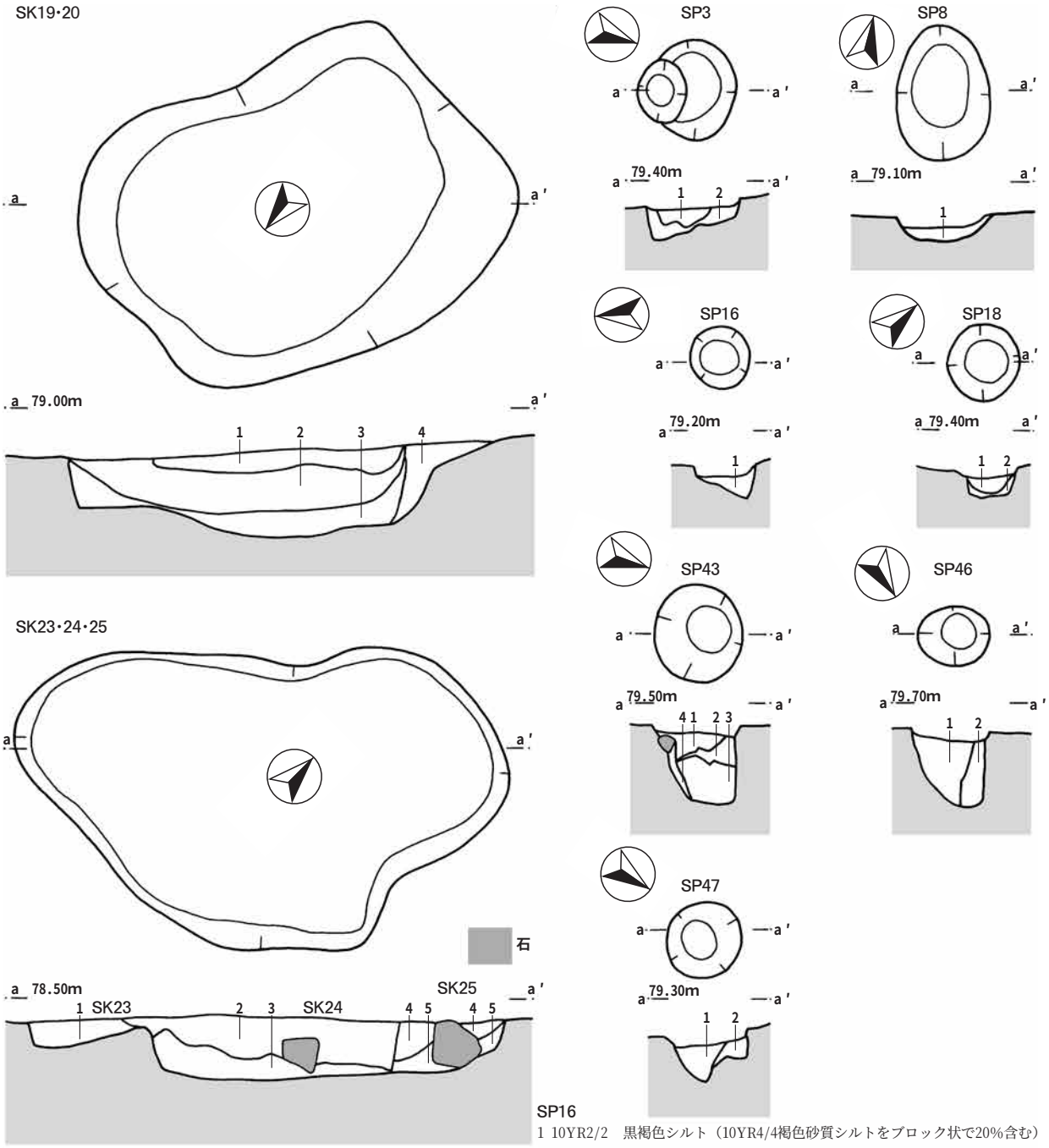
SK4
1 10YR2/2　黒褐色シルト（炭化物含む。大小の礫混入）
2 10YR2/3　黒褐色砂（固くしまる。大小の礫混入）

SK6・7



SK6・7
1 10YR2/2　黒褐色シルト（炭化物含む。5YR5/6明赤褐色焼土をブロック状で10%含む）
2 10YR2/2　黒褐色シルト（5YR5/6明赤褐色焼土を斑点状で5%含む）
3 10YR3/3　暗褐色粘土質シルト（10YR4/4シルト⇒地山をブロック状で10%含む）
4 10YR2/3　黒褐色シルト（やや砂礫。10YR2/1黒色シルトをブロック状で5%含む）
5 10YR4/4　褐色シルト（地山）

第25図　小平３遺跡　SK4・6・7・11遺構平面図・出土遺物



SK19・20

1 10YR2/2　黒褐色シルト（やや砂質）
2 10YR2/2　黒褐色シルトと10YR4/4褐色シルトとの互層（礫石混入）
3 10YR4/4　褐色シルト（地山）
4 10YR3/3　暗褐色シルト（オーバーハング、地山漸移層）

SK23～25

1 10YR2/3　黒褐色シルト（10YR4/4褐色シルトをブロック状で10%含む）
2 10YR2/1　黒色シルト（10YR4/4褐色シルトを帯状で5%含む）
3 10YR4/4　褐色砂質シルト（礫石を多く含む砂礫層）
4 10YR2/1　黒色シルト（ほぼ純粋層）
5 10YR4/4　褐色砂質シルト

SP3

1 10YR2/2　黒褐色シルト（10YR4/4褐色砂質シルトをブロック状で5%含む）
2 10YR3/3　暗褐色砂質シルト（10YR4/4褐色砂質シルトをブロック状で10%含む）

SP8

1 10YR2/2　黒褐色シルト（10YR2/3黒褐色砂質シルトをブロック状で30%含む）

SP16

1 10YR2/2　黒褐色シルト（10YR4/4褐色砂質シルトをブロック状で20%含む）

SP18

1 10YR2/2　黒褐色シルト（10YR2/1黒色シルトを斑点状で5%含む）
2 10YR4/4　褐色砂質シルト（地山）

SP43

1 10YR2/1　黒色シルト
2 10YR2/1　黒色シルト（10YR4/4褐色砂質シルトを塊状で30%含む）
3 10YR2/3　黒褐色シルト（10YR4/4褐色砂質シルトをブロック状で20%含む）
4 10YR4/4　暗褐色シルト（地山）

SP46

1 10YR2/3　黒褐色シルト（10YR4/4褐色シルトをブロック状で5%含む）
2 10YR4/4　褐色シルト（10YR2/3黒褐色シルトをブロック状で10%含む）

SP47

1 10YR2/2　黒褐色シルト（炭化物を含む）
2 10YR3/3　暗褐色粘土質シルト（10YR2/2黒褐色シルトをブロック状で10%含む）

0　1m

第26図　小平３遺跡　その他の遺構平面図

表１　小平２遺跡・小平３遺跡　出土遺物計測表(1)

図№	図版№	遺跡	遺構№	種別	器種	法量		
						口径	底径	器高
第27図	1	小平2	SK1 F1	須恵器	坏	-138	96	34
	2	小平2	SK1 F1	須恵器	坏	—	-70	—
	3	小平2	SK1 F1	須恵器	坏	-122	70	34
	4	小平2	SK1 F1	須恵器	坏	-128	-70	35
	5	小平2	SK1 F1	須恵器	坏	-124	-64	36
	6	小平2	SK1 F1	須恵器	坏	—	-72	—
	7	小平2	SK1 F1.F2	須恵器	高台付坏	182	82	43
	8	小平2	SK1 F1.F2	須恵器	高台付坏	123	68	44
	9	小平2	SK1 F1	須恵器	高台付坏	-146	-80	72
	10	小平2	SK1 Y	須恵器	高台付坏	140	—	—
	11	小平2	SK1 F1	須恵器	高台付坏	133	63	51
	12	小平2	SK1 F1	須恵器	高台付坏	110	62	51.5
第28図	13	小平2	SK1 F1	須恵器	高台付坏	-130	76	69
	14	小平2	SK1 F2	須恵器	高台付坏	-116	58	62.5
	15	小平2	SK1 F1	須恵器	高台付坏	113	64	49
	16	小平2	SK1 F1	須恵器	高台付坏	104	64	50.5
	17	小平2	SK1 F1 C3.D4	須恵器	蓋	-144	30	34
	18	小平2	SK1 F1	須恵器	蓋	-160	—	35
	19	小平2	SK1 F2	須恵器	蓋	148	—	36
	20	小平2	SK1 F1	須恵器	蓋	-138	—	—
	21	小平2	SK1 F2	須恵器	長頸瓶	-76	—	—
	22	小平2	SK1 F1	須恵器	長頸瓶	-80	—	—
	23	小平2	SK1 F1	須恵器	坏	—	88	—
	24	小平2	SK1 F1	土師器	坏	102	58	36
	25	小平2	SK1 F1	土師器	坏	107	58	38
	26	小平2	SK1 F1	土師器	坏	128	65	37.5
第29図	27	小平2	SK1 F1	土師器	坏	108	51	22
	28	小平2	SK1 F1	土師器	坏	117	53	46
	29	小平2	SK1 F1	土師器	蓋	143	91	35.5
	30	小平2	SK1 F1.F2	黒色土器(内黒)	鉢	-256	—	—
	31	小平2	SK1 F1	土師器	鉢	196	—	—
	32	小平2	SK1 F1	土師器	小型壷	154	74	131
	33	小平2	SK1 F1	土師器	小型壷	134	65	133
	34	小平2	SK1 F1	土師器	小型壷	135	75	143
第30図	35	小平2	SK1 F1	土師器	小型壷	140	72	141
	36	小平2	SK1 F1	土師器	小型壷	135	58	130
	37	小平2	SK1 F1	土師器	小型壷	150	—	—
	38	小平2	SK1 F1	土師器	小型壷	118	73	138
	39	小平2	SK1 F1	土師器	小型壷	128	—	—
	40	小平2	SK1 F1	土師器	小型壷	—	74	—
	41	小平2	SK1 F1	土師器	小型壷	—	67	—
	42	小平2	SK1 F1	土師器	小型壷	—	68	—
	43	小平2	SK1 F1	土師器	小型壷	90	—	—
第31図	44	小平2	SK1 F1	土師器	長胴甕	-210	82	336
	45	小平2	SK1 F1	土師器	長胴甕	-210	—	—
	46	小平2	SK1 F1	土師器	長胴甕	—	—	—
	47	小平2	SK1 F1	土師器	長胴甕	-184	—	—
	48	小平2	SK1 F1	土師器	長胴甕	-320	—	—
	49	小平2	SK1 F1	土師器	長胴甕	-210	—	—
第32図	50	小平2	SK1 F1/SK7 F1	土師器	長胴甕	—	286	—
	51	小平2	SK1 F1	土師器	長胴甕	-278	—	—
	52	小平2	SK1 F1	土師器	長胴甕	-170	—	—
	53	小平2	SK1 F1	土師器	長胴甕	-224	—	—
	54	小平2	SK1 F1	土師器	長胴甕	-207	—	—
	55	小平2	SK1 F1	土師器	堝	-394	—	—
	56	小平2	SK1 F1	土師器	堝	-400	—	—

図№	図版№	遺跡	遺構№	種別	器種	法量		
						口径	底径	器高
第32図	57	小平2	SK1 F1	土師器	堝	-388	—	—
第33図	58	小平2	SK2 F1	須恵器	坏	126	62	40
	59	小平2	SK2 F1	須恵器	坏	—	56	—
	60	小平2	SK2 F2	黒色土器(内黒)	坏	—	-76	—
	61	小平2	SK2 F2	土師器	小型壷	128	—	—
	62	小平2	SK2/RP14	須恵器	長頸瓶	—	—	—
	63	小平2	SK2 F1	土師器	長胴甕	190	—	—
	64	小平2	SK2 F1	土師器	長胴甕	-220	—	—
	65	小平2	SK2 F1/RP25	土師器	長胴甕	—	丸底	—
第34図	66	小平2	SK2 F1/RP20	土師器	長胴甕	228	—	—
	67	小平2	SK2 F1	土師器	長胴甕	-240	—	—
	68	小平2	SK2 F1/RP6	土師器	長胴甕	-220	—	—
	69	小平2	SK2 F1	土師器	堝	-382	150	146
	70	小平2	SK2 F1/RP19	土師器	堝	394	—	—
	71	小平2	SK2 F1.F2	土師器	堝	400	—	—
第35図	72	小平2	SK3 F3	須恵器	坏	124	62	38
	73	小平2	SK3	須恵器	坏	126	75	35
	74	小平2	SK3 F1	須恵器	坏	—	-90	—
	75	小平2	SK3 F2	須恵器	高台付坏	—	—	—
	76	小平2	SK3 F1	須恵器	高台付坏	—	65	—
	77	小平2	SK3 F2	須恵器	高台付坏	-128	—	—
	78	小平2	SK3 F1	須恵器	坏？	-108	—	—
	79	小平2	SK3 F1	須恵器	鉢(仏器)	-180	—	—
	80	小平2	SK3 F3	須恵器	蓋	—	—	—
	81	小平2	SK3 F1	須恵器	蓋	-146	—	—
	82	小平2	SK3 F1	須恵器	蓋	153	—	—
	83	小平2	SK3 F1	須恵器	蓋	—	—	—
	84	小平2	SK3 F3	須恵器	蓋	-142	—	—
	85	小平2	SK3 F1	須恵器	蓋	-158	—	—
第36図	86	小平2	SK3 F1	土師器	坏	—	76	—
	87	小平2	SK3 F3	土師器	坏	—	36	—
	88	小平2	SK3 F3	土師器	坏	—	52	—
	89	小平2	SK3 F1	土師器	坏	—	50	—
	90	小平2	SK3 F1	土師器	坏	-160	—	—
	91	小平2	SK3 F2	土師器	坏	—	58	—
	92	小平2	SK3 F2	土師器	小型壷	-160	—	—
	93	小平2	SK3 F1.F2.F3	土師器	堝	—	126	—
	94	小平2	SK3 F3	土師器	堝	-392	—	—
	95	小平2	SK3 F3/RP22	—	土錘	—	—	—
	96	小平2	SK3 F1	—	土錘	—	—	—
	97	小平2	SK3 F3	—	土錘	—	—	—
第37図	98	小平2	SK4 F1	須恵器	坏	—	67	—
	99	小平2	SK4 F1	須恵器	大甕	—	—	—
	100	小平2	SK4 F1	土師器	堝	-406	丸底	132
	101	小平2	SK4 F1	土師器	堝	-392	丸底	165
	102	小平2	SK5 F1	須恵器	坏	—	-91	—
	103	小平2	SK5 F1.C4/SK7 F1	須恵器	横瓶	—	—	—
	104	小平2	SK5 F1	土師器	長胴甕	—	—	—
	105	小平2	SK5 F1	須恵器	大甕	—	—	—
	106	小平2	SK6 F1	土師器	不明	—	—	—
	107	小平2	SK6 F1	土師器	堝	405	—	—
第38図	108	小平2	SK7 F1	須恵器	坏	-124	64	31
	109	小平2	SK7 F1	須恵器	坏	126	80	29
	110	小平2	SK7 F1	須恵器	坏	126	58	40
	111	小平2	SK7 F1	須恵器	坏	62	124	40
	112	小平2	SK7 F1	須恵器	坏	132	68	34

表２　小平２遺跡・小平３遺跡　出土遺物計測表(2)

図№	図版№	遺跡	遺構№	種別	器種	法量		
						口径	底径	器高
第38図	113	小平2	SK7 F1	須恵器	坏	133	77	38
	114	小平2	SK7 F1	須恵器	坏	103	56	31
	115	小平2	SK7 F1	須恵器	坏	140	82	40
	116	小平2	SK7 F1	須恵器	坏	-126	-70	39
	117	小平2	SK7 F1	須恵器	坏	—	58	—
	118	小平2	SK7 F1	須恵器	坏	-124	-73.5	32
	119	小平2	SK7 F1	須恵器	坏	101	50	41
第39図	120	小平2	SK7 F1	須恵器	坏	-133	62	31.5
	121	小平2	SK7 F1	須恵器	高台付坏	119	60	56
	122	小平2	SK7	須恵器	長頸瓶	—	56	—
	123	小平2	SK7 F1	須恵器	蓋	160	—	—
	124	小平2	SK7	須恵器	長頸瓶	—	—	—
	125	小平2	SK7 F1	須恵器	長頸瓶	80	—	—
	126	小平2	SK7 F1	須恵器	大甕	220	—	—
第40図	127	小平2	SK7 F1	土師器	小型壷	-116	—	—
	128	小平2	SK7 F1	土師器	小型壷	-134	62	136
	129	小平2	SK7 F1	土師器	小型壷	—	-70	—
	130	小平2	SK7 F1	土師器	小型壷	—	76	—
	131	小平2	SK7 F1	土師器	小型壷	—	70	—
	132	小平2	SK7 F1	土師器	長胴甕	-232	—	—
	133	小平2	SK7 F1	土師器	長胴甕	-220	—	—
第41図	134	小平2	SK7 F1	土師器	長胴甕	-214	丸底	344
	135	小平2	SK7 F1	土師器	長胴甕	-220	—	—
	136	小平2	SK7 F1	土師器	長胴甕	-180	—	—
	137	小平2	SK7 F1	土師器	長胴甕	-180	—	—
第42図	138	小平2	SK7 F1	土師器	長胴甕	—	100	—
	139	小平2	SK7 F1	土師器	長胴甕	—	-90	—
	140	小平2	SK7 F1	土師器	堝	342	—	—
	141	小平2	SK7 F1	土師器	堝	-360	—	-172
	142	小平2	SK7 F1	土師器	堝	-400	—	—
第43図	143	小平2	EP12 F1/RP10	須恵器	坏	129	86	29
	144	小平2	EP10 F1/RP3	須恵器	坏	135	48	40
	145	小平2	EP19/RP12	須恵器	高台付坏	165	94	75
	146	小平2	EP10 F1/RP11	須恵器	坏	118	—	—
	147	小平2	EP38 F1/RP15	土師器	長胴甕	-200	丸底	330
	148	小平２	SG68	縄文土器	深鉢	—	—	—
	149	小平2	SD17 F1/RP9	土師器	長胴甕	-260	—	—
	150	小平2	F-9	須恵器	坏	—	82	—
	151	小平2	E-17	須恵器	坏(転用硯)	—	65	—
	152	小平2	E-18	須恵器	高台付坏	152	78	79
	153	小平2	D-10	須恵器	高台付坏	—	67	—
	154	小平2	D-8	須恵器	高台付坏	—	-64	—
	155	小平2	E-20	須恵器	高台付坏	—	74	—
第44図	156	小平2	E-18	須恵器	高台付坏	—	-58	—
	157	小平2	C-6	須恵器	高台付坏	—	72	—
	158	小平2	F-7	須恵器	高台付坏	—	60	—
	159	小平2	C-3	須恵器	蓋	-140	—	—
	160	小平2	E-18	土師器	坏	—	60	—
	161	小平2	E-18	土師器	坏(柱状高台)	—	38	—
	162	小平2	E-19	土師器	坏	-140	—	—
	163	小平2	E-18	土師器	坏	—	44	—
	164	小平2	C-3	黒色土器(内黒)	坏	-131	46	46
	165	小平2	D-2	須恵器	大甕	—	—	—
	166	小平2	E-18	土師器	堝	—	—	—
	167	小平2	C-3	—	製塩土器	—	—	—
	168	小平2	C-6	—	製塩土器	—	—	—

図№	図版№	遺跡	遺構№	種別	器種	法量		
						口径	底径	器高
第44図	169	小平2	E-18	—	土錘	—	—	—
	170	小平2	D-8	近世磁器	筒型碗	30	48	53
	171	小平2	F-7	近世磁器	碗	—	37	—
	172	小平2	F-7	近世磁器	碗	73	25	34
第45図	173	小平2	F-2	旧石器	ナイフ	77	23.5	9
	174	小平2	F-2	旧石器	彫刻刀	88	29	12
	175	小平2	E-11/RQ7	石器	石錐	67	11.5	8
	176	小平2	D-8	石器	石篦	62	40.5	20
	177	小平2	SK11	石器	加工剥片	31	36	7
	178	小平2	F-8	石器	石篦	42	38.5	14
	179	小平2	D-8	石器	加工剥片	67	48	11.5
	180	小平2	E-8	石器	石核	56	88	58
	181	小平2	D-8	石器	加工剥片	58	83	21
	182	小平2	D-12	石器	加工剥片	79	69	19
第46図	183	小平3	SK11 F1.J-39	須恵器	大甕	—	丸底	—
	184	小平3	SK11 F1.J-39	土師器	長胴甕	-214	—	—
	185	小平3	SK11 F1	土師器	小型壷	132	—	—
	186	小平3	J-39	須恵器	坏	150	70	38.5
	187	小平3	J-39	須恵器	坏	138	54	33
	188	小平3	I-26	須恵器	坏	121	52	37
	189	小平3	G-34	須恵器	坏	—	68	—
	190	小平3	H-34	須恵器	高台付坏	—	50	—
	191	小平3	J-37	須恵器	高台付坏	-138	84	86
	192	小平3	L-43	須恵器	長頸瓶	—	110	—
	193	小平3	J-40	須恵器	長頸瓶	—	122	—
	194	小平3	G-34	須恵器	長頸瓶	—	82	—
	195	小平3	J-36	須恵器	長頸瓶	—	56	—
	196	小平3	J-37	須恵器	長頸瓶	—	84	—
	197	小平3	L-43	須恵器	蓋?	-180	—	—
	198	小平3	L-43	須恵器	蓋?	-170	—	—
第47図	199	小平3	K-39	土師器	坏	-159	-58	41
	200	小平3	L-43	土師器	坏	—	58	—
	201	小平3	J-37	黒色土器(内黒)	蓋	—	—	—
	202	小平3	H-37	土師器	小型壷	—	70	—
	203	小平3	G-34	土師器	小型壷	—	-62	—
	204	小平3	L-42	土師器	短頸壷	-46	-40	-59
	205	小平3	K-42	—	製塩土器?	—	-48	—
	206	小平3	I-38	—	製塩土器?	—	—	—
	207	小平3	L-43	土師器	長胴甕	216	—	—
	208	小平3	J-37	土師器	長胴甕	-200	—	—
	209	小平3	J-37	土師器	長胴甕	—	—	—
	210	小平3	L-43	土師器	甑?	—	-146	—
第48図	211	小平3	J-37	縄文土器	深鉢	—	—	—
	212	小平3	J-37	縄文土器	深鉢	—	—	—
	213	小平3	J-35	縄文土器	深鉢	—	—	—
	214	小平3	J-32	縄文土器	深鉢	—	—	—
	215	小平3	J-37	縄文土器	深鉢	—	—	—
	216	小平3	K-45	縄文土器	深鉢	—	—	—
	217	小平3	K-45	縄文土器	深鉢	—	—	—
	218	小平3	K-44	縄文土器	深鉢	—	—	—
	219	小平3	J-33	縄文土器	深鉢	—	—	—
	220	小平3	J-37	石器	石篦	60	32.5	13
	221	小平3	J-41	石器	石匙	45.5	42	7.5
	222	小平3	G-35	石器	磨製石斧	129	42	28

Ⅵ　出土した遺物

小平２・３遺跡から出土した遺物について、次に述べることとする。最初に小平２遺跡の出土遺物について述べ、次に小平３遺跡の出土遺物について述べる。

今回の調査では、遺物が遺構毎にまとまりを持って存在することが多かったために、とくに遺構毎に遺物を述べてゆきたい。このために、遺構に含まれる遺物と、遺構に含まれない、遺構外の遺物とに分けることになる。

小平２遺跡
奈良・平安時代

旧石器時代
縄文時代

小平２遺跡からは、奈良・平安の時期の遺構が検出された。一部に、旧石器時代、縄文時代、近現代の遺物も検出されてはいる。遺物もまたこれらの時代に含まれている。奈良・平安時代の遺物の多くは、遺構に伴って出土している。

小平３遺跡
奈良・平安時代
縄文時代

小平３遺跡からは、奈良・平安を中心とする時期の遺構が検出された。一部に、縄文時代、近現代の遺物も検出されてはいるが、近現代の時代に対応するような遺構の検出はできなかった。遺物は、縄文時代、奈良・平安時代が中心となる。

最初に小平２遺跡の遺物について、次に小平３遺跡の遺物について、述べていきたい。また、先に遺構平面図と、遺物出土状況、さらには遺構毎の出土遺物について提示しているので、こうした図をも併せて参考にしていただきたい。なお、掲載遺物について一覧表（出土遺物計測表（１）・（２））として表したので併せて参考にされたい。

１　小平２遺跡の出土遺物

旧石器時代

旧石器時代の遺物（第45図173、174）

調査区の北端、もっとも標高の高い地点から出土している。遺構には伴わなかった。出土層位も、他の遺物と大きくは違わなかった。恐らくこの時代の遺物の集中地点は、調査区以外の所にあるか、包含される深度がもっと深かったのであろう。

ナイフ型石器
彫刻刀

出土しているのは、ナイフ型石器（173）と彫刻刀（174）である。ナイフ型石器は縦長の剥片を素材とし、基部を成形して作り出されている。両側辺は鋭い刃部として残している。先端の片側にも調整が加えられている。珪質の頁岩製であり、全長は8.2cm、最大幅は2.4cm、最大厚は0.8cmを測る。彫刻刀は縦長の剥片を素材としている。先端の左右両端から、長軸に沿って彫刻刀面を作り出している。剥離は数回行われた模様で、うまく彫刻刀面が形成されなかったため残された形は、中央が割り箸状に突き出したような形状となっている。下端の左右からも同様の剥離が加えられている。

縄文時代

縄文時代の遺物（第43図148、第45図175～182）

縄文時代の土器（第43図148）と石器（第45図175～182）が出土している。この時代の遺構は、ＳＫ30とした縄文時代の陥とし穴状遺構がある。

出土した縄文土器は表裏に亙って文様が施文されている。表面には、やや間隔のあいた縄文が地文として施され、その上に先端が角状になった工具で沈線を施し、斜めの沈線に沿うよう

に列点を施している。裏面には、調整のための粗い擦痕の上に表面と同様なやや間隔のあいた縄文が縦位に施されている。縄文時代早期半ばの貝殻沈線文を施す土器群に併行する土器群であろうと考えられる。

縄文時代早期

出土した石器は、石篦(176、178)、２次加工のある剥片(177、179、181、182)、石核(180)がある。いずれも珪質の頁岩製である。

石篦

奈良・平安時代の遺物

・遺構に伴う遺物

ＳＫ１遺構出土遺物　第27～32図（第11・12　図版５・６・12～15）

ＳＫ１遺構

調査区の北側中央に位置する、Ｅ－４・Ｅ－５・Ｆ－４・Ｆ－５グリッドで検出された。遺構の中央部に遺物が集中する傾向がある。ほとんどが破片資料であるが復元によって、器形を知ることができる。

出土遺物としては、須恵器坏(１～６、23)・須恵器高台付坏(７～16)・須恵器蓋(17～20)・須恵器長頸瓶(21、22)、土師器坏(24～28)・土師器蓋(29)土師器小型壺(32～43)・土師器長胴甕(44～54)・土師器鉢(31)・土師器堝(55～57)、土師器内黒鉢(30)の各器種がある(第27～32図)。従来庄内地方では検出例のほとんどない平底の長胴甕が注目される。この平底の長胴甕は山形市を中心とする山形県内陸地方に顕著な遺物であり、この地域の出土遺物としては、様相を違えている。また、土師器蓋もほとんど類例が知られていない。また土師器小型壺の法量も良く揃っている。非常に一括性が高い遺物の出土状態であり、注目される。

ＳＫ２遺構出土遺物　第33・34図（第13・14図　図版５・６・16・17）

ＳＫ２遺構

調査区の北東に位置する、Ｆ－４・Ｆ－５・Ｇ－４・Ｇ－５グリッドで検出された。検出面から底面まで、ほとんどまんべんなく遺物が含まれる。遺物の存在は遺構の東側に遺物が集中する傾向がある。ほとんどが破片資料であるが、そのほとんどが復元によって、器形を知ることができる。

出土遺物としては、須恵器坏(58、59)・須恵器長頸瓶(62)、土師器小型壺(61)・土師器長胴甕(63～68)・土師器堝(69～71)、土師器内黒坏(60)の各器種がある(第33・34図)。

この遺物には、土師器堝、土師器長胴甕などの大型の製品が多い。また、土師器堝には、平底のものと丸底のものとがあり、これまた大型である。土師器長胴甕の底部は丸底を呈するものと思われる。坏はいわゆるあかやき製品である。内黒の坏の底部には高台が取り付けられている。非常に一括性が高い遺物の出土状態であり、注目される。

ＳＫ３遺構出土遺物　第35・36図　（第15・16図　図版５・６・18～20）

ＳＫ３遺構

調査区の北東に位置する、Ｆ－４・Ｇ－４グリッドで検出された。遺物はまばらだが、検出面から底面までの覆土にはまんべんなく遺物が含まれる。遺物は東側にやや集中する傾向があり、東側から廃棄された様相を示している。

出土遺物としては、須恵器坏(72～74、78？)・須恵器高台付坏(75～77)・須恵器蓋(80～85)・須恵器佛生鉢(79)、土師器坏(86～91)・土師器小型壺(92)・土師器堝(93、94)、土錘(95～97)の各器種がある(第35・36図)。土壙内からの土錘の出土は、周囲の土壙には見られず、この土壙のみの事例となる。注目すべきは鉄鉢模倣の須恵器鉢の出土である。こうした遺物は、仏教に関連する遺物として注目されているが、庄内地方での出土例には恵まれていなかった。本事例は貴

重な類例の追加となった。

須恵器坏の底部切り離しはヘラ切りである。土師器坏の底部切り離しは糸切りである。身の深い蓋が２点出土しており、短頸壷に伴う可能性があるが、短頸壷は伴出しなかった。蓋のつまみが宝珠型になるものもある。土錘の出土も注目される。非常に一括性が高い遺物の出土状態であり注目される。

ＳＫ４遺構

ＳＫ４遺構出土遺物　第37図　（第17図　図版６・21）

調査区の北東隅に位置する、Ｇ－３グリッドで検出された。出土遺物は発掘区の境界付近に一部が密集した状況で見られる。以前の土壙と同じく、東側から廃棄された可能性がある。

出土遺物としては、須恵器坏(98)・須恵器大甕(99)、土師器堝(100、101)の各器種がある(第37図)。この土壙出土の土師器堝は、いづれも丸底のものである。須恵器大甕は破片がいくつか出土しているが、接合の状態はよくなかった。須恵器坏の底部切り離しはヘラ切りである。

ＳＫ５遺構

ＳＫ５遺構出土遺物　第37図　（第18図　図版６・22）

調査区の北東に位置する、Ｇ－５グリッドで検出された。床面は一部のみの検出のため、遺物出土量はあまり多いとはいえないが、検出面から底面まで、まんべんなく遺物が含まれる。特に、西側に多く遺物が含まれている状況を見ることができる。遺物は破片が多いが、少量接合するものがある。

出土遺物としては、須恵器坏(102)・須恵器横瓶(103)・須恵器大甕(105)、土師器長胴甕底部(104)の各器種がある(第37図)。ＳＫ７遺構出土遺物と接合した横瓶破片の出土が注目され、このＳＫ５遺構とＳＫ７遺構とはほぼ同時期の営みである可能性が高い。

ＳＫ６遺構

ＳＫ６遺構出土遺物　第37図（第19図　図版７・23）

調査区の北東に位置する、Ｇ－６グリッドで検出された。遺物は少なく遺構全体に薄く分布している。

出土遺物としては、土師器堝(107)がある。土師質の遺物(106)も出土しているが、破片資料であり、器形、用途は不明である。この遺物は、おそらく円形を呈する平面形を有し、底面は平坦となる。底面から上部にかけては透かしが入れられているものである。

ＳＫ７遺構

ＳＫ７遺構出土遺物　第38～42図（第20～22図　図版７・23～26）

調査区の北側中央付近に位置する、Ｆ－５・Ｆ－６グリッドで検出された。床面には遺物が多く、遺構内南半に集中している。おそらく、東南の方向から廃棄されているものと考えることができる。遺物は破片であり、全形を知りうる状態で出土しているものは少なかった。遺物は密集した状態で存在している。完形の遺物は少ないが、ほとんどが復元によって、器形を知ることができる。

出土遺物としては、須恵器坏(108～120)・須恵器高台付坏(121)・須恵器蓋(123)・須恵器長頸瓶(122、124、125)・須恵器横瓶(103)・須恵器大甕(126)、土師器小型壺(127～131)・土師器長胴甕(50、132～139)・土師器堝(140～142)の各器種がある(第38～42図)。ＳＫ５出土遺物と接合した横瓶の出土が注目される。おそらくＳＫ５遺構と同時期に営まれている遺構であろうことがわかる。またかなり大型の長胴甕(50)が出土していることも興味深い。この長胴甕の破片はＳＫ１からも出土し、両者は接合した。これによって、ＳＫ１・ＳＫ５・ＳＫ７の各遺構は時期的に関連性を有していることがわかった。

ＳＫ１・ＳＫ５・ＳＫ７の各遺構

須恵器坏の底部切り離しは、大半がヘラ切り離しであるが、わずかに糸切り離しのものがある(120)、ヘラ切り離しのものは器高が低く口径は大きいものが多い。口縁部が外反するもの(116)、やや大型の器形になるもの(115)もある。長胴甕はロクロによるもの(132)とタタキ(133)がある。堝は平底になるものが多いと思われる。一部には非常に身の深いものもある(140)。

ＳＰ12遺構　第43図（第23図　図版８・27）　ＳＰ12遺構

調査区の北東に位置する、Ｇ－５グリッドで検出されたた。須恵器坏(143)が出土している。底部はヘラ切り離しであり、器高は低く口径は大きい。

ＳＰ10遺構　第43図（第24図　図版８・27）　ＳＰ10遺構

調査区の北東に位置する、Ｇ－５グリッドで検出された。小ピット内にひとまわり小さなピットがあり、遺物が出土している。出土遺物としては、須恵器坏(144、146)がある。須恵器坏の底部はいづれもヘラ切り離しである。

ＳＰ19遺構　第43図（第24図　図版８・27）　ＳＰ19遺構

調査区の北東に位置する、Ｇ－５グリッドで検出された。出土遺物としては、須恵器高台付坏(145)がある。非常に大ぶりな須恵器坏である。底部はヘラ切り離しであり、高台が付けられている。

この他の遺構からの出土遺物は、ＥＰ38からは土師器長胴甕が出土している(147)。ＳＤ17からは、土師器長胴甕が出土している(149)。

・遺構に伴わない遺物　遺構に伴わない遺物

包含層などからも遺物が出土しているために、主なものを載せた。器種としては須恵器坏(150、151)、須恵器高台付坏(152～158)、須恵器蓋(159)、土師器坏(160～163)、土師器内黒坏(164)、須恵器大甕(165)、製塩土器(167、168)、土師器堝(166)、土錘(169)、近世磁器(170～172)がある。

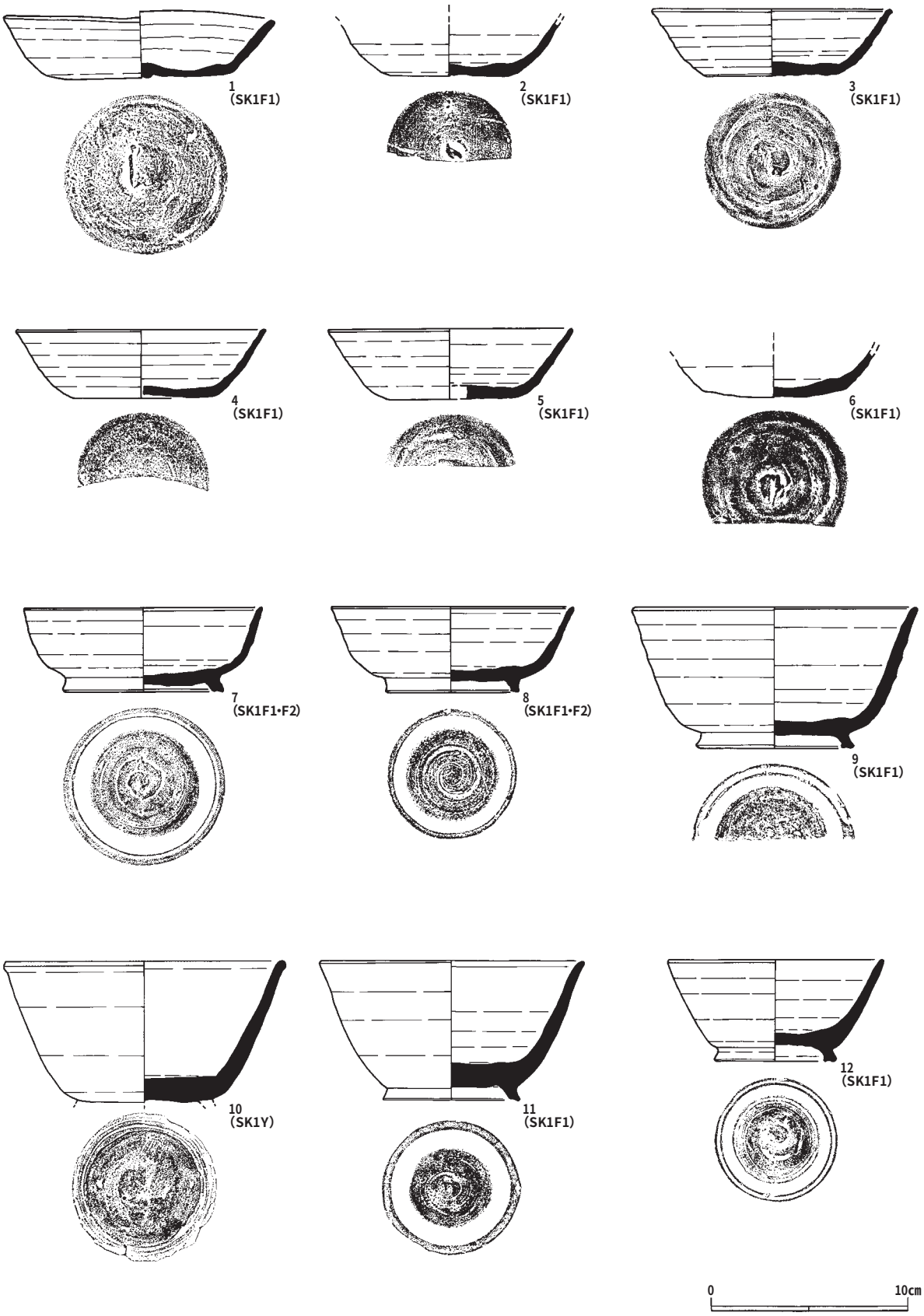
151の須恵器坏は底部付近のみの遺存であるが、内底には墨痕が観察され、硯として使用されたことがわかる。この遺跡内で墨の使用ひいては文書作製などの事業が行われたことになるが、墨書土器などは出土していない。この須恵器坏の底部は糸切り離しであり、分厚く作り出されている。153～155の須恵器坏は高台をもつものであるが、153の高台は高い。154、155とも高台から口縁への立ち上がりは屈曲を有しており、おそらく器高は低く、底径は大きい器形となるものと考えられる。161の土師器坏は底部が肥厚しており、柱状高台風に作られている。おそらく小さな盃状の器形を呈するものと考えられ、土師器としてはもっと新しい年代観をもつ遺物となろう。162は土師器坏であるが、底部の様子が良く捉えられなかった。製塩土器は２点出土している。167は器台の可能性があろう。こうした内陸部に入った遺跡でも製塩土器が出土する場合があり注目されている。

２　小平３遺跡の出土遺物

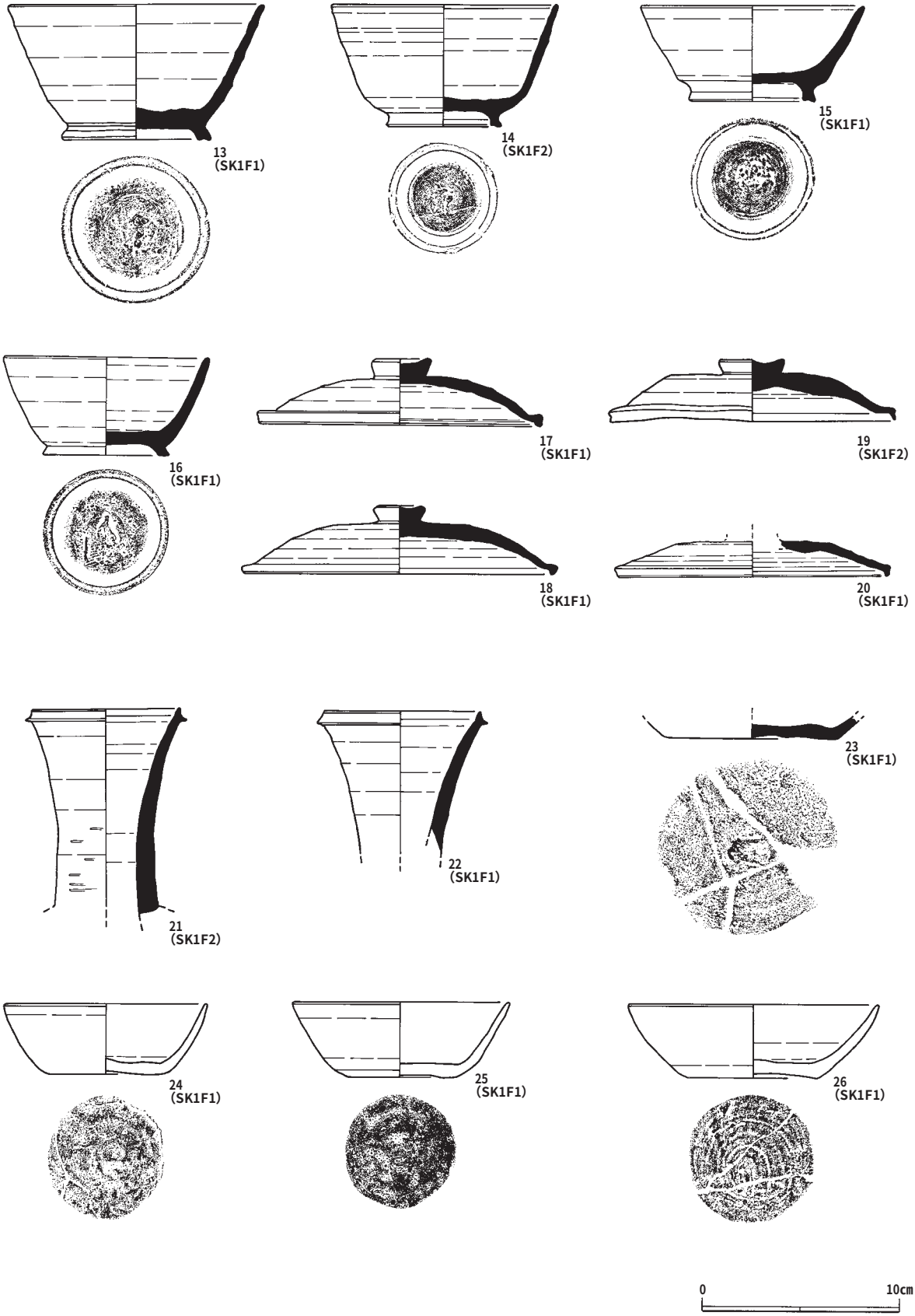
縄文時代の遺物　第48図　縄文時代の遺物

縄文土器(211～219)と、石器(220～221)が出土している。調査区の全体に亙って出土し、特に集中地点を見いだすことはできなかった。

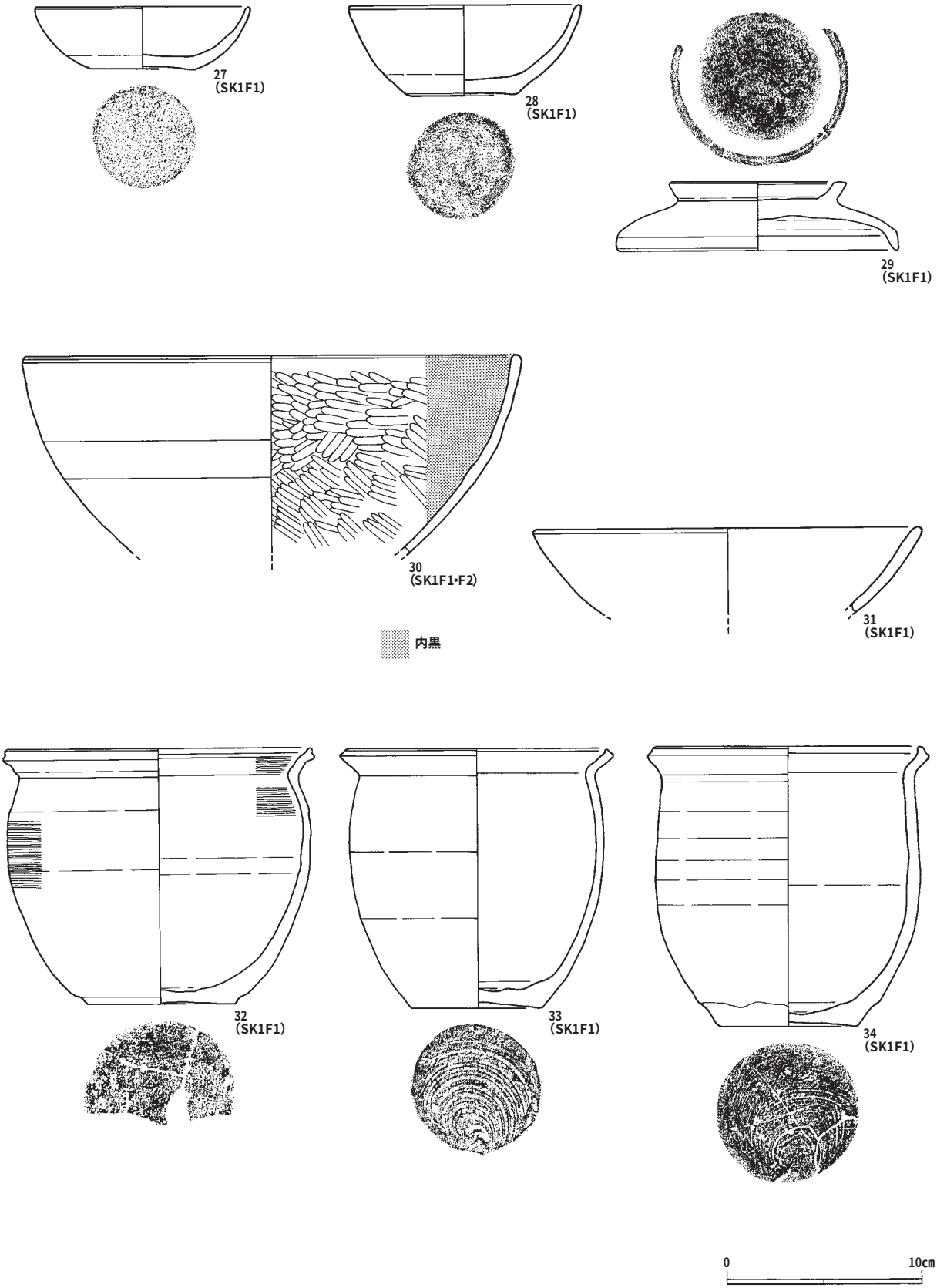
縄文土器はのうち216、217は縄文のみが施文されている、深鉢型を呈すると考えられる土器



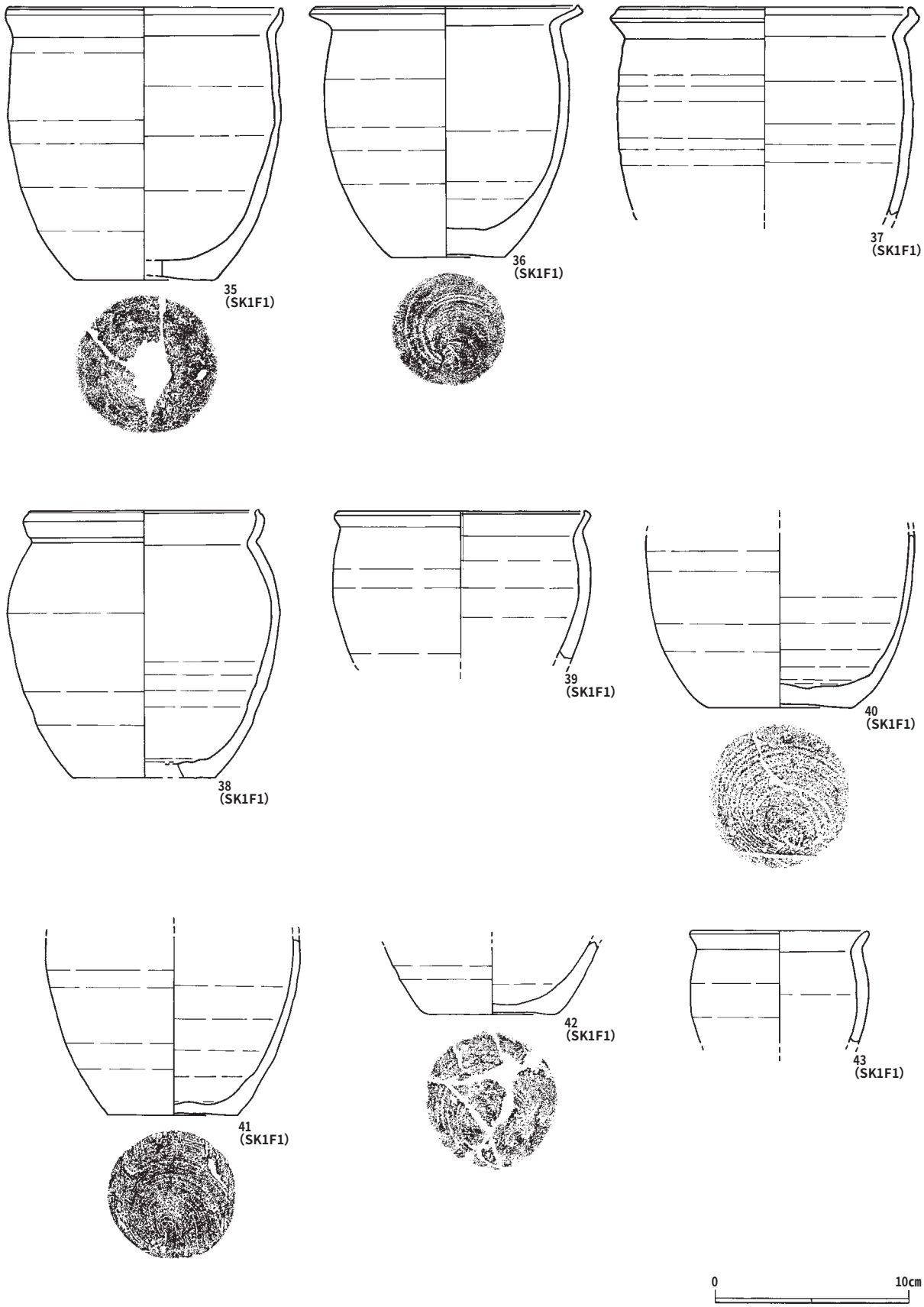
第27図　小平２遺跡　SK1遺構出土遺物(1)



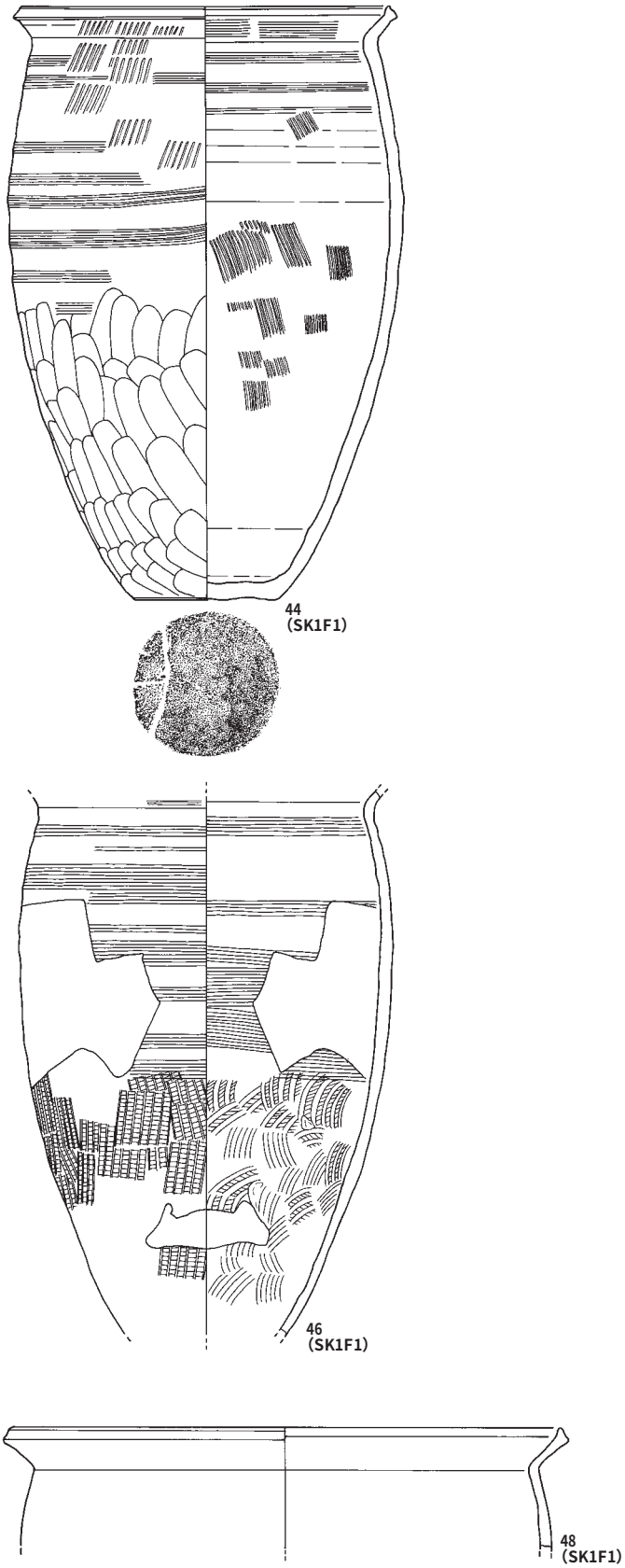
第28図　小平２遺跡　SK1遺構出土遺物(2)



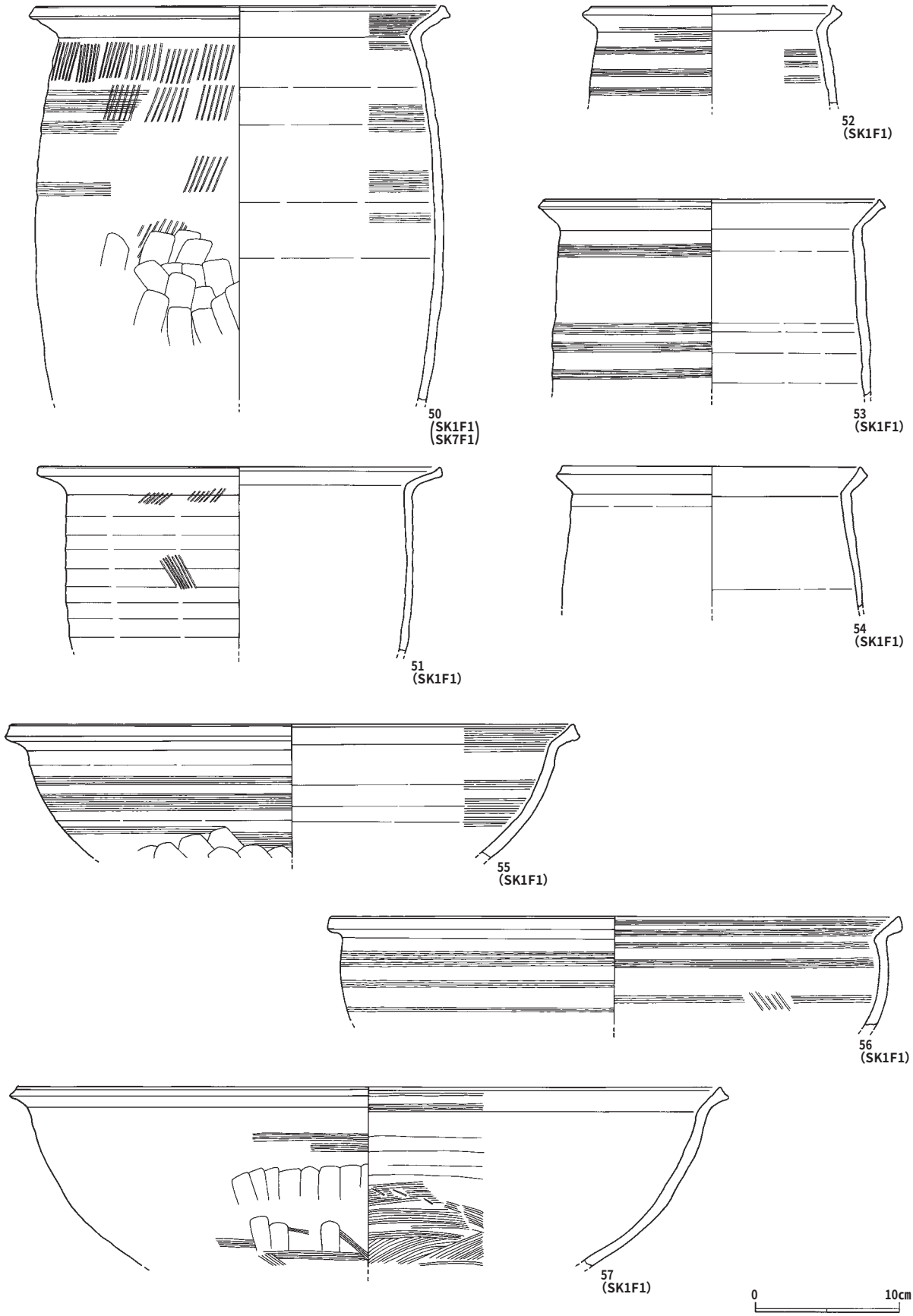
第29図　小平２遺跡　SK1遺構出土遺物(3)



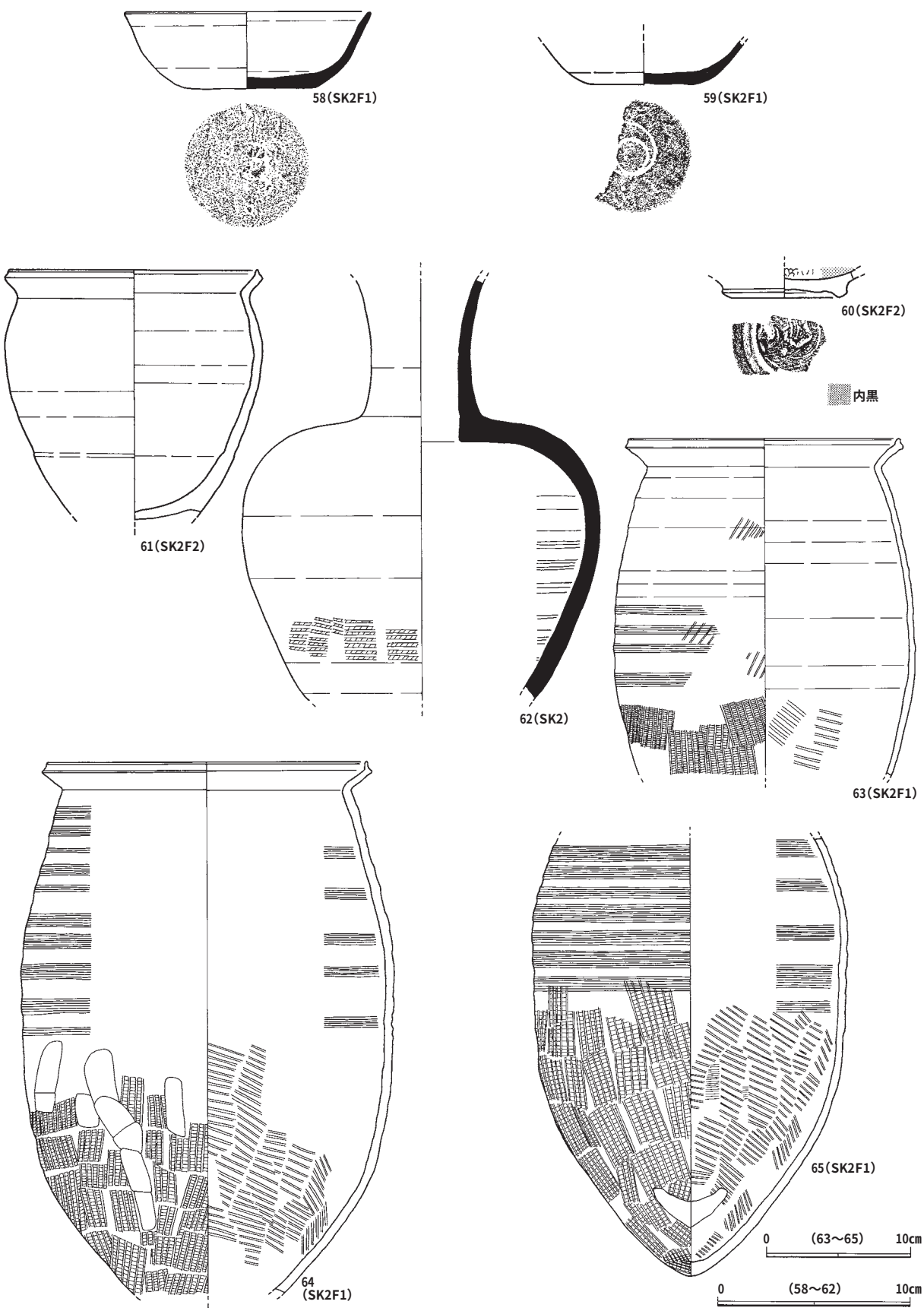
第30図　小平２遺跡　SK1遺構出土遺物(4)



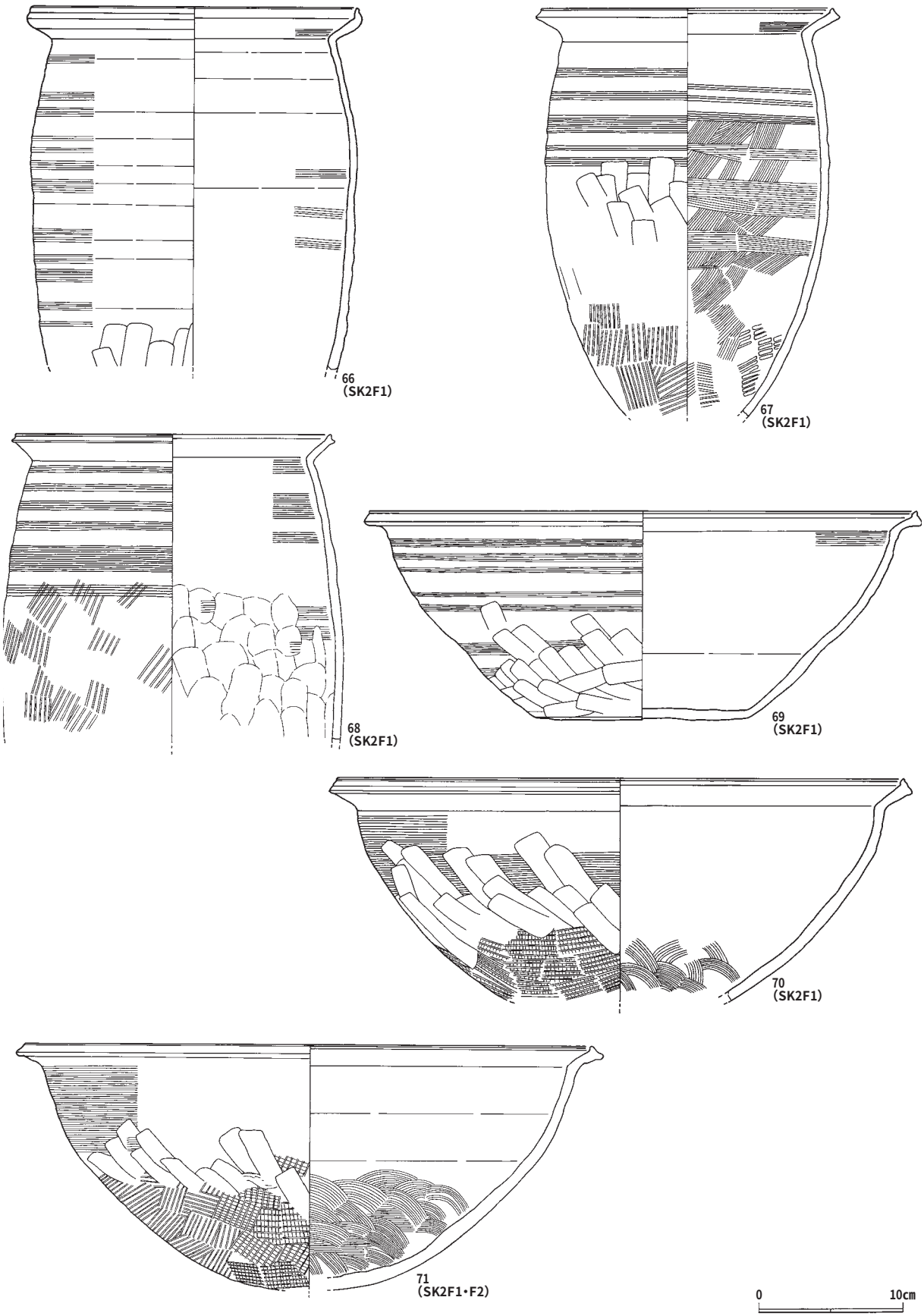
第31図　小平２遺跡　SK1遺構出土遺物(5)



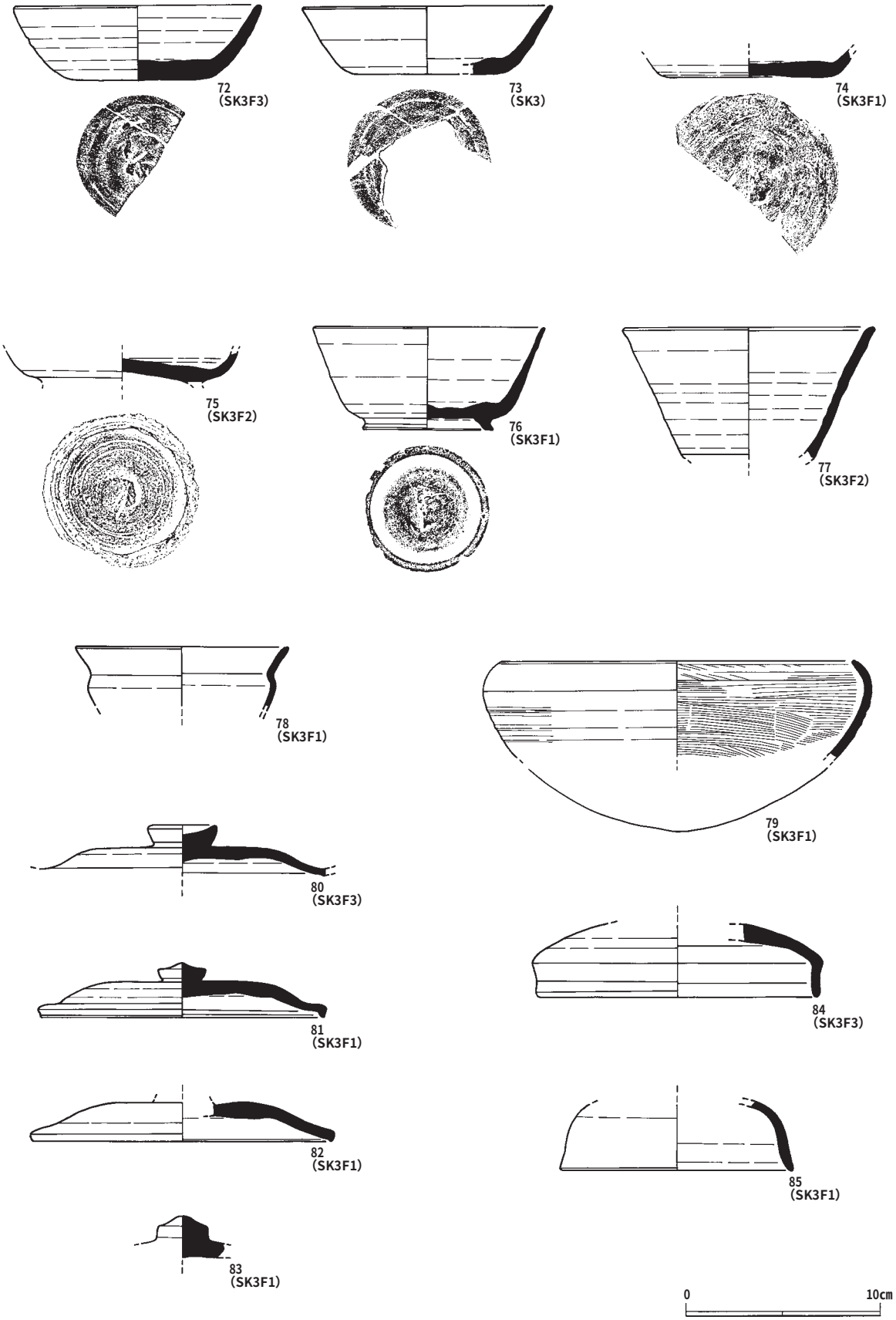
第32図　小平２遺跡　SK1遺構出土遺物(6)



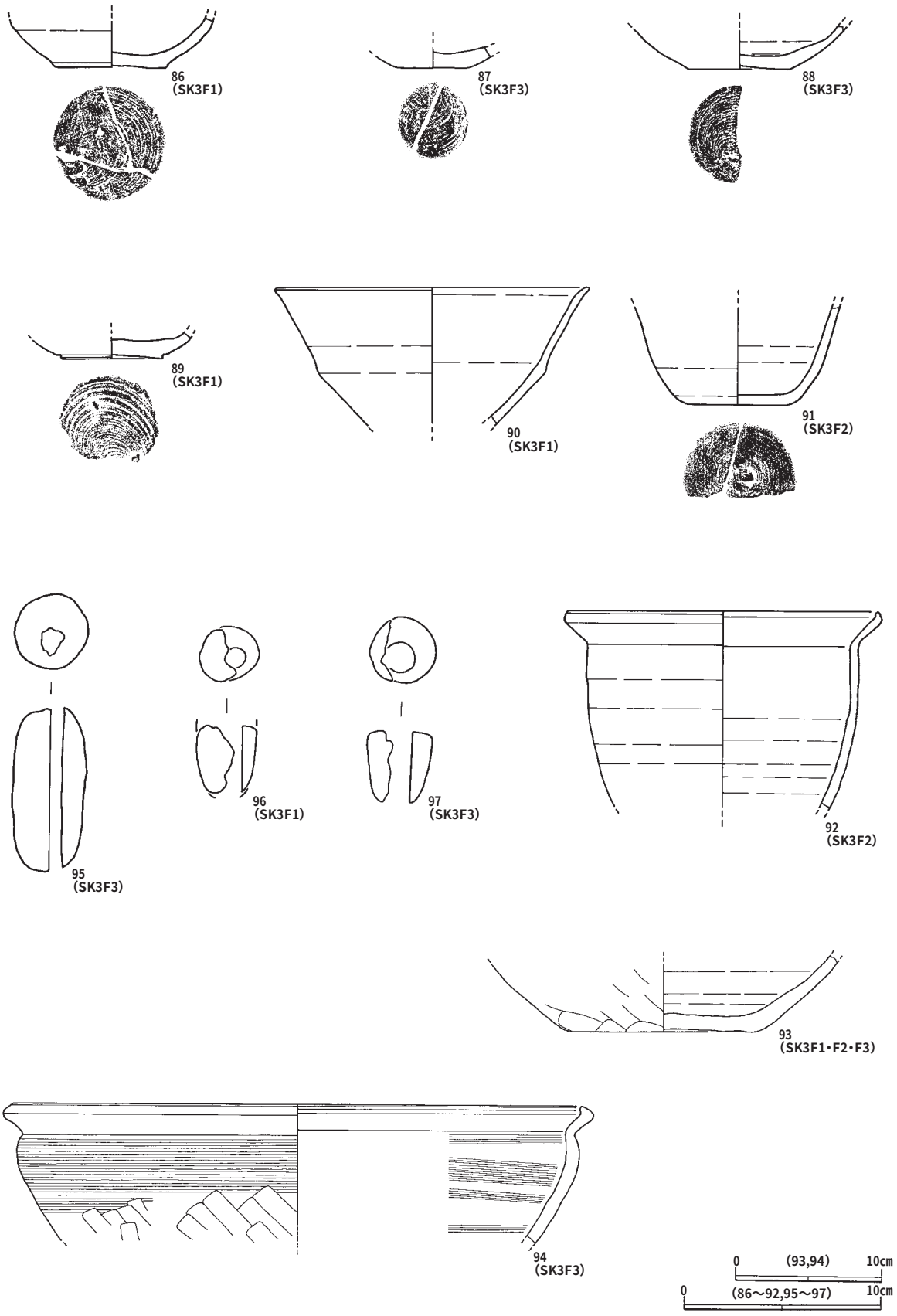
第33図　小平２遺跡　SK2遺構出土遺物(1)



第34図　小平２遺跡　SK2遺構出土遺物(2)

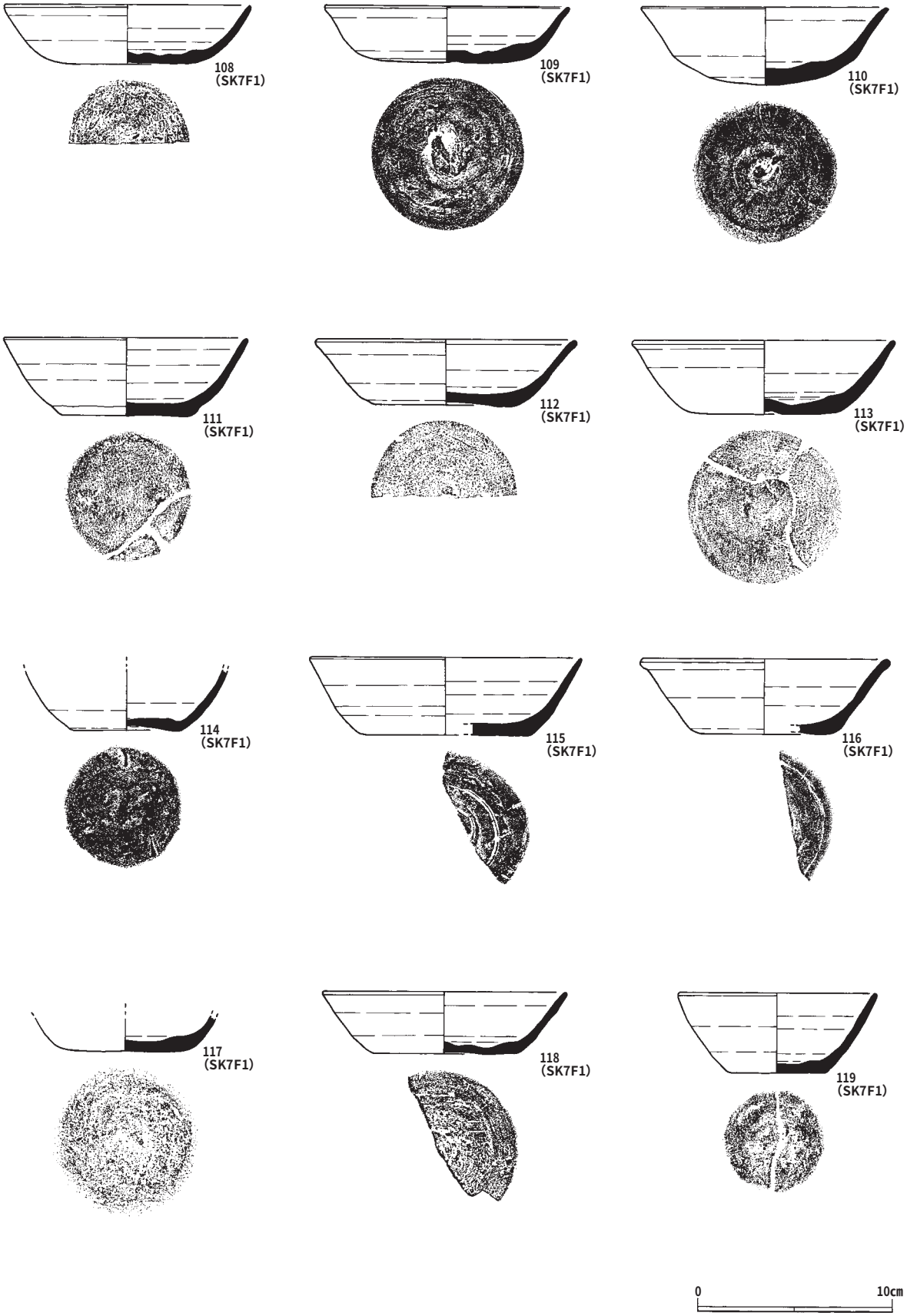


第35図　小平２遺跡　SK3遺構出土遺物(1)



第36図　小平２遺跡　SK3遺構出土遺物(2)

第37図　小平２遺跡　SK4･5･6遺構出土遺物



第38図　小平２遺跡　SK7遺構出土遺物(1)

であるが、胎土には繊維を含んでいる。これらの土器は縄文時代早期末から縄文時代前期初頭の土器であると考えられよう。211は大型の深鉢であり底部からゆるやかに開きながら直立する器形であると考えられる。表裏とも調整痕が残り、縄文は見られない。212は口縁部破片である。３条の太い沈線の直下に縄文が施されている。214は219と同一個体と考えられるが、数条の沈線の直下に木目状撚糸文が施されている。213では沈線の直下に格子状の沈線が施されている。218はおそらくこれらの一群の可能性が高いと考えられる。これらは、縄文時代中期半ばの土器であり、北陸地方の影響を受けた一群であると考えられよう。

北陸地方の影響

石器はこれらの時期、すなわち縄文時代早期末～前期初頭あるいは縄文時代中期に相当する時期の所産であることが考えられるが、時期的な決定はできない。器種としては220は石篦、221は石匙、222は磨製石斧である。特に222の磨製石斧は擦切りによって両側縁を形成している所謂擦切り石斧である。この類例も少ない。この石斧はおそらく縄文時代早期の一群を形成するものであろうと考えられる。

擦切り石斧

奈良・平安時代の遺物

・遺構に伴う遺物

ＳＫ11遺構

ＳＫ11遺構　第46図　（第25図　図版10・29）

調査区の中央部北寄りに位置する、Ｊ－40・Ｋ－40グリッドで検出された。西側から投げ込んだように、拳大からそれよりもやや大きい礫が集中して存在し、この礫の間に挟まれる形で、遺物も存在していた。遺物は破片になっていたが、復元によって全形を知ることができるものがある。

出土遺物としては、須恵器大甕(183)、土師器長胴甕(184)・土師器小型壺(185)の各器種がある。須恵器大甕には、別個体と融着した部分がある。土師器長胴甕・小型壺は、隣接するＪ－39グリッドの出土遺物と接合し、同時性を知ることができる、さらには復元によって器形の全体を知ることができる。

遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物　第46図

須恵器坏(186～189)、須恵器高台付坏(190、191)、須恵器長頸瓶(192～196)、須恵器蓋？(197、198)、土師器坏(199、200)、土師器内黒蓋(201)、土師器小型壷(202、203)、土師器小型短頸壷(204)、土師器長胴甕(207～209)、土師器甑？(210)、製塩土器？(205、206)などがある。このうち、204の薬壷型壷が注目される。また、土師器内黒蓋とした遺物もこの地域では類例に乏しいものである。疑問符をつけた器形がいくつかある。これらについては的確な判断ができない。後考を期したい。

以上小平２遺跡、小平３遺跡の出土遺物の概要について述べてきた。これらの遺物の年代観について、最後にまとめておきたい。最初に小平２遺跡、小平３遺跡に人々の活動の痕跡が窺われるのは、旧石器時代である。小平２遺跡から出土したナイフ型石器は、後期旧石器時代のものであると考えられる。同じような石器は、北側にある八森遺跡からも出土しているので、こうした集団がこの周辺に活動していたものと考えることができよう。

次に活動の痕跡が窺われるのは、縄文時代初めのことである。小平２遺跡から縄文時代早期の中頃の貝殻沈線文を持つ土器が出土している。こうした土器群を持つ集団がこの周辺で活動

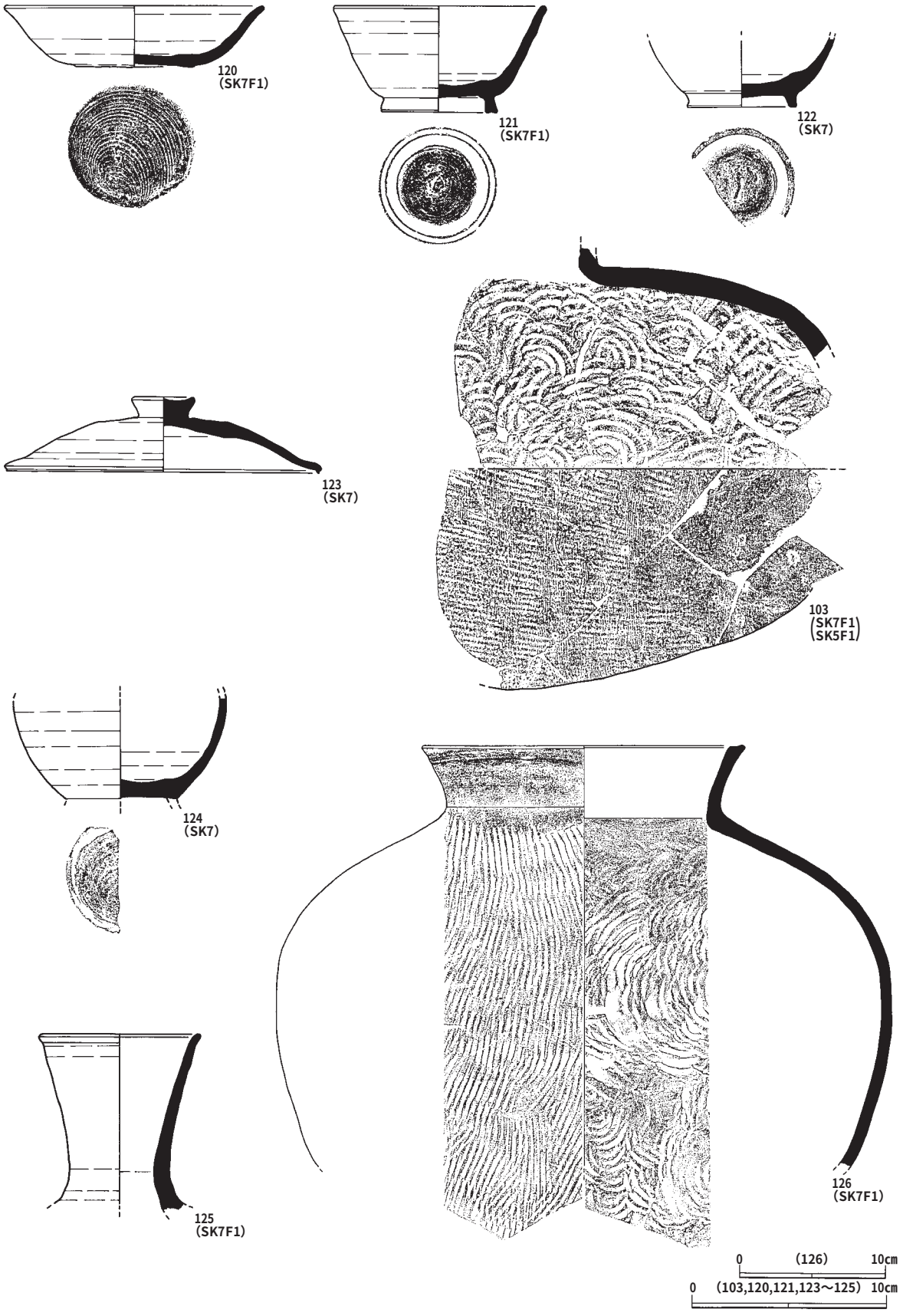
していた。今から約7000年ほど前のことである。

次に活動の痕跡が窺われるのは、今から約6000年ほど前のことである。小平３遺跡から縄文時代前期初頭の土器が出土している。この早期・前期の遺跡はごく部分的な営みであった可能性が高い。残された遺物も少ない。こうした土器を使っていた集団は、出羽丘陵の山中に点々と遺跡を残している。

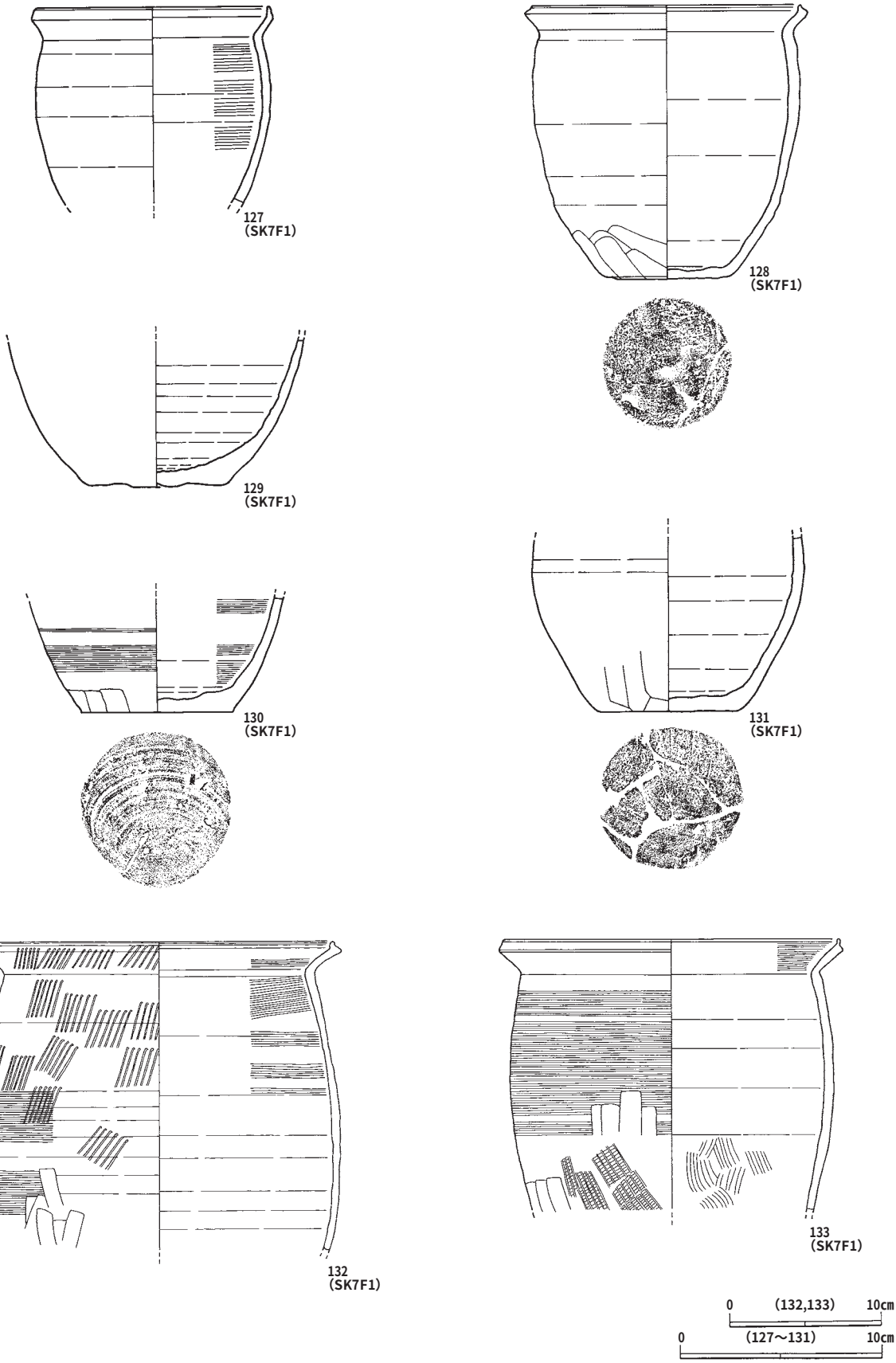
次に活動の痕跡が窺われるのは今から約4500年ほど前のことである。小平３遺跡からややまとまって、縄文時代中期中頃の土器が出土している。個体数も多いことから、やや長い時間この場所に居住していた可能性がある。

次に活動の痕跡が窺われるのは、今から約1000年前前後のことである。この時期の遺構・遺物は最も多い。

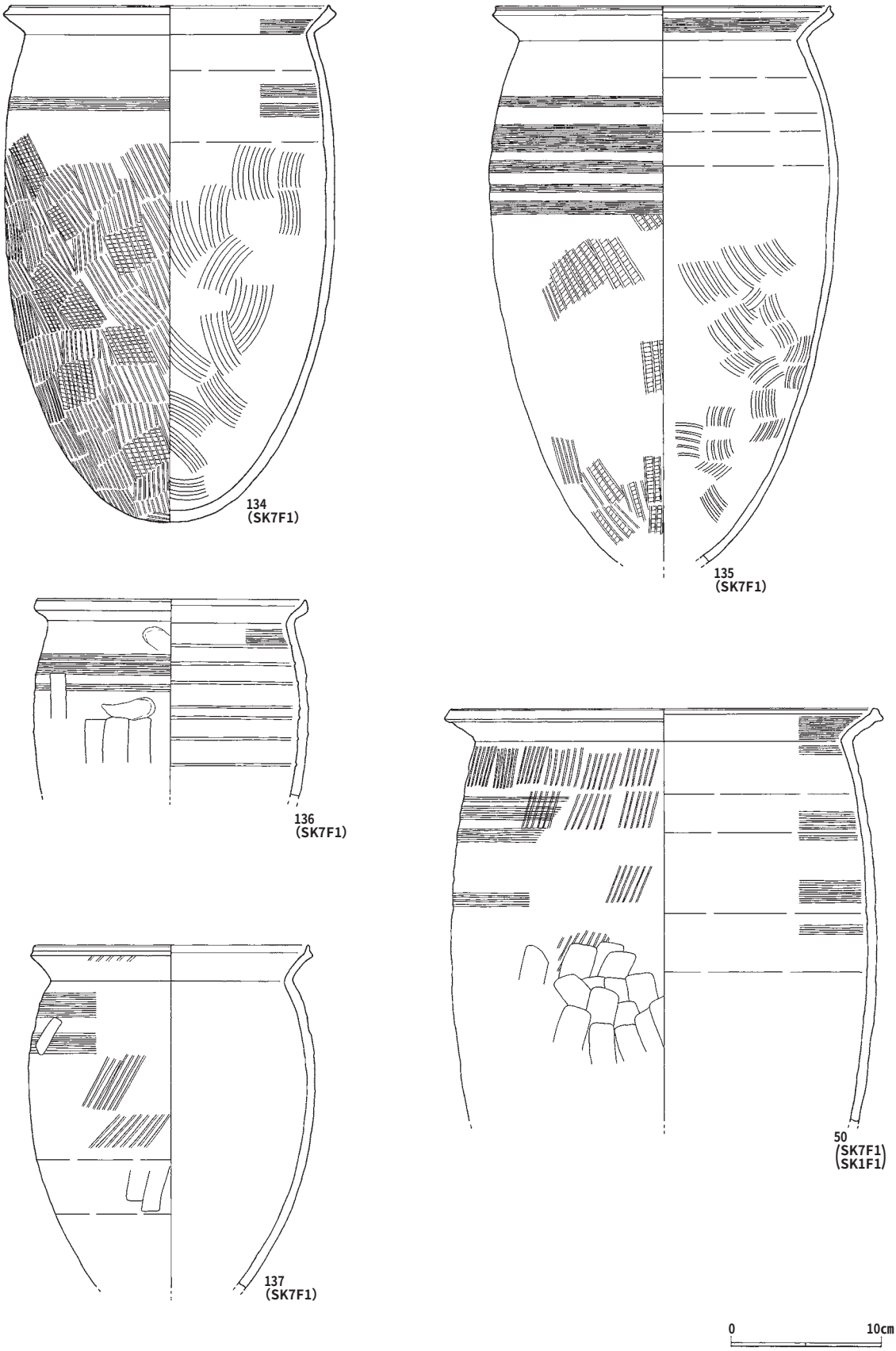
小平２遺跡、小平３遺跡の中心的な時期は奈良・平安時代であることがわかった。遺構間の接合は存在したが、遺跡間の接合は存在しなかったため、小平２遺跡と小平３遺跡は同時期存在であったのかどうかは不明なものの、遺跡から出土した奈良・平安時代の遺物はよく似ているために、同一の遺跡であった可能性が高い。おそらく地点を変えながら居住していたものと考えられよう。近現代の遺物は、流れ込みの可能性が高い。



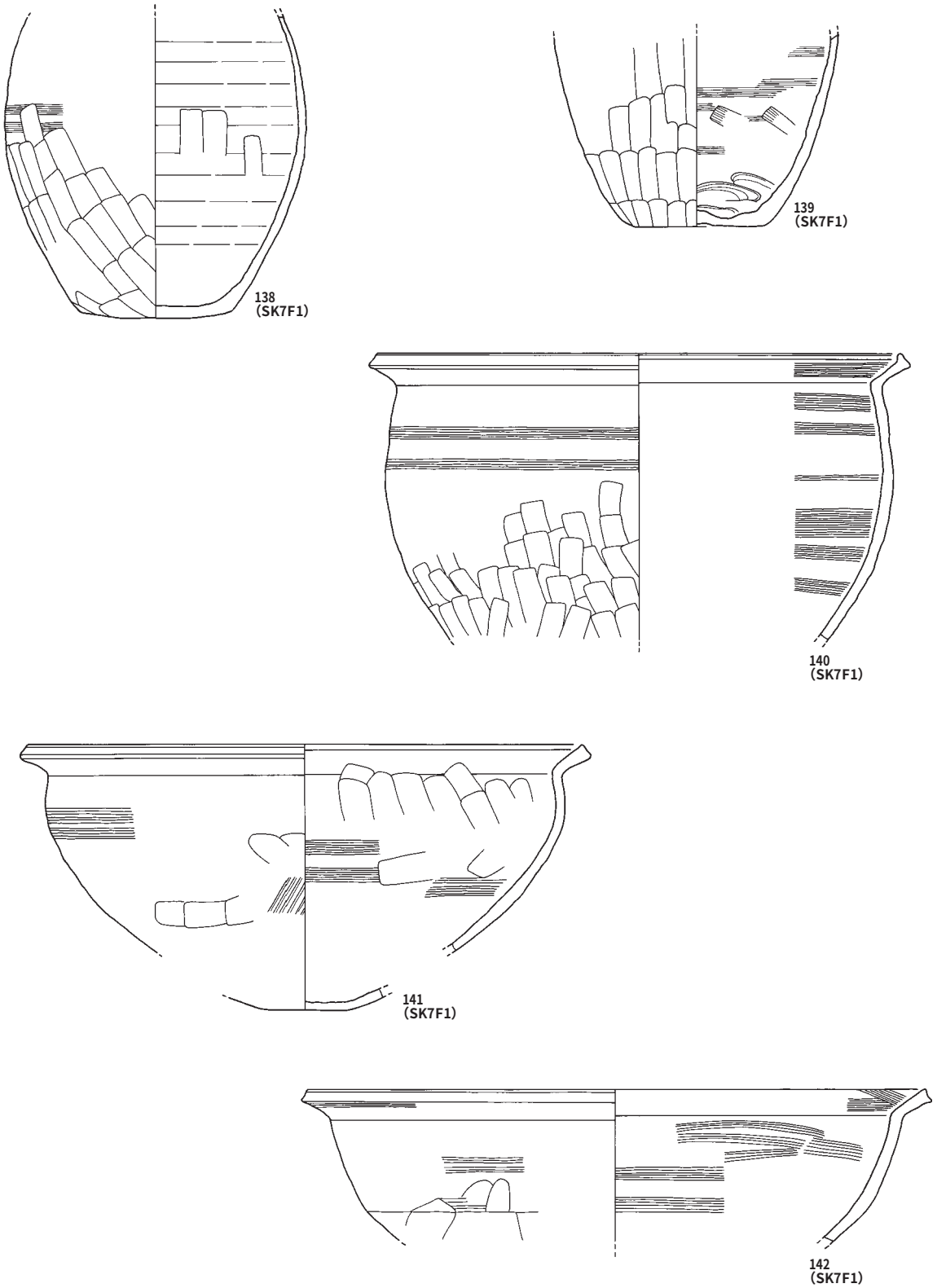
第39図　小平２遺跡　SK7遺構出土遺物(2)



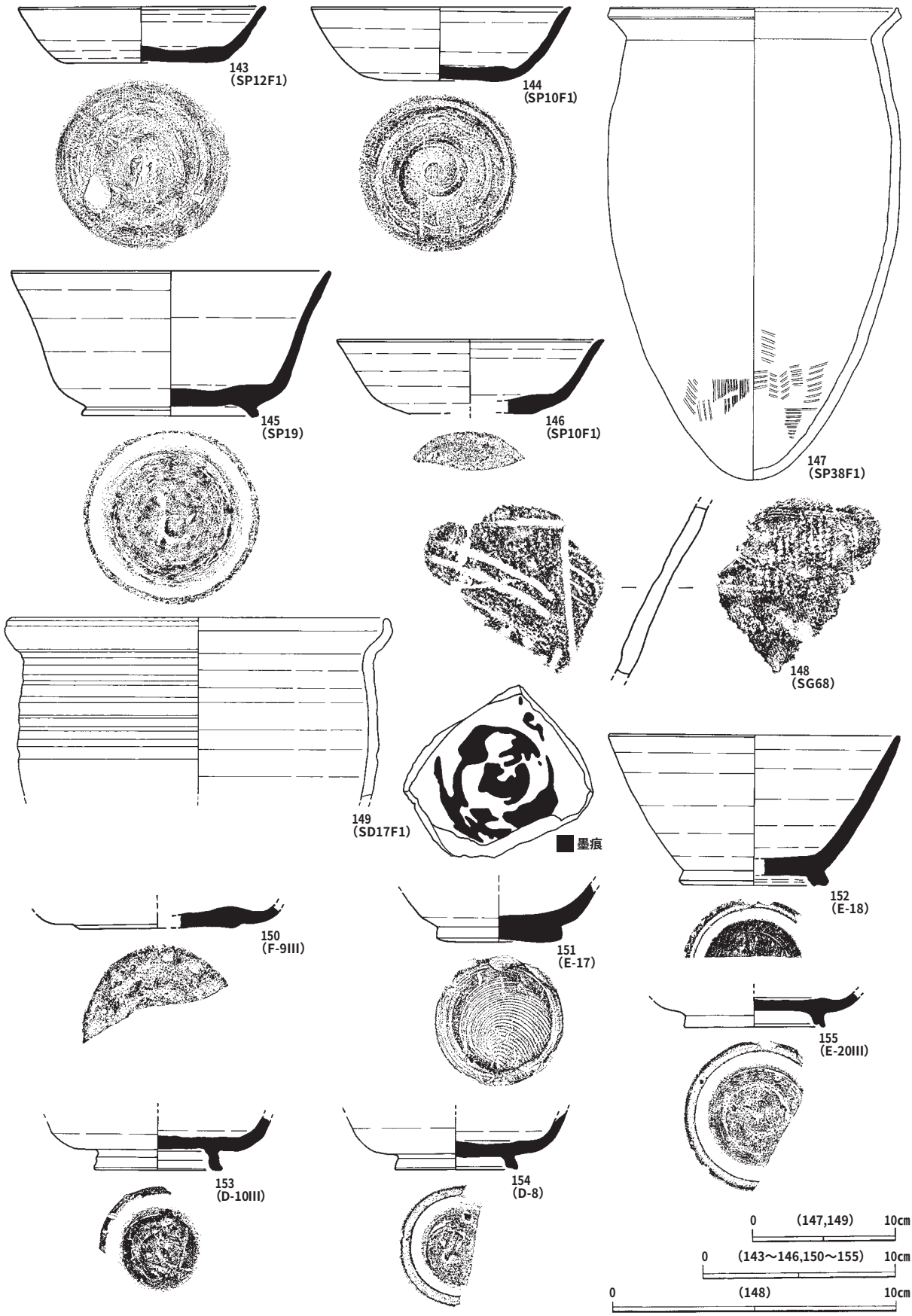
第40図　小平２遺跡　SK7遺構出土遺物(3)



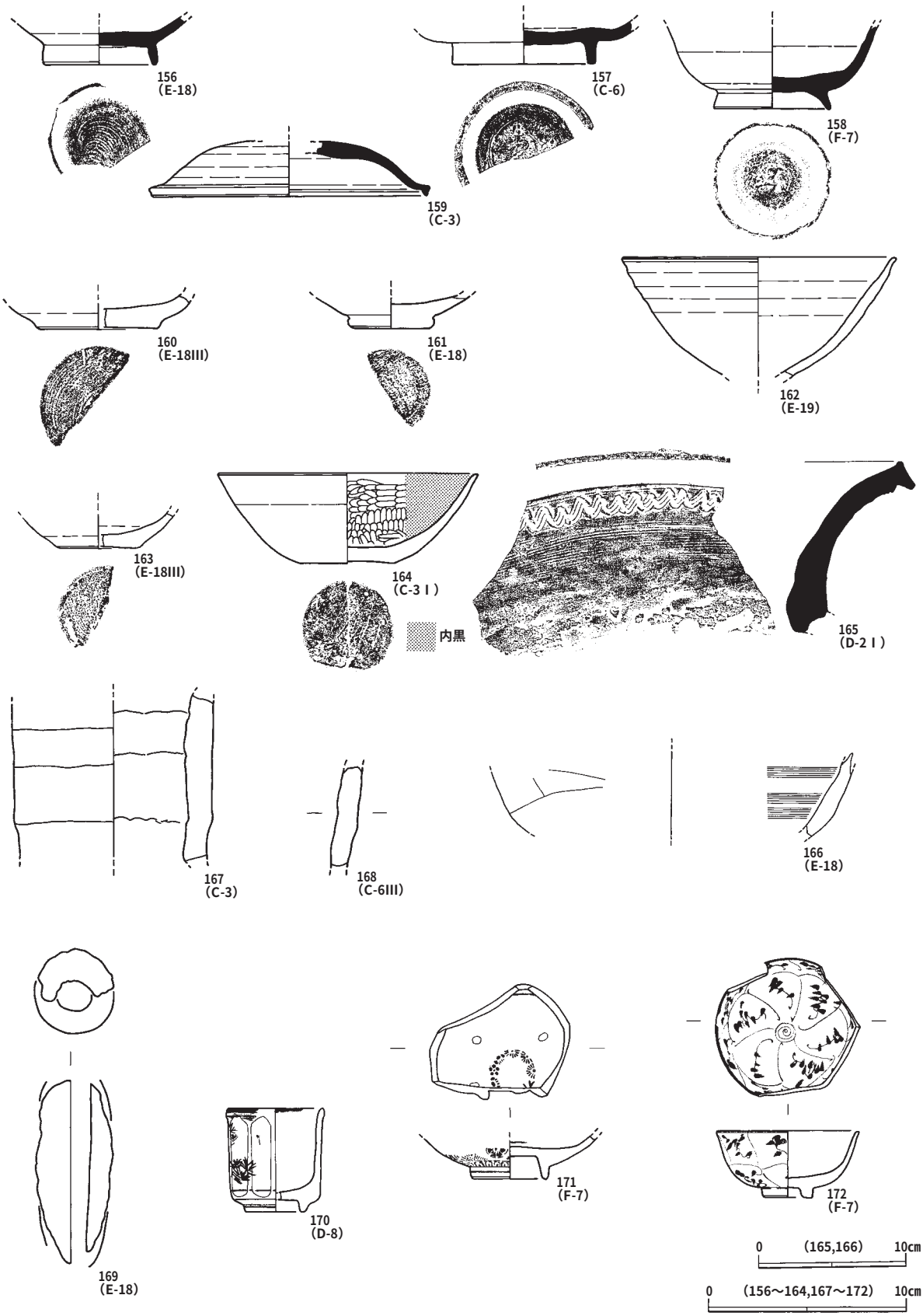
第41図　小平２遺跡　SK7遺構出土遺物(4)



第42図　小平２遺跡　SK7遺構出土遺物(5)

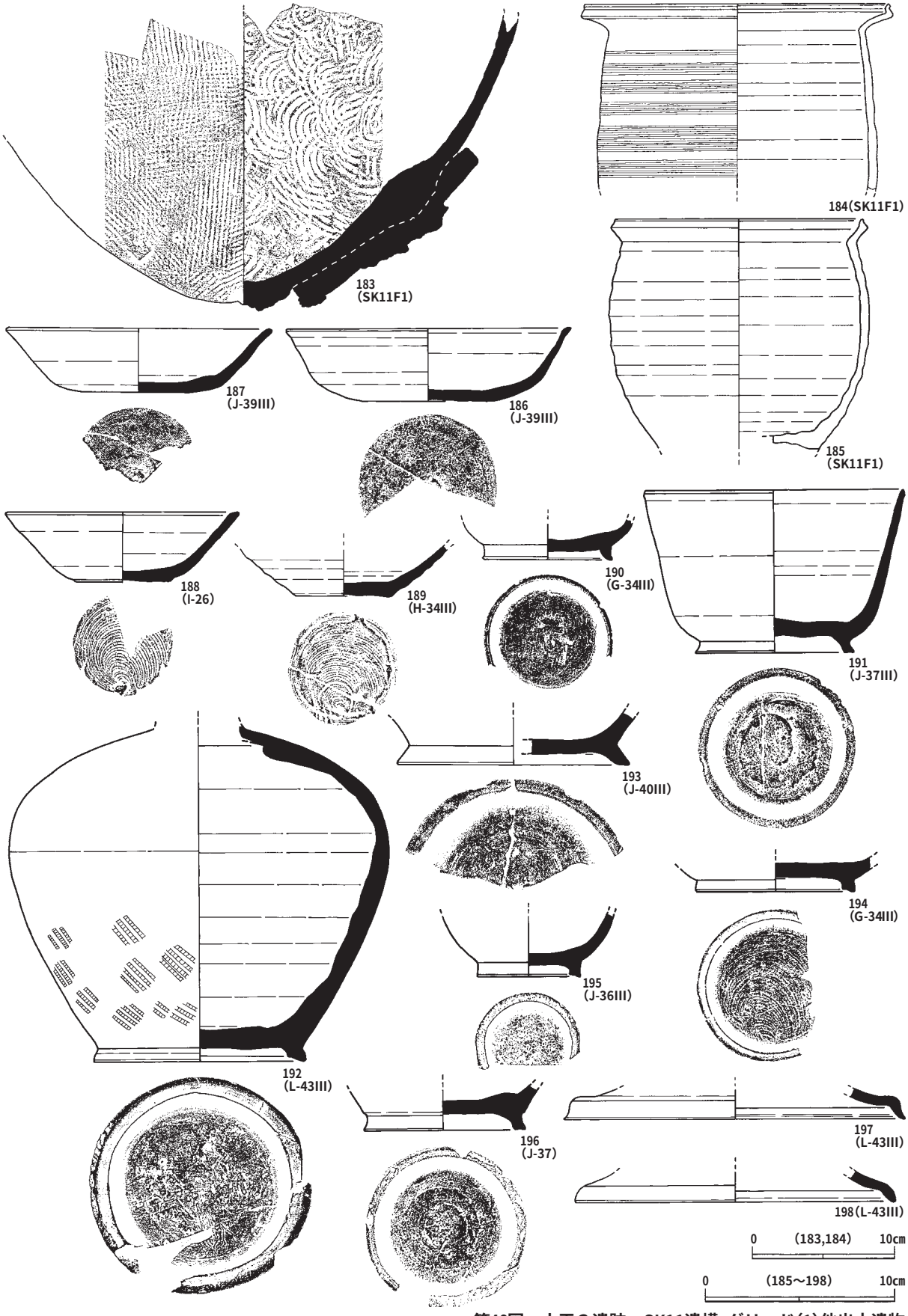


第43図　小平２遺跡　SP10・12・19・38・SG68・SD17・その他のグリッド(1)出土遺物

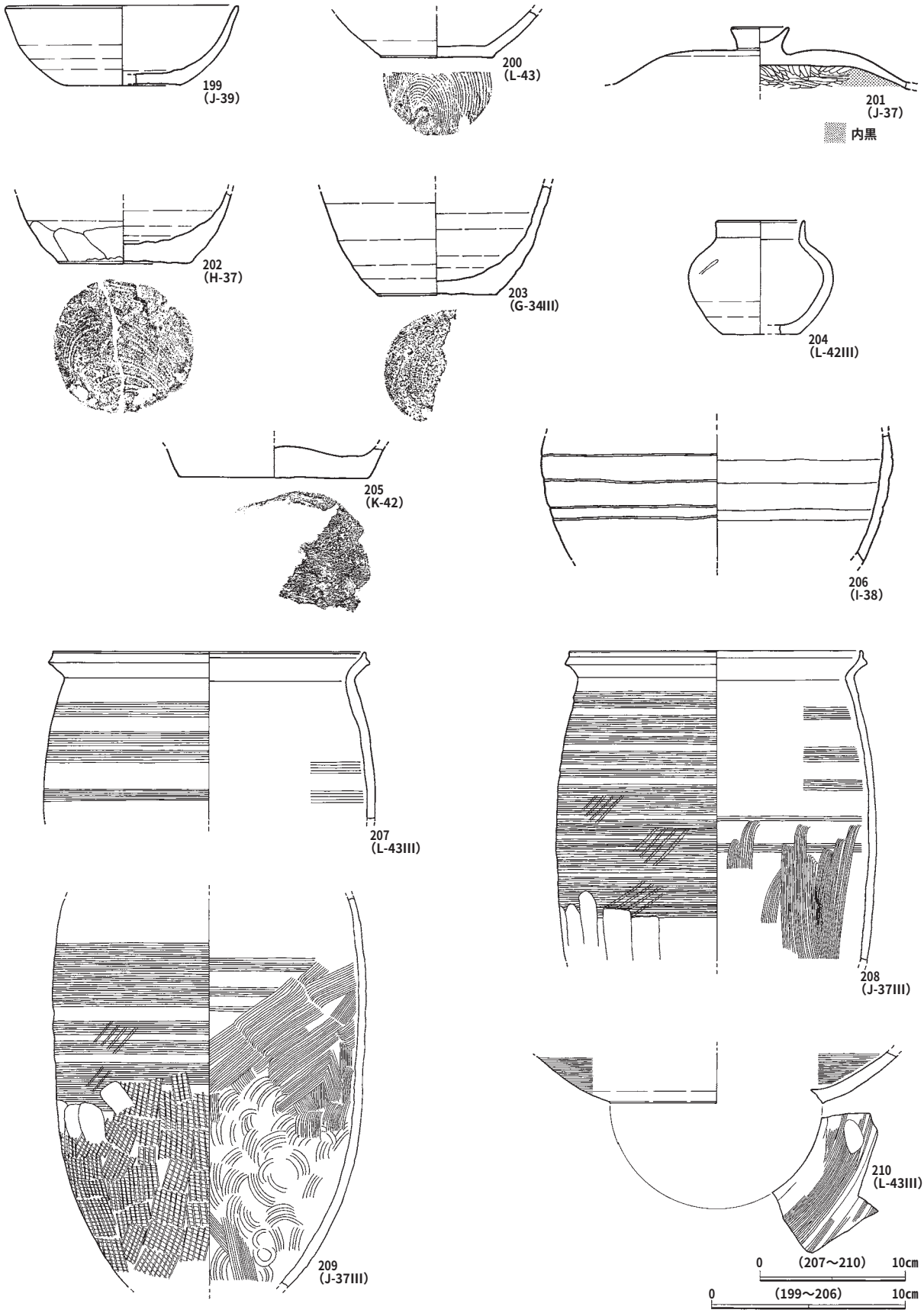


第44図　小平２遺跡　その他のグリッド(2)出土遺物

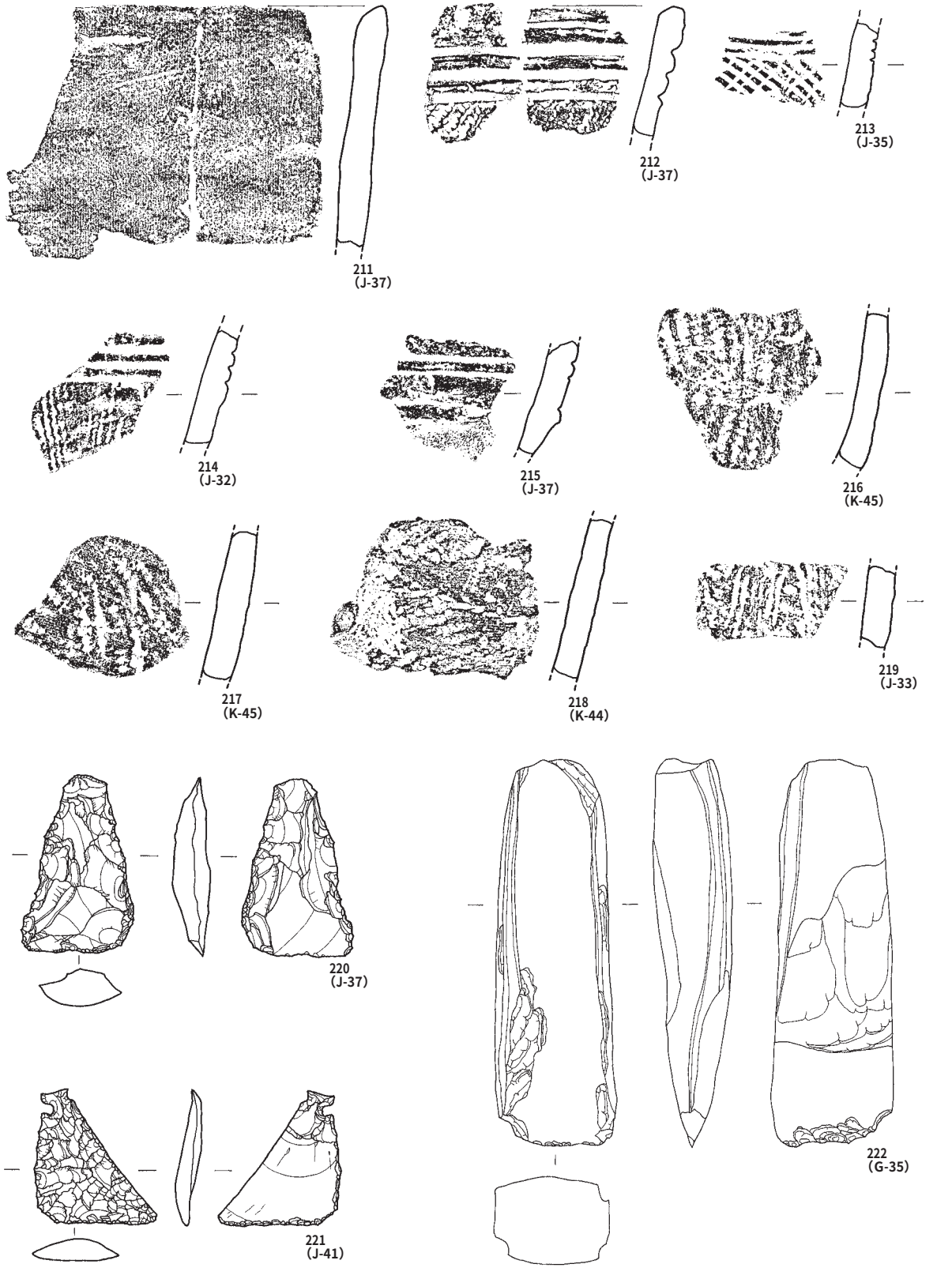
第45図　小平２遺跡　SK11遺構・その他のグリッド(3)出土遺物



第46図　小平３遺跡　SK11遺構・グリッド(1)他出土遺物



第47図　小平３遺跡　グリッド(2)出土遺物



第48図　小平３遺跡　グリッド(3)出土遺物

Ⅶ　まとめ

最初に小平２遺跡、小平３遺跡周辺の奈良･平安時代の様相についてまとめたい。次に発掘調査の成果についてまとめたい。

奈良･平安時代の様相

小平２遺跡、小平３遺跡周辺の奈良･平安時代の様相

山形県教育庁文化財保護室の集成した遺跡数の調査によれば､庄内地方に所在する奈良･平安時代の遺跡は約300を数えることができる。小平２遺跡、小平３遺跡との年代観の検討が可能な遺跡として、139遺跡を挙げることができた(第52、53図)。これらの時期的な変化を図化し、庄内地方に於ける遺跡の歴史的変遷を考察し、小平２遺跡、小平３遺跡の相対的位置を明らかにしたい。この時期の政治的状況についても一覧(第53図)としてあるので参考にされたい。なお、川北とは最上川よりも北側の地域を示し、川南とは同じく南側を示す。主要遺跡名並びに河川名については第５図を参考にされたい。

８世紀第３四半期

･８世紀第３四半期（第５図、第49図）

８世紀の第３四半期の遺跡は、この地域で最初に分布的展開を示す遺跡であるが、その存在は非常に少ない。分布は、川北では吹浦湊周辺、高瀬川周辺、遊佐町周辺、新井田川・平田川周辺となる。合計しても十数遺跡を見いだすに過ぎない。川南では、大山川周辺にわずか１遺跡を見いだすに過ぎない。開発の中心は川北にあり、庄内地域の古代の開発は、川北遊佐地域を中心として始まったことがわかる。高瀬川周辺では、遺跡群の成立と同時に、剣龍神社古窯跡群が成立する。新井田川･平田川周辺でも、遺跡数は少ないものの、遺跡が分布し始めると、時を同じくして泉谷地古窯跡群が成立する。生産遺跡と消費遺跡がセットで成立する姿を注目しておきたい。城輪柵跡を中心とした国府域の周辺には、遺跡は希薄である。

８世紀第４四半期

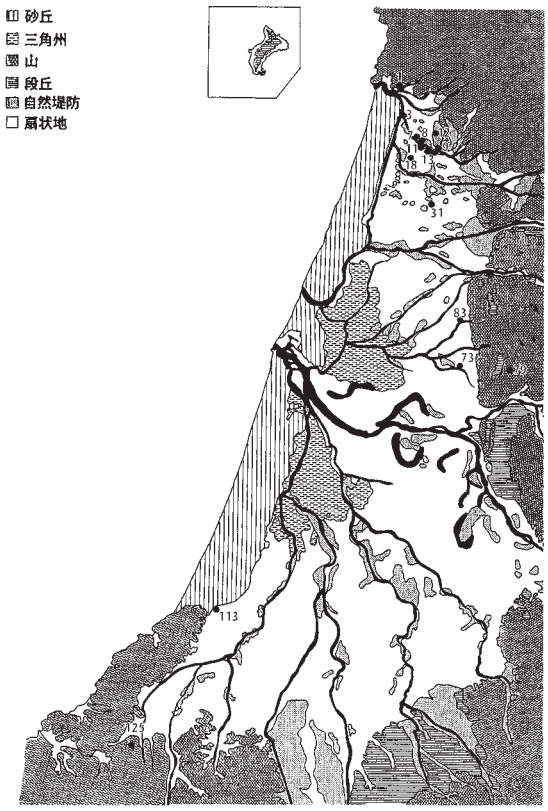
･８世紀第４四半期（第５図、第49図）

８世紀の第４四半期の遺跡は、この地域で最初に広範な分布的展開を示す遺跡である。遺跡数も増加し、各流域毎に分布が知られるようになってくる。分布は、川北では吹浦湊周辺、高瀬川周辺、遊佐町周辺、新井田川･平田川周辺となる。川南では、大山川周辺と、藤島川周辺に遺跡を見いだすことができるが、その数は川北に較べて圧倒的に少ない。ここでもまた開発の中心は川北にあったと考えられる。遺跡の展開と連動して、生産遺跡の活動も活発化する。新井田川･平田川周辺でも、国府擬定地城輪柵跡が成立し、周辺にも国分寺擬定地堂の前遺跡などが成立した。泉谷地古窯跡群は前代に引き続いて操業し、泉森南窯跡では城輪柵跡出土と同范の瓦が生産されはじめ、国府との強い結び付きを知ることができる。新たに願瀬山古窯跡群が操業を開始する。生産遺跡と消費遺跡が国府とその工房というセットで成立する姿を注目しておきたい。庄内平野の開発の転機と言えるであろう。

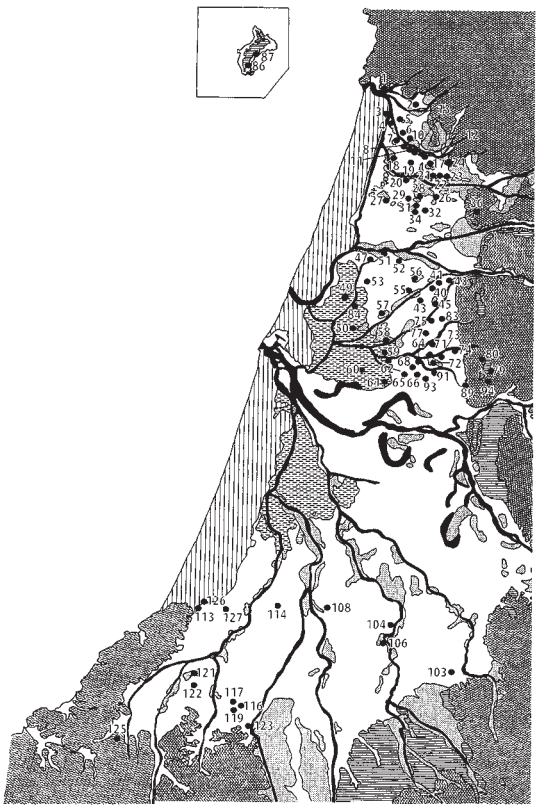
９世紀第１･２･３四半期

･９世紀第１･２･３四半期（第５図、第49図）

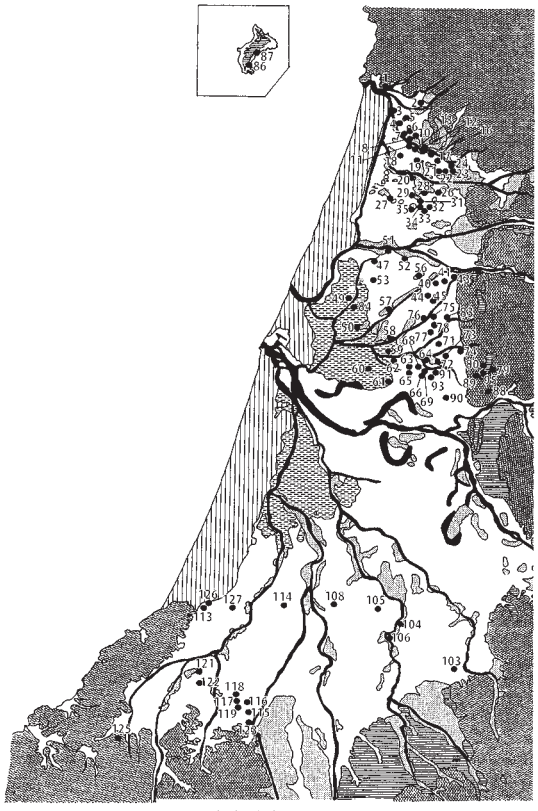
９世紀第１･２･３四半期の遺跡は、８世紀の第４四半期の遺跡の立地を引き継いで、展開した時期と言える。小平２遺跡、小平３遺跡もこの時期に成立する。遺跡数も８世紀第４四半期



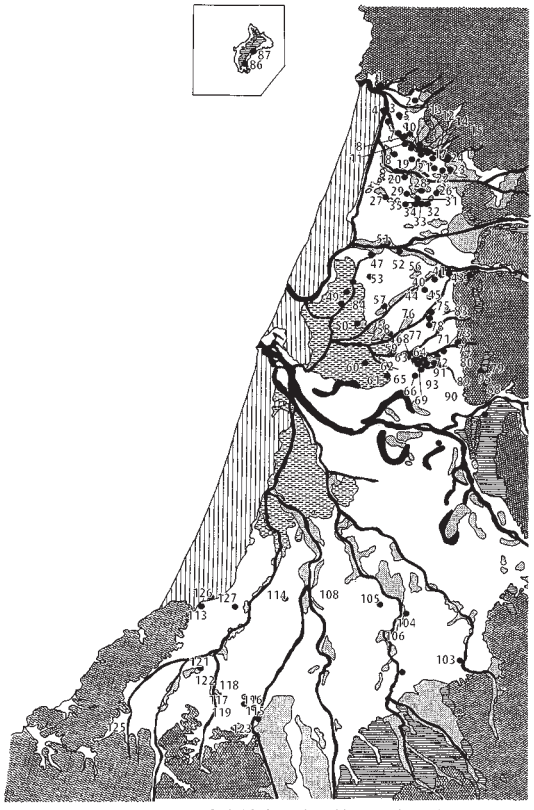
庄内地方８世紀第３四半期遺跡分布図



庄内地方９世紀第１四半期遺跡分布図

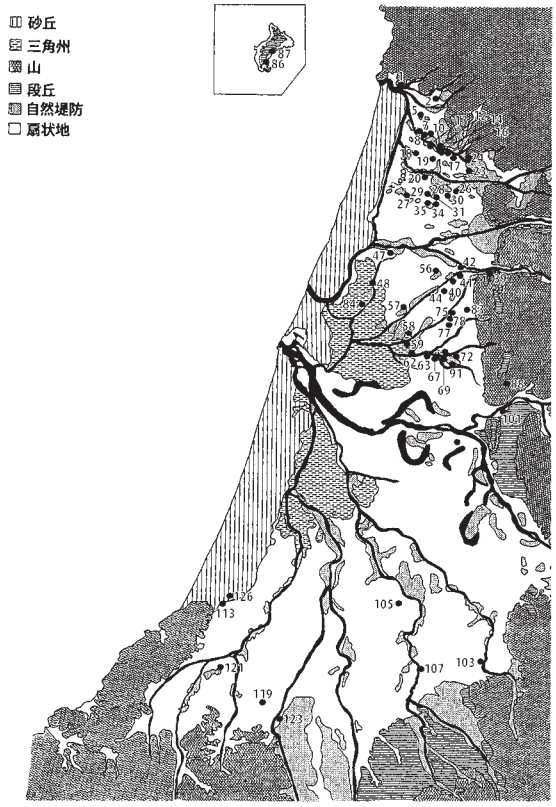


庄内地方９世紀第２四半期遺跡分布図

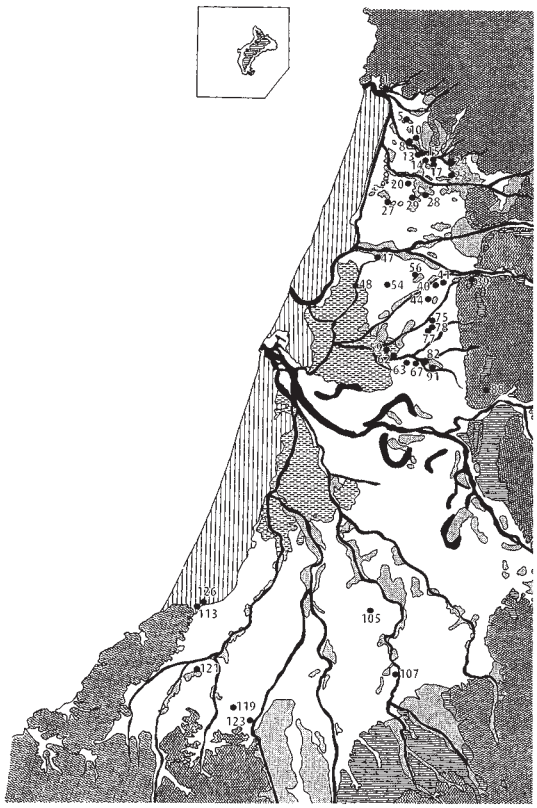


庄内地方９世紀第３四半期遺跡分布図

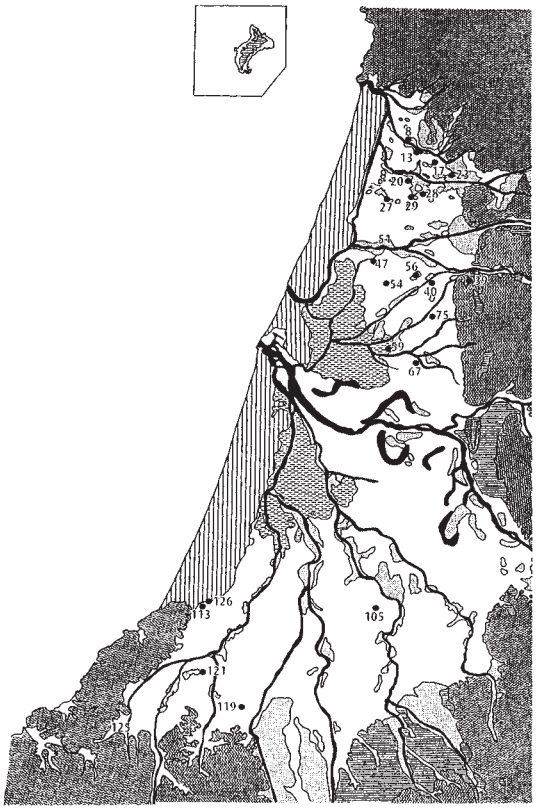
第49図　庄内地方古代遺跡分布図(1)(８世紀後半～９世紀後半)



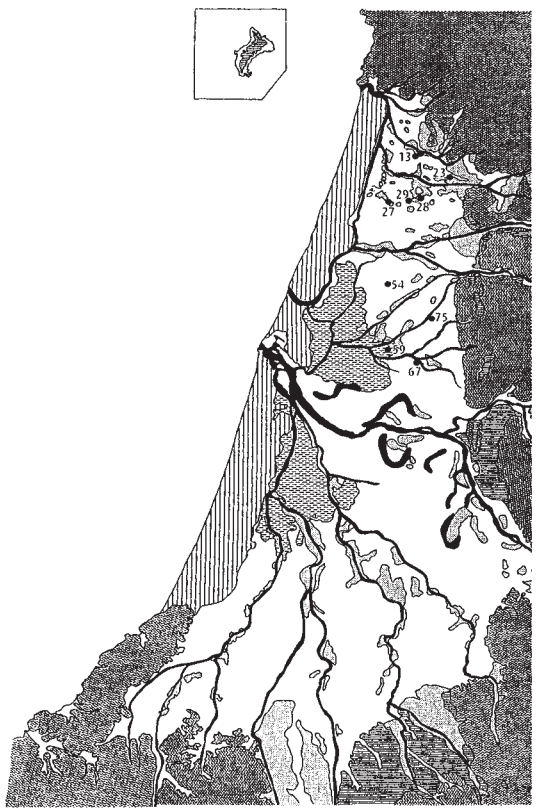
庄内地方９世紀第４四半期遺跡分布図



庄内地方 10 世紀第１四半期遺跡分布図



庄内地方 10 世紀第２四半期遺跡分布図



庄内地方 10 世紀第３四半期遺跡分布図

第50図　庄内地方古代遺跡分布図(2)(９世紀後半～10世紀後半)

からさらに増加し、各流域毎に分布が知られるようになっていたものが、その立地を自然堤防上から低地まで広げ、前代以来の面的展開がよりいっそう顕著になる。その分布は、川北では前代と同様であり濃密である。このために遺跡の営まれる地域がより具体的に把握できるようになる。特に遺跡立地の空閑地に注目すれば、日向川と荒瀬川の合流点付近から砂丘に当たって流路を南下させるあたりまでは遺跡が分布しない。このあたりは、日向川の流路変更などに伴って、安定しなかったものと思われる。泉谷地古窯跡群は前代に引き続いて操業し、願瀬山古窯跡群も操業するが、新たに９世紀第２四半期代に操業を開始した山海窯跡に生産の中心を移行させて行く。川南の状況であるが、大山川流域に前代以来展開していた遺跡は減少し、鶴岡地域の西側に分布の集中域を認めるようになる。この時期は、本楯地区に国府関連の遺跡が展開する時期である。

・９世紀第４四半期（第５図、第50図）　**９世紀第４四半期**

９世紀第１・２・３四半期の遺跡は、基本的には８世紀の第４四半期の遺跡の立地を引き継いで展開したが、９世紀第３四半期に入ると遺跡の分布は変化を見せ、廃絶する遺跡が多くなってくる。とくに画期となるのが、この時期９世紀第４四半期である。

遺跡は前代を引継いで広範な分布的展開を示すものの、遺跡数は減少傾向へと突入する。遊佐地域ではこの傾向は見られない。本楯地域では全体として遺跡が減少している。より南の地域に存在した遺跡の集中域である上田地区と平田地区の北半部では、生石２遺跡や関Ｂ遺跡、熊野田遺跡などは引き続いて残るが前代に較べると、遺物の様相は少なくなる。

須恵器生産も、山海窯跡群のみに集約されるようになり、それまで存在した窯跡群は生産を低下させ、やがては廃絶するようになる。この時期は、本楯地区の国府関連の遺跡が展開から終焉へと向かう時期である。興味深いことに遊佐地域と吹浦地域、北目地域には前代と同様に遺跡が展開する。この時期以降あたらしく遺跡が成立することはなくなる。

・10世紀第１四半期（第５図、第50図）　**10世紀第１四半期**

画期となる９世紀第４四半期を過ぎて、遺跡数は減少し、分布も前代の減少傾向をさらに進行させることになる。地域全体として、遺跡の減少傾向へと突入するものの、遊佐地域ではこの傾向は見られない。本楯地域では全体として遺跡が減少し、低地へと展開していた遺跡群が営まれなくなってくる。この時期には前代に施行された条里制が維持できなくなっていくと見ることもできようか。より南の地域に存在した遺跡の集中域である上田地区と平田地区の北半部では、生石２遺跡は廃絶され、関Ｂ遺跡、熊野田遺跡などは引き続いて残るものの、遺跡の盛期はすでに過ぎている。須恵器生産も終焉を迎える、山海窯跡群の生産は、あかやき土器が中心となり、窯体を使用せず、窯わきの土坑などによる生産へと変化し、やがては生産が退廃し、遺跡自体も廃絶するようになる。

興味深いことに遊佐地域と吹浦地域、北目地域には前代と同様に遺跡が展開する。一方国府域の中心である本楯地域では減少する。同様に、平田地域でも減少する。これは、国府域の開発の一環として計画集落が分出され、特に低湿な地域に向かって展開していたものが、国府機能の衰退とともに、終焉をむかえるということであろう。

・10世紀第２四半期（第５図、第50図）　**10世紀第２四半期**

遺跡数は減少し、分布も前代の減少傾向をさらに進行させることになる。遺跡の分布減少傾

庄内地方遺跡一覧表

No.	遺跡		8世紀				9世紀				10世紀				11世紀				12世紀				文献
			1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
1	吹浦Ａ遺跡	遊佐町			■	■	★	■	■	■	■												山教委 1984・85・88 山埋調 82・93・120 集
2	升川遺跡	遊佐町				■	■	■	■	■											■	■	山埋セ 1994 調 9 集
3	筋田遺跡	遊佐町			■	■	★	■	■														山教委 1993 山埋調 187 集
4	野瀬遺跡	遊佐町				■	■	■	★														山教委 1994 山埋調 194 集
5	中田浦遺跡	遊佐町				■	★	★	★		■												山教委 1974・93 山埋調 1・185 集
6	地蔵田遺跡	遊佐町				■	■	■	■														山教委 1991・1992・1993・1994・1995 山埋調 1 集
7	北目長田遺跡	遊佐町			■	■	★	★	■	★													山埋セ 1995・96・98 調 24・31・56 集
8	橇待遺跡	遊佐町			■	■	■	■	■	■	■	■											山埋セ 1995・96 調 24・31 集
9	剣竜神社西窯跡	遊佐町			■																		阿部明彦・高桑弘美 1999「山形県古代の土器編年」第 25 回城柵検討会資料
10	堂田遺跡	遊佐町					■	■	■	■	■												山埋セ 1995 調 24 集
11	木戸下遺跡	遊佐町			■	■	■	★	■														山埋セ 1995・97 調 25・45 集
12	宮の下遺跡	遊佐町			■	■	■	■	■														山埋セ 1996 調 32 集
13	上高田遺跡	遊佐町			■	★	★	★	★	★	■	■	★	■	----								山埋セ 1995・98 調 25 集・57 集
14	石田遺跡	遊佐町							■	■	■	■	■	■									山教委 1989 山埋調 136 集
15	宅田遺跡	遊佐町						■	■	■	■												山教委 1983 山埋調 72 集
16	道中遺跡	遊佐町				■																	山教委 1974 山埋調 1 集
17	大坪遺跡	遊佐町				■	■	■	■	■	■	■	■										山埋セ 1995 調 23 集
18	木原遺跡	遊佐町			■	■	■	■	■	■	■												山埋セ 1994 調 8 集
19	古屋敷遺跡	遊佐町																					山教委 1998 山埋調 199 集
20	小深田遺跡	遊佐町				■	★	■	★	■	■	■											山教委 1988 山埋調 140 集
21	三田遺跡	遊佐町					■	■	■														山教委 1991 山埋調 163 集
22	袋冷遺跡	遊佐町					■	■	■														山教委 1989 山埋調 136 集
23	北子橋下遺跡	遊佐町					■	■	■	■	■	■	■	■									山教委 1992 山埋調 171 集
24	仁田田遺跡	遊佐町					■	■	■	★	■										----		山教委 1990 山埋調 148 集
25	金俣Ｄ遺跡	遊佐町					----	----	----	----													山教委 1991 山埋調 163 集
26	大橋遺跡	遊佐町					----	----	----	----									----	■	■		山教委 1988・89 山埋調 121・139 集
27	東田遺跡	遊佐町				■	★	■	★	■	★	★	■	■	----	----	----						山教委 1991 山埋調 165 集
28	浮橋遺跡	遊佐町					■	■	■	■	■	★	■	■	----								山教委 1988 山埋調 141 集
29	下長橋遺跡	遊佐町					■	■	■	★	■	■	★	■	----	----	----						山教委 1988・89 山埋調 142・145 集
30	水尻遺跡	遊佐町																					山教委 1988 山埋調 1 集
31	中谷地遺跡	遊佐町			★	★	■	■	■	■													山教委 1974 山埋調 1 集
32	佐渡遺跡	遊佐町				■	■	■	■														山教委 1982 山埋調 51 集
33	塚田遺跡	遊佐町																					山教委 1982 山埋調 51 集
34	地正面遺跡	遊佐町				■	■	■	■	■													山教委 1982 山埋調 51 集
35	前田遺跡	遊佐町																					山教委 1982 山埋調 51 集
36	唐戸岩Ａ窯跡	遊佐町				■	■	■															阿部明彦・高桑弘美 1999「山形県古代の土器編年」第 25 回城柵検討会資料
37	蛾岡遺跡	遊佐町																			■	■	佐藤禎宏 1980「最上川流域出土の珠洲陶器」庄内考古学 17
38	金俣経塚	遊佐町																			----		遊佐町教委 1993「遊佐町金俣経塚」
39	八森遺跡	八幡町					■	■	■	■	■	■											八幡町教委 2002『八森遺跡』
40	後田遺跡	八幡町				■	■	■	■	■	■												山教委 1983 山埋調 64 集
41	堂の前遺跡	八幡町				■	■	■	■	■	■												山教委 1975・76・77・80 山埋調 5・7・10・30 集
42	芽針谷地遺跡	八幡町																					山教委 1981 山埋調 49 集
43	樋掛遺跡	八幡町				■	■	■	■														山教委 1982 山埋調 52 集
44	沼田遺跡	八幡町				■	■	■	■	★	■												山教委 1983 山埋調 78 集
45	俵田遺跡	八幡町				■	■	■	■	■													山教委 1983・84 山埋調 64・77 集
46	樋の腰経塚	八幡町																			■	■	佐藤禎宏 1977「八幡町樋の腰経塚出土の壺 (1)(2)」庄内考古学 14
47	向田遺跡	酒田市					★	■	■	■	■	■											山埋セ 1996 調 34 集
48	蛙橋遺跡	酒田市							----	----													山教委 1997 山埋調 198 集
49	家際遺跡	酒田市				■	■	■	■	■													山教委 1996 山埋調 197 集
50	梵天塚遺跡	酒田市					■	■	■	■													山埋セ 1996 調 42 集
51	若王寺遺跡	酒田市					■	■	■	■													山教委 1980 山埋調 32 集
52	新田目Ｂ遺跡	酒田市					■	■	■	■													酒田市教育委員会『新田目Ｂ遺跡』1980
53	前田遺跡	酒田市					■	■	■	■													山教委 1988 山埋調 199 集
54	庭田遺跡	酒田市									■	■	■	■	■							■	山教委 1983 山埋調 65 集
55	安田遺跡	酒田市						■														■	山教委 1982 山埋調 56 集
56	城輪柵跡	酒田市					■	■	■	■	■	■	■	■								■	酒田市教育委員会『史跡城輪柵跡』1999
57	上曽根遺跡	酒田市				■	★	■	■	■	■												山教委 1986 山埋調 116 集
58	新青渡遺跡	酒田市							■	★	■	■	■	■									山教委 1982・83 山埋調 67 集・79 集
59	南興野遺跡	酒田市				■	■	■	■	■	■	■	■	■									山教委 1986・87 山埋調 114・122 集
60	土崎遺跡	酒田市					■	★	■	■													山埋セ 1996 調 42 集
61	熊手島遺跡	酒田市					■	■	■	■													山教委 1992 山埋調 171 集
62	熊野田遺跡	酒田市					■	★	■	★	■	■											山教委 1988・89・89 山埋調 123 集・137 集・146 集
63	手蔵田２遺跡	酒田市					■	■	■	★	■	■											山教委 1985・86 山埋調 87 集・98 集
64	手蔵田３遺跡	酒田市					■	■	----	----													山教委 1989 山埋調 137 集
65	手蔵田５(８含む) 遺跡	酒田市					■	■	■	■													山教委 1989 山埋調 137 集
66	手蔵田６遺跡	酒田市					■	■	■	■													山教委 1989 山埋調 137 集
67	手蔵田 12 遺跡	酒田市					■	■	■	■	■	■	■	■									山教委 1989 山埋調 137 集
68	手蔵田９遺跡	酒田市					■	■	----	----													山教委 1989 山埋調 137 集
69	手蔵田７遺跡	酒田市						■	■	■	■												山教委 1987 山埋調 110 集
70	横代遺跡	酒田市				■	■	■															山教委 1989 山埋調 137 集
71	高阿弥陀遺跡	酒田市				★	■	■	■	■	■											■	山教委 1985 山埋調 86 集
72	大槻新田遺跡	酒田市					■	■	■	■	■												山教委 1988・89 山埋調 129・137 集
73	生石４遺跡	酒田市			■	★	■	■	■	■	■												山教委 1987・88 山埋調 118・125 集
74	生石２遺跡	酒田市					★	■	★	■	■	■	■	■									山教委 1985・86・89 山埋調 89・99・117 集
75	境興野遺跡	酒田市					■	■	★	■	■	■	■	■	★	----							山教委 1981 山埋調 46 集
76	円能寺経塚	酒田市						■															山教委 1974 山埋調 1 集
77	関Ｂ遺跡	酒田市					■	■	■	■	■	■											山教委 1981・83 山埋調 47・68 集
78	北田遺跡	酒田市						■	■	■	■	■											山教委 1982 山埋調 53 集
79	泉谷地古窯跡群	酒田市			■	■	■	■															山教委 1991 山埋調 163 集

第51図　庄内地方の遺跡存続表(1)

No.	遺跡		8世紀				9世紀				10世紀				11世紀				12世紀				文献
			1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
80	願瀬山古窯跡群	酒田市				■	■	■															阿部明彦・高桑弘美 1999「山形県古代の土器編年」第 25 回城柵検討会資料
81	本川遺跡	酒田市							■														山教委 1988 山埋調 137 集
82	手蔵田 10 遺跡	酒田市							■	■	■												山教委 1988 山埋調 124 集
83	上ノ田遺跡	酒田市			■	★			■	★													山教委 1982 山埋調 52 集
84	中谷地遺跡	酒田市				■			★	■													山埋セ 1996 調 42 集
85	鷹尾山 A 経塚	酒田市																	┈	┈	┈	┈	小野忍 1977「酒田市大字北沢太平周辺の古代・中世遺跡」庄内考古学 14
86	蔵山遺跡	飛島					┈	┈	┈	┈													齊藤主税氏のご教示による
87	テキ穴洞窟	飛島					■	■	■	■													酒井・本間・川崎 1971『飛島洞窟発掘調査報告書』
88	山海窯跡群	平田町					■	■	■	■	■												山教委 1991・92・93 山埋調 170・172・183 集
89	山橘橘跡	平田町					■	┈	┈														山教委 1992 山埋調 172 集
90	桜林遺跡	平田町						■															山教委 1987 山埋調 110 集
91	桜林興野遺跡	平田町				★				★	■												山教委 1987 山埋調 115 集
92	早稲田遺跡	平田町																					山教委 1988 山埋調 126 集
93	西田遺跡	平田町			┈		■	■															山教委 1988 山埋調 126 集
94	山橘 5 遺跡	平田町			■	★																	山埋セ 1994 調 4 集
95	山橘 8 遺跡	平田町						■	■														山教委 1992 山埋調 172 集
96	田沢長根	平田町																		┈			佐藤禎宏 1980「最上川流域出土の珠洲陶器」庄内考古学 17
97	新山経塚	平田町																		┈			川崎利夫 1991「山形県の埋、納経遺跡」山形考古 4-4
98	経ヶ蔵山経塚	平田町																		┈			川崎利夫 1991「山形県の埋、納経遺跡」山形考古 4-4
99	狩川経塚	立川町																		┈			川崎利夫 1991「山形県の埋、納経遺跡」山形考古 4-4
100	千河原遺跡	余目町							■	★													山教委 1984 山埋調 80 集
101	下餅山遺跡	松山町							■	■													山教委 1986 山埋調 97 集
102	山寺経塚	松山町																			■	■	佐藤禎宏 1980「最上川流域出土の珠洲陶器」庄内考古学 17
103	石欠遺跡	藤島町					■	■	■	■													藤島町教委『石欠遺跡』1981
104	藤島城	藤島町						■	┈														山教委 1979・90・90・92・93 山埋調 25・159・160・181・193 集
105	平形 B 遺跡	藤島町							■	■	■	■											山教委 1980 山埋調 26 集
106	古郡 C 遺跡	藤島町					■	■	■														山教委 1974 山埋調 1 集
107	柳久瀬 A 遺跡	藤島町							■	┈	┈												山教委 1996 山埋調 197 集
108	三田遺跡	三川町					■	■													■	■	山教委 1980 山埋調 32 集
109	羽黒山頂経塚	羽黒町																	┈	┈	┈	┈	佐藤禎宏・小野忍・酒井英一 1979「羽黒山頂出土の中世陶器 (1)(2)」庄内考古学 16
110	羽黒山頂鏡が池	羽黒町																			■	■	羽黒町 1998『羽黒町史』
111	高寺遺跡	羽黒町																			┈	┈	佐藤禎宏 1980「最上川流域出土の珠洲陶器」庄内考古学 17
112	柳沢 A 遺跡	櫛引町																			┈	┈	山埋セ 1994 調 6 集
113	西谷地遺跡	鶴岡市			■	■	★	★	★		■	■	■										山埋セ 1994・95・96 調 12・26・33 集
114	中京田遺跡	鶴岡市				■	■	■	■														山教委 1980 山埋調 26 集
115	地ノ内遺跡	鶴岡市						■	■														山教委 1990 山埋調 148 集
116	大東遺跡	鶴岡市					■	■	■														山教委 1990 山埋調 153 集
117	月記遺跡	鶴岡市					■	■	■														山教委 1990 山埋調 153 集
118	大道下遺跡	鶴岡市					■	■															山教委 1990 山埋調 153 集　山埋セ 1997 調 49 集
119	後田遺跡	鶴岡市				■	★	■	■	■	■	■											山埋セ 1997 調 49 集
120	畑田遺跡	鶴岡市																					山埋セ 1995 調 22 集
121	山田遺跡	鶴岡市				★	■	■	★	■	■	■											山埋セ 2001 調 83 集
122	矢馳 A 遺跡	鶴岡市					■	■	■														山教委 1988 山埋調 127 集
123	塔の腰遺跡	鶴岡市					■	■	★	■													山埋セ 1997 調 50 集
124	漆原遺跡	鶴岡市																					山教委 1995 山埋調 195 集
125	荒沢須恵器窯跡	鶴岡市				■	■	┈															鶴岡市教委『荒沢窯跡・玉林坊遺跡分布調査報告書』1992
126	西ノ川遺跡	鶴岡市				■	★	■	■	■	■	■											山埋セ 1995 山埋調 26 集
127	五百刈遺跡	鶴岡市					■	■	■														山埋セ 1994 山埋調 10 集
128	鳥居上遺跡	鶴岡市																				■	鶴岡市教委 1998 鶴埋調 8 集
129	湯田川経塚	鶴岡市																					川崎利夫 1968「鶴岡市湯田川の経塚について」庄内考古学 8
130	七日台墳墓群	鶴岡市																			■	■	佐藤禎宏 1980「最上川流域出土の珠洲陶器」庄内考古学 17
131	城山経塚	鶴岡市																					川崎利夫 1991「山形県の埋、納経遺跡」山形考古 4-4
132	井岡遺跡	鶴岡市																					川崎利夫 1976「山形県における古代・中世の火葬墓について」『東北考古学諸問題』
133	水沢城の下	鶴岡市																					川崎利夫 1976「山形県における古代・中世の火葬墓について」『東北考古学諸問題』
134	水沢経塚	鶴岡市																				┈	川崎利夫 1991「山形県の埋、納経遺跡」山形考古 4-4
135	西目遺跡	鶴岡市																				■	佐藤禎宏 1980「最上川流域出土の珠洲陶器」庄内考古学 17
136	神社口遺跡	鶴岡市																				┈	酒井英一 1977「鶴岡市大字西目字神社口の中世陶器」山形考古学 3-1
137	田川蓮花寺遺跡	鶴岡市																				┈	佐藤禎宏 1980「最上川流域出土の珠洲陶器」庄内考古学 17
138	大谷火葬墓遺跡	鶴岡市																				┈	川崎利夫 1976「山形県における古代・中世の火葬墓について」『東北考古学諸問題』
139	木谷地沢火葬墓遺跡	鶴岡市																				┈	川崎利夫 1976「山形県における古代・中世の火葬墓について」『東北考古学諸問題』

（凡例）

① 文献の省略は次に依った。

・山形県教育委員会『書名』1987 山形県埋蔵文化財調査報告書第 115 集

→ 山教委 1987『書名』山埋調 115 集

・山形県埋蔵文化財センター 1994『書名』山形県埋蔵文化財調査報告書第 4 集

→ 山埋セ 1994『書名』調 4 集

・『書名』は表中の各遺跡名称を含んでいる。

② ■は遺物の多い時期を表している。

☆は特に目立つ遺物の存在している時期を表している。

┈は遺物の目立たない時期を表している。

第52図　庄内地方の遺跡存続表(2)

向が緩慢であった遊佐地域でもこの傾向は強まってくる。本楯地域ではさらに遺跡が減少し、城輪柵跡や八森遺跡といった国府関連の遺跡でしか存在し得なくなる。上田地区と平田地区の北半部でもこの傾向は著しい。須恵器生産はこの時期には廃絶する。

川南では基本的な主要遺跡は存続している。大山川流域、鶴岡地域、藤島川流域にかすかに分布の集中域を認めるようになる。鶴岡地域では基本的には前代の様相を引き継ぐ。

この時期でも遊佐地域と吹浦地域、北目地域には前代と同様に遺跡が展開している。本楯地域では減少する。

10世紀第３･４四半期

･10世紀第３･４四半期（第５図、第50図）

前代に遺跡の分布減少傾向が緩慢であった遊佐地域でも､この時期に廃絶する遺跡が多くなってくる。本楯地域、上田地区と平田地区の北半部では、遊佐地域よりも若干早くこの傾向が始まる。川南では遺跡の分布はほとんど知ることができなくなる。この時期では、遺跡の分布は遊佐地域と吹浦地域･北目地域、本楯地域･平田地域のみで分布を見ることになる。鶴岡地域では遺跡の分布を知ることができなくなる。

こうした、遺跡群の分布の展開と終焉の実態から、古代庄内地方の様相についていくつかの画期を設定することができる(第53図)。

古代Ⅰ期

･古代Ⅰ期

８世紀の第３四半期から８世紀第４四半期を古代１期とした。この時期は庄内地方の古代遺跡の黎明期である。須恵器生産が開始し、集落が伸展し始める。国府域である本楯地区には、この時期の遺跡の展開を窺うことはできない。このため、出羽国建国にあたっての開発は、それ以前から在地に流域を中心として勢力を保持していた、在地富豪層にその中心があるとみておきたい。こうした者達が郡司クラスを構成するのであろう。

古代Ⅱ期

･古代Ⅱ期

９世紀の第１四半期～第３四半期までを古代Ⅱ期とした。この時期は庄内地方の古代遺跡の最盛期である。国府が成立し周辺開発が大規模に展開する。北目地域、本楯地域、手蔵田地域には遺跡の集中が見られる。須恵器生産も盛期を迎える。この時期には在地の開発も活発化する。また開発に関係して中央の勢力がさまざまな形で影響力を持ってくる。

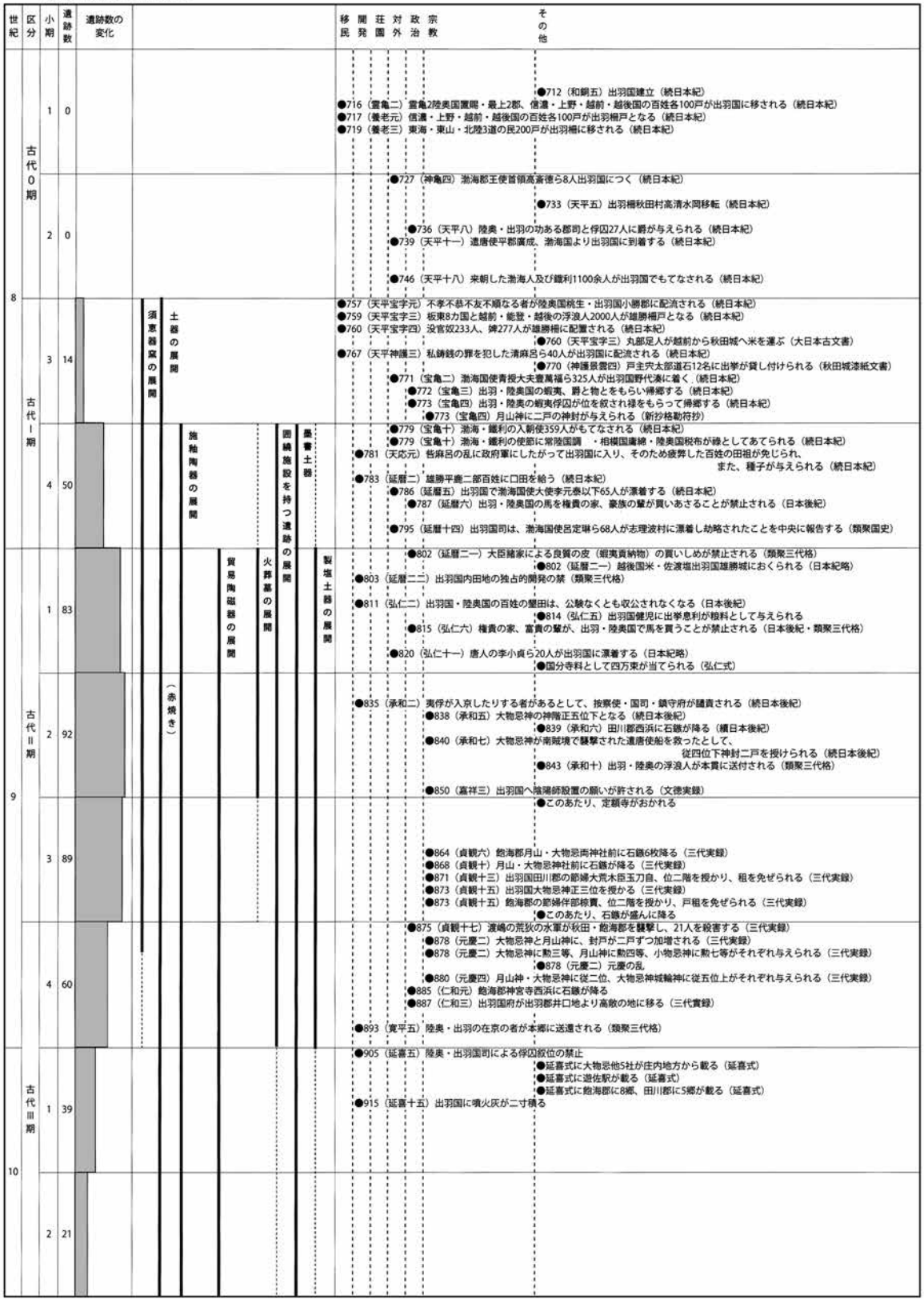
古代Ⅲ期

･古代III期

９世紀後半第４四半期～10世紀第２四半期までを古代Ⅲ期とした。この時期は、遺跡の展開が終息し、衰退へと向かう時期である。この期の最初には元慶の乱(878)が起こり、延喜十五年(915)には降灰があり、災害が見られる。遺跡は少なくなる。特徴的な様相としては、宗教関係の記述が前代、９世紀第３四半期から含めて増加することである。これらは大物忌神社に関係する事柄が多数を占めるため、飛島、吹浦大物忌神社のラインが成立するのもこの時期と考えられよう。

小平２遺跡、小平３遺跡が営まれる主要時期としては、９世紀前半から半ばであろうから、本楯地区に国府関連の遺跡が展開する時期となる。また、この時期は古代Ⅱ期となり、国府が小平２遺跡、小平３遺跡の北西指呼の間に成立している。国府周辺の開発がもっとも集中的に行われた時期である。おそらく、小平２遺跡、小平３遺跡もこうした国府周辺の開発のうねりの中で営まれたものであろう。また、古代３期に入ると、小平２遺跡、小平３遺跡ともども遺

遺跡の消長と関連事項



第53図　８世紀～10世紀の庄内地方の様相

物は一部を除いて見られなくなり、遺跡として営まれなくなってしまうこともわかる。これまた国府域の開発の終焉と軌を一にしているのである。

小平２・３遺跡には掘立柱建物跡や竪穴住居跡などの遺構はまったく検出されていない。今回の調査区の外にこうした居住域があると見ておくこともできるが、土坑からは一括して遺物が出土するなどの様相からすれば、土器の生産にかかわる遺跡であるとか、特殊な場所であるなどという祭祀行為としても、遺跡の性格を考慮する余地があるかもしれない。こうしたことについては後考を期したい。

発掘調査の成果

発掘調査の成果

・今回の調査は中山間活性化ふれあい支援農道整備事業（飽海中央地区）に係る緊急発掘調査である。調査面積は小平２遺跡が1,650㎡、小平３遺跡が1,630㎡の計3,280㎡となる。

・小平２遺跡で検出された遺構の内、ＳＫ２、３、５、７は、平安時代に生活什器として使用された甕、堝、坏などの器類を焼成した焼壁土壙の可能性があるため、その年代を測定した。その結果西暦775年～850年、西暦1025年～1075年の年代範囲に入る可能性が高いことが分かった（巻末付編参照）。

・小平２遺跡出土土器の中で、表面が赤く塗られた土器が見受けられたため、分析したところ、ベンガラであることが分かった（巻末付編参照）。

・小平２遺跡からは、奈良・平安の時期の遺構が検出された。遺物もまたこれらの時代に含まれている。一部に、旧石器時代、縄文時代、近現代の遺物も検出されてはいる。奈良・平安時代の遺物の多くは、遺構に伴って出土している。

・小平３遺跡からは、奈良・平安を中心とする時期の遺構が検出された。一部に、縄文時代、近現代の遺物も検出されてはいるが、近現代の時代に対応するような遺構の検出はできなかった。遺物は、縄文時代、奈良・平安時代が中心となる。

・最初に小平２遺跡、小平３遺跡に人々の活動の痕跡が窺われるのは、旧石器時代である。小平２遺跡から出土したナイフ型石器は、後期旧石器時代のものであると考えられる。

・次に活動の痕跡が窺われるのは縄文時代の初めのことである。小平２遺跡から縄文時代早期の中頃の貝殻沈線文を持つ土器が出土している。

・次に活動の痕跡が窺われるのは今から約6000年ほど前のことである。小平３遺跡から縄文時代前期初頭の土器が出土している。

・次に活動の痕跡が窺われるのは今から約4500年ほど前のことである。小平３遺跡からややまとまって、縄文時代中期中頃の土器が出土している。個体数も多いことから、やや長い時間ここに居住していた可能性がある。

・小平２遺跡、小平３遺跡の中心的な時期は奈良・平安時代であることがわかった。遺構間の接合は存在したが、遺跡間の接合は存在しなかったため、小平２遺跡と小平３遺跡は同時期存在であったのかどうかは不明なものの、遺跡から出土した奈良・平安時代の遺物はよく似ているために、同一の遺跡であった可能性が高い。遺物の年代観は、９世紀の前半から半ばにかけての時期であり、９世紀第１～３四半期ころに中心があると見ておきたい。

写真図版

小平２・３遺跡　空中写真（南より）

小平２遺跡　空中写真（南より）

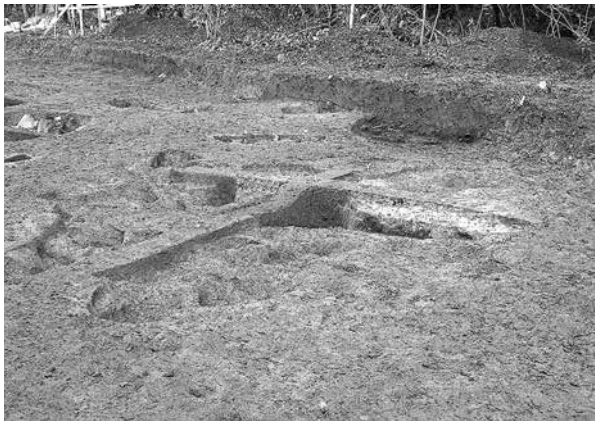
小平２遺跡　空中写真（真上）

小平２・３遺跡　完掘状況（北より）

小平２・３遺跡　完掘状況（南より）

小平２遺跡　面整理状況（↑S）

小平２遺跡　調査状況（↑NW）



小平２遺跡　調査状況（↑SW）

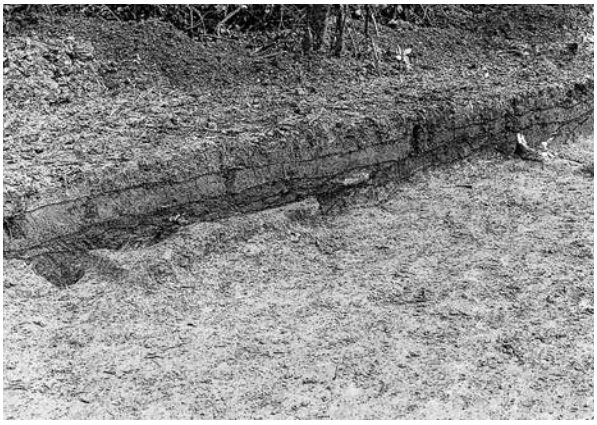
小平２遺跡　調査状況（↑SW）

小平２遺跡　調査状況（↑SW）

小平２遺跡　遺構検出状況（↑N）

小平２遺跡　北端域東壁基本層序（↑W）

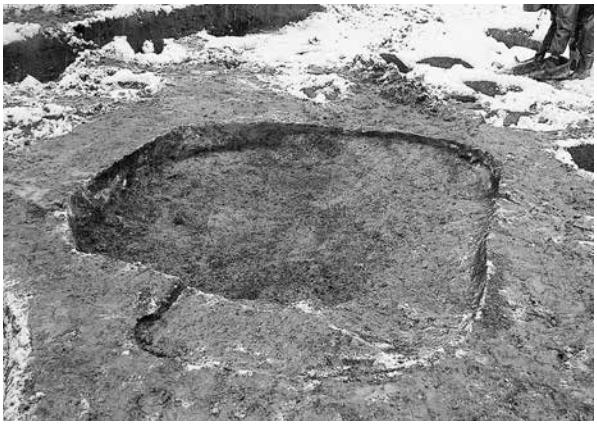
小平２遺跡　SK1遺構検出状況（↑W）



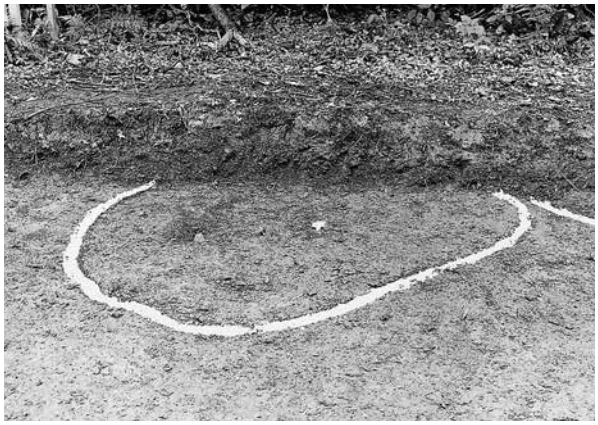
小平２遺跡　北端部東壁基本層序（↑W）

小平２遺跡　SK2・3遺構検出状況（↑W）

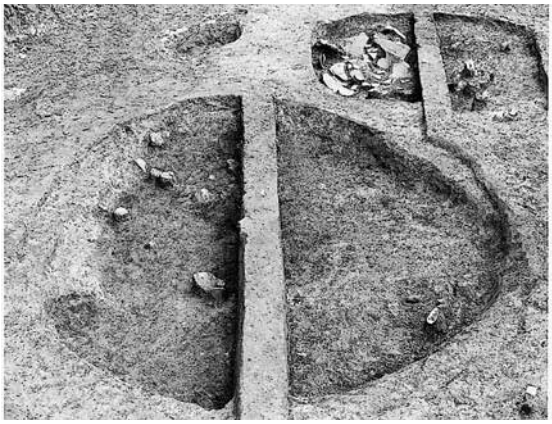
小平２遺跡　SK1遺物出土状況（↑W）



小平２遺跡　SK2完掘状況（↑NW）



小平２遺跡　SK4遺構検出状況（↑W）



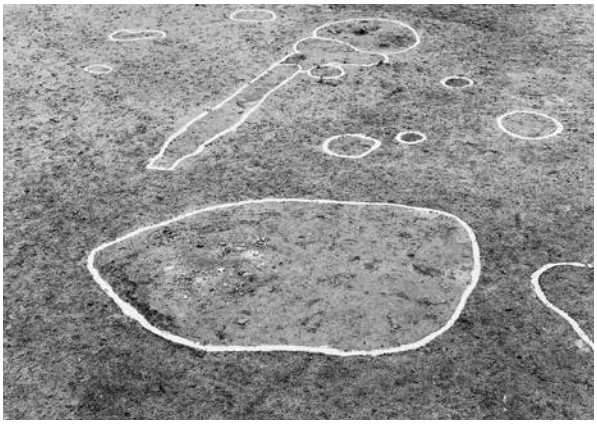
小平２遺跡　SK3遺物出土状況（↑NW）

小平２遺跡　SK5遺構検出状況（↑W）

小平２遺跡　SK2･3付近遺構検出状況

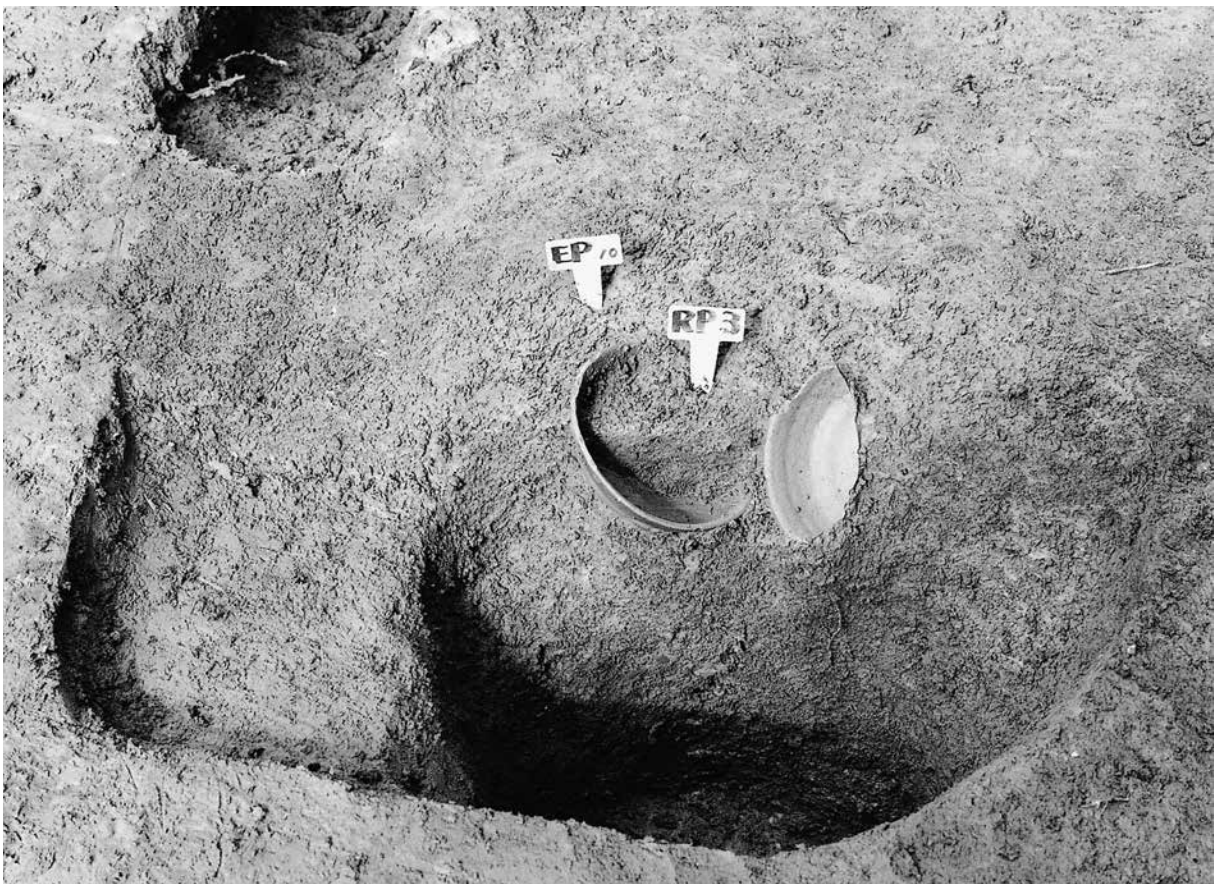
小平２遺跡　SK6遺構検出状況（↑W）

小平２遺跡　遺構集中地点検出状況



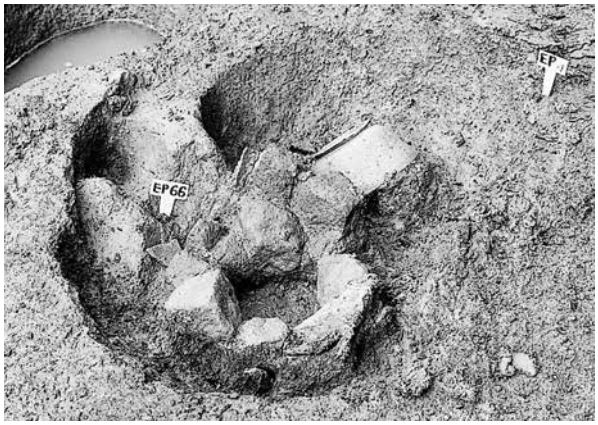
小平２遺跡　SK7遺構検出状況（↑S）

小平２遺跡　遺構集中地点検出状況

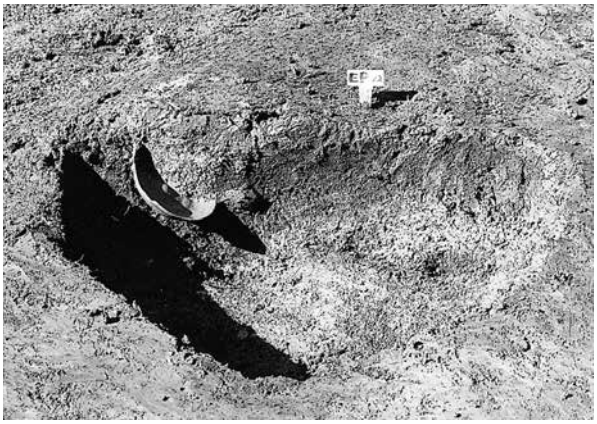


小平２遺跡　SP10遺物出土状況（↑S）

小平２遺跡　SP19遺物出土状況（↑SW）



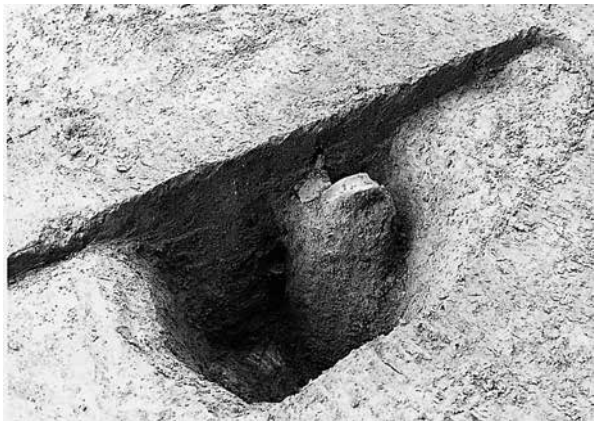
小平２遺跡　EP66遺物出土状況（↑SW）



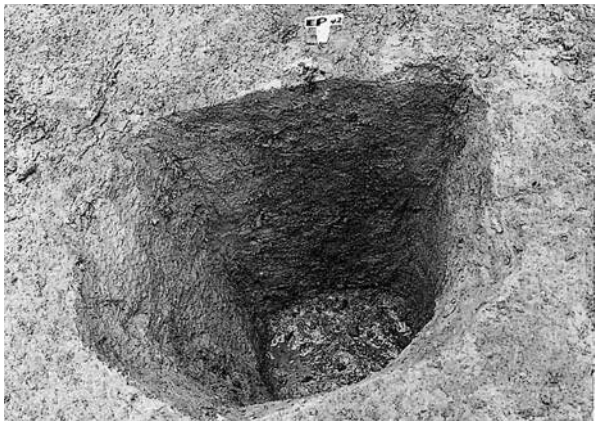
小平２遺跡　SP12遺物出土状況（↑SE）

小平２遺跡　SD17遺物出土状況（↑SW）

小平２遺跡　EP38遺物出土状況（↑S）

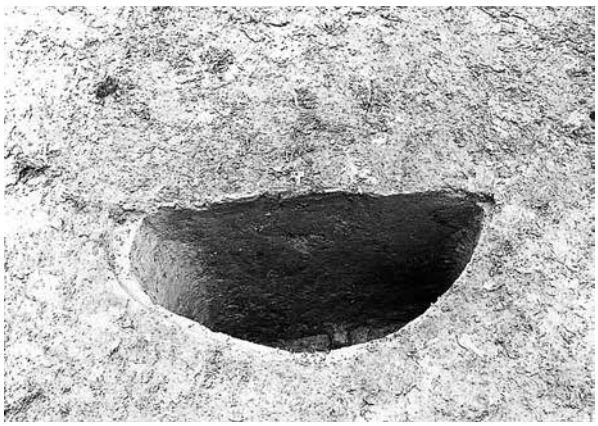


小平２遺跡　SK37遺物出土状況（↑SE）



小平２遺跡　EP42完掘状況（↑W）

小平２遺跡　EP26遺物出土状況（↑W）

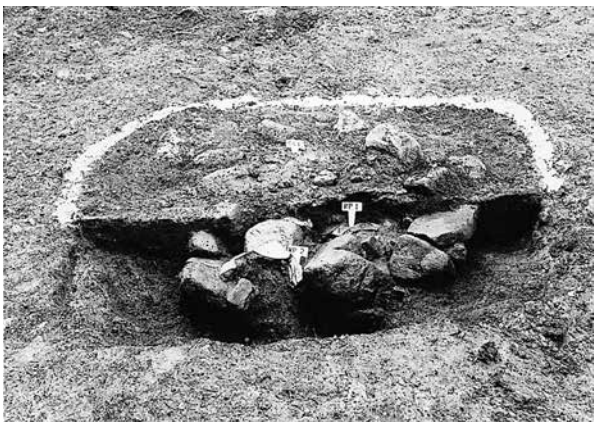


小平２遺跡　SK30調査状況（↑SW）

小平３遺跡　遺構検出状況（↑N）

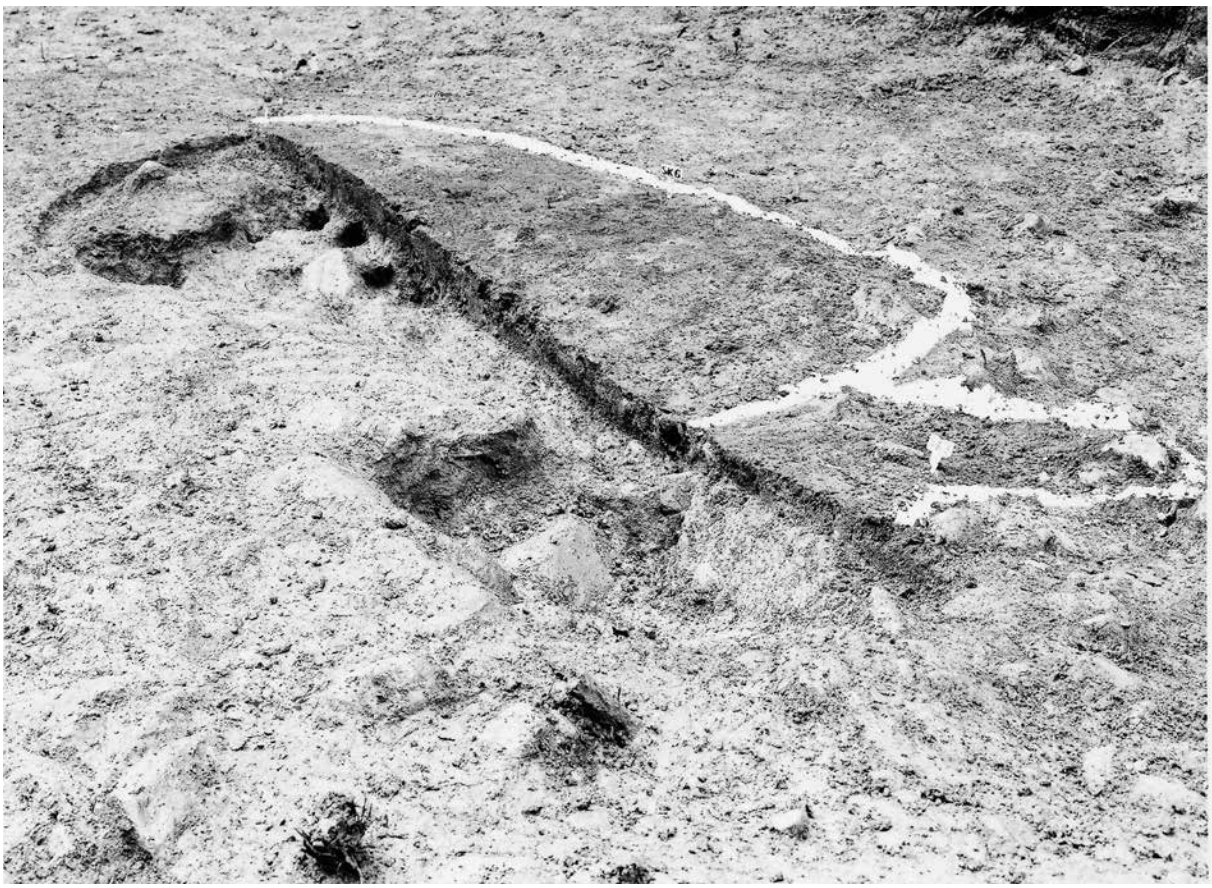
小平３遺跡　SK11検出状況（↑W）

小平３遺跡　SK11遺物出土状況（↑SW）



小平３遺跡　SK11調査状況（↑SW）

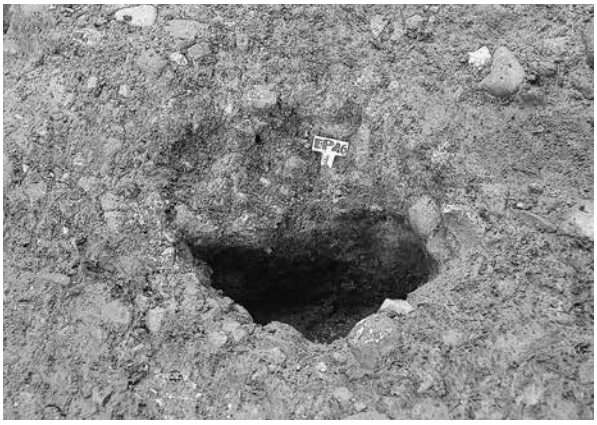
小平３遺跡　SK4調査状況（↑S）



小平３遺跡　SK6･7遺構検出状況（↑W）

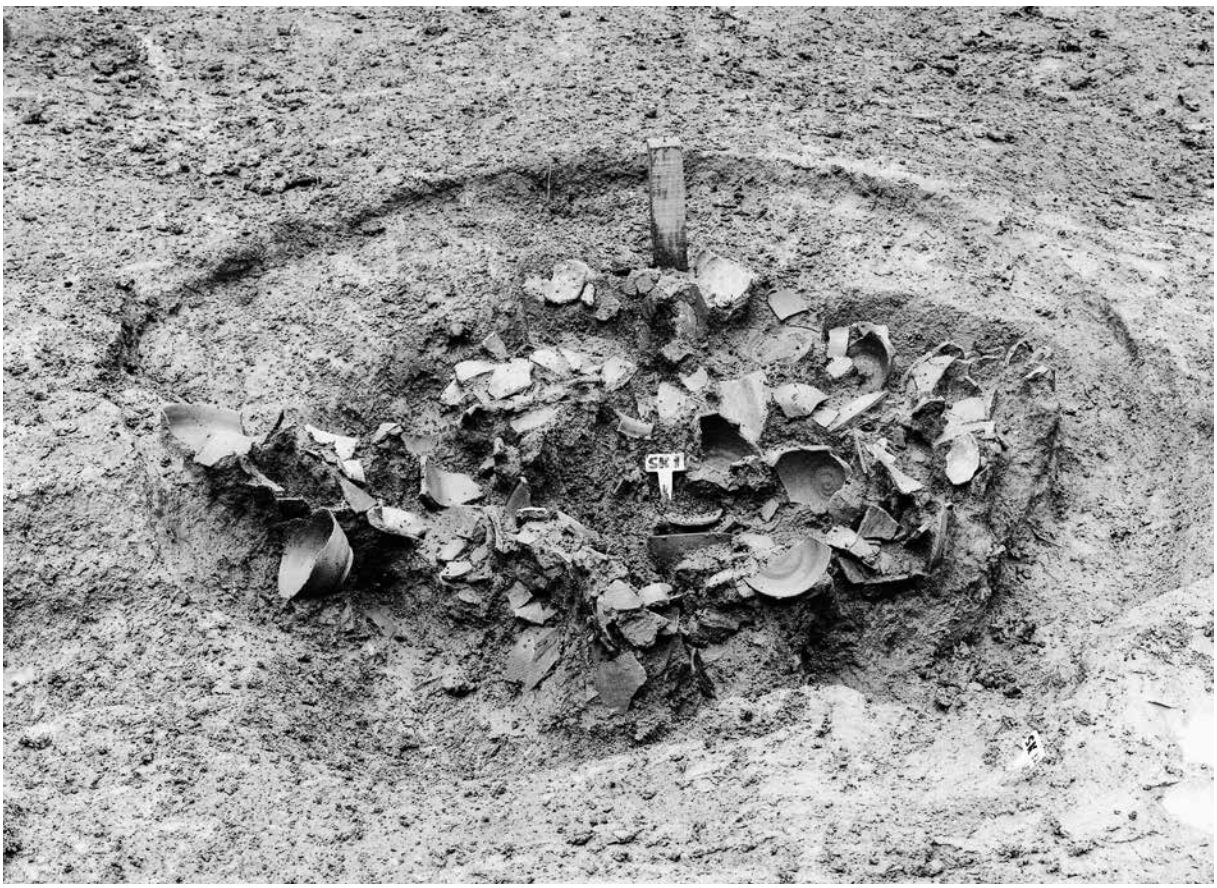
小平３遺跡　SP17調査状況（↑S）

小平３遺跡　SP8調査状況（↑S）



小平３遺跡　SP46調査状況（↑S）

小平３遺跡　SP3調査状況（↑S）



小平２遺跡　SK1遺物出土状況（↑S）

小平２遺跡　SK1出土遺物

小平２遺跡　SK1出土遺物　SK7遺構出土土器と接合(50)

小平２遺跡　SK1出土遺物(45)

小平２遺跡　SK1出土遺物(44)

小平２遺跡　SK1出土遺物(57)

小平２遺跡　SK1出土遺物(35)

小平２遺跡　SK1出土遺物(34)

小平２遺跡　SK1出土遺物(33)

小平２遺跡　SK1出土遺物(36)

小平２遺跡　SK1出土遺物(3)

小平２遺跡　SK1出土遺物(7)

小平２遺跡　SK1出土遺物(8)

小平２遺跡　SK1出土遺物(11)

小平２遺跡　SK1出土遺物(9･13･14)

小平２遺跡　SK1出土遺物(9･13･14)

小平２遺跡　SK1出土遺物(21)

小平２遺跡　SK1出土遺物(30)

小平２遺跡　SK1出土遺物(25)

小平２遺跡　SK1出土遺物(24)

小平２遺跡　SK1出土遺物(28)

小平２遺跡　SK1出土遺物(26)

小平２遺跡　SK1出土遺物(27)

小平２遺跡　SK1出土遺物(29)

小平２遺跡　SK1出土遺物(17)

小平２遺跡　SK1出土遺物(19)

小平２遺跡　SK2遺物出土状況（↑W）

小平２遺跡　SK2出土遺物

小平２遺跡　SK2出土遺物(64)

小平２遺跡　SK2出土遺物(66)

小平２遺跡　SK2出土遺物(63)

小平２遺跡　SK2出土遺物(65)

小平２遺跡　SK2出土遺物

小平２遺跡　SK2出土遺物

小平２遺跡　SK2出土遺物(68)

小平２遺跡　SK2出土遺物(67)

小平２遺跡　SK2出土遺物(61)

小平２遺跡　SK2出土遺物(70)

小平２遺跡　SK2出土遺物(71)

小平２遺跡　SK2出土遺物(69)

小平２遺跡　SK2出土遺物

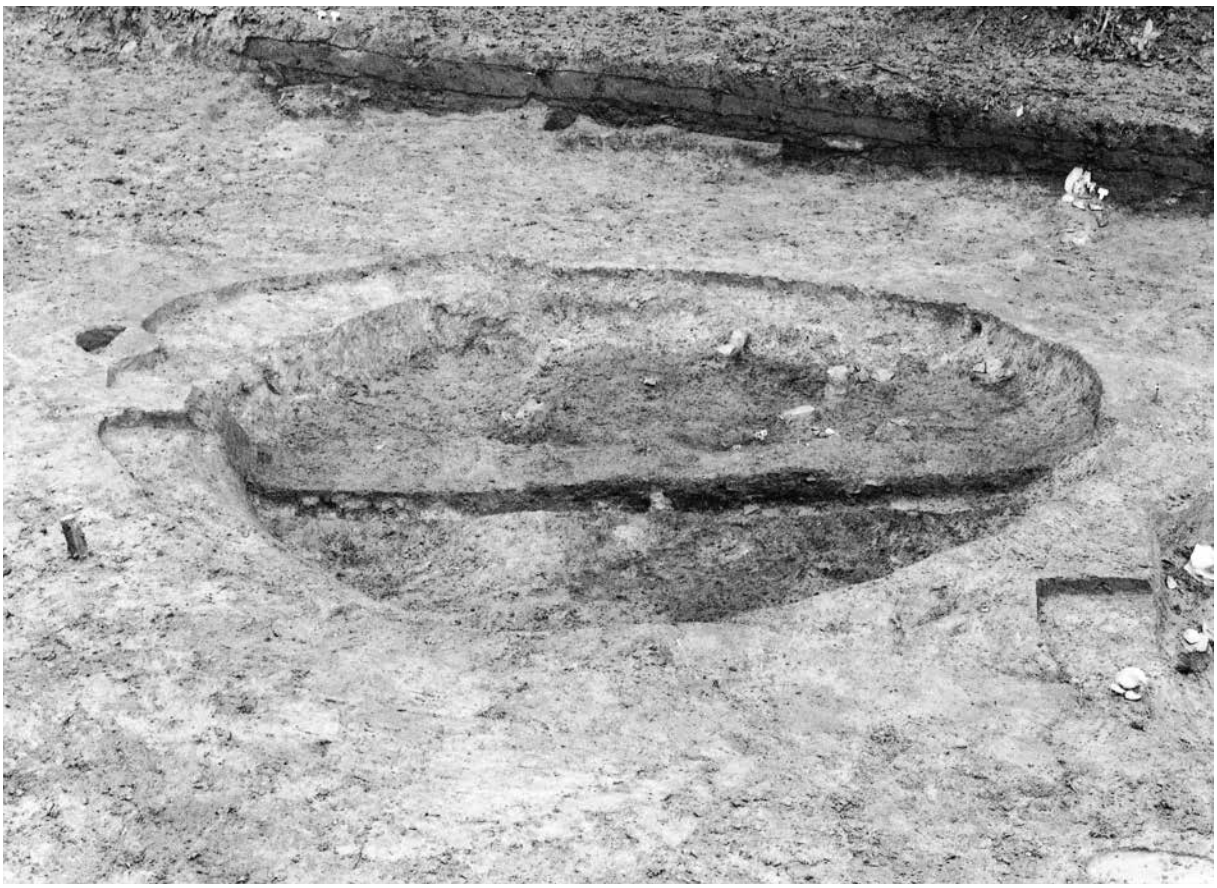
小平２遺跡　SK2出土遺物(58)

小平２遺跡　SK2出土遺物(60)

小平２遺跡　SK2出土遺物(73)

小平２遺跡　SK2出土遺物(59)

小平２遺跡　SK2出土遺物(62)



小平２遺跡　SK3遺物出土状況（↑SW）

小平２遺跡　SK3出土遺物

小平２遺跡　SK3出土遺物（92）

小平２遺跡　SK3出土遺物

小平２遺跡　SK3出土遺物

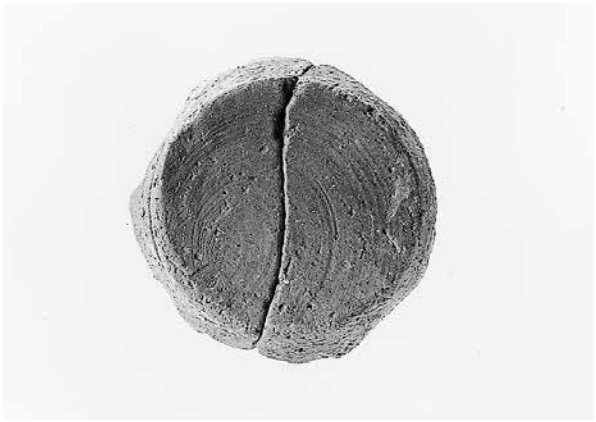
小平２遺跡　SK3出土遺物（94）

小平２遺跡　SK3出土遺物

小平２遺跡　SK3出土遺物（79）

小平２遺跡　SK3出土遺物（72）

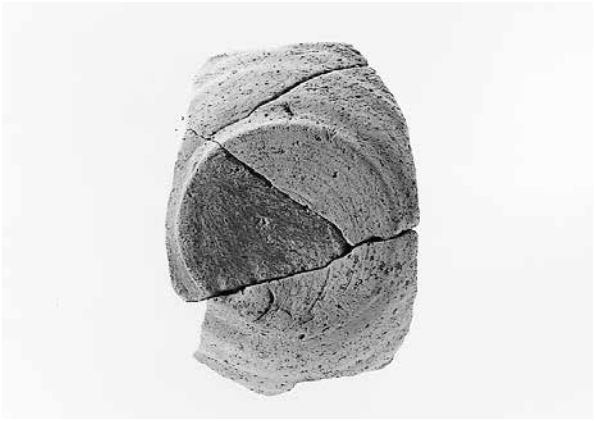
小平２遺跡　SK3出土遺物（75）



小平２遺跡　SK3出土遺物

小平２遺跡　SK3出土遺物(89)

小平２遺跡　SK3出土遺物(82)

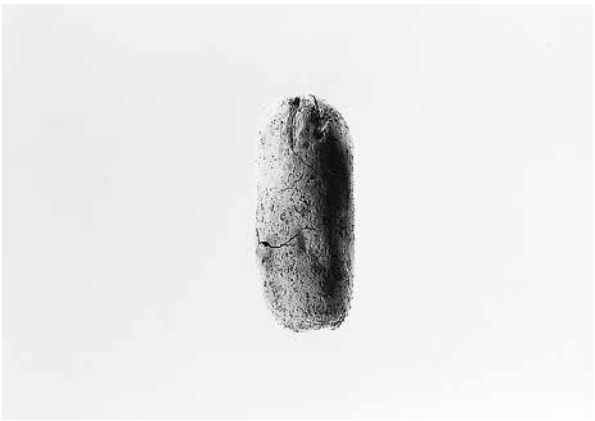


小平２遺跡　SK3出土遺物(86)

小平２遺跡　SK3出土遺物(81)

小平２遺跡　SK3出土遺物(80)

小平２遺跡　SK3出土遺物(84)

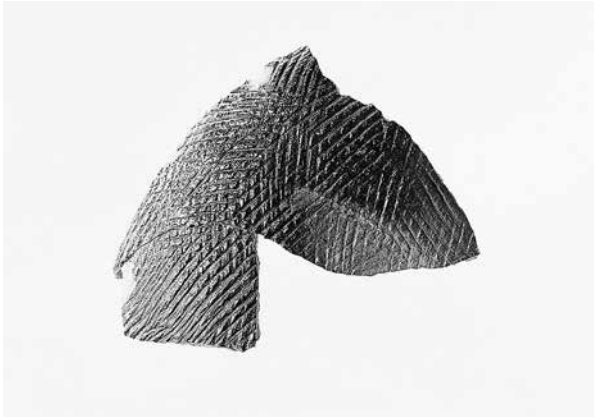


小平２遺跡　SK3出土遺物(95)

小平２遺跡　SK4出土遺物

小平２遺跡　SK4遺物出土状況（↑W）

小平２遺跡　SK4出土遺物（101）



小平２遺跡　SK4出土遺物（99）

小平２遺跡　SK4出土遺物（100）

小平２遺跡　SK5出土遺物

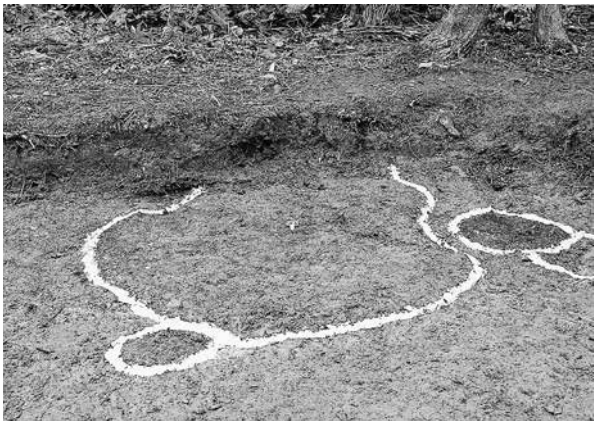
小平２遺跡　SK5遺物出土状況（↑W）

小平２遺跡　SK5出土遺物（103）

小平２遺跡　SK5出土遺物（105）

小平２遺跡　SK5出土遺物（102）

小平２遺跡　SK6出土遺物（107）



小平２遺跡　SK6検出状況（↑W）

小平２遺跡　SK7出土遺物（137）

小平２遺跡　SK7出土遺物（132）

小平２遺跡　SK7出土遺物（136）

小平２遺跡　SK7遺物出土状況（↑W）

小平２遺跡　SK7出土遺物

小平２遺跡　SK7出土遺物（135）

小平２遺跡　SK7出土遺物（141）

小平２遺跡　SK7出土遺物（134）

小平２遺跡　SK7出土遺物（128）

小平２遺跡　SK7出土遺物（133）

小平２遺跡　SK7出土遺物（121）

小平２遺跡　SK7出土遺物（140）

小平２遺跡　SK7出土遺物（112）

小平２遺跡　SK7出土遺物（118）

小平２遺跡　SK7出土遺物（126）

小平２遺跡　SK7出土遺物（109）

小平２遺跡　SK7出土遺物（114）

小平２遺跡　SK7出土遺物（110）

小平２遺跡　SK7出土遺物（119）

小平２遺跡　SK7出土遺物（123）

小平２遺跡　SK7出土遺物（111）

小平２遺跡　D-2出土遺物(165)

小平２遺跡　SP12出土遺物(143)

小平２遺跡　SP10出土遺物(144)

小平２遺跡　SP10出土遺物(146)

小平２遺跡　SP19出土遺物(145)

小平２遺跡　D-10出土遺物(153)

小平２遺跡　E-20出土遺物(155)

小平２遺跡　E-17出土遺物(151)

小平２遺跡　C-3出土遺物(159)

小平２遺跡　SD17出土遺物(149)

小平２遺跡　包含層出土遺物

小平２遺跡　SP38出土遺物(147)

小平２遺跡　E-18出土遺物(160)

小平２遺跡　E-18出土遺物(161)

小平２遺跡　C-6出土遺物(168)

小平２遺跡　C-3出土遺物(167)

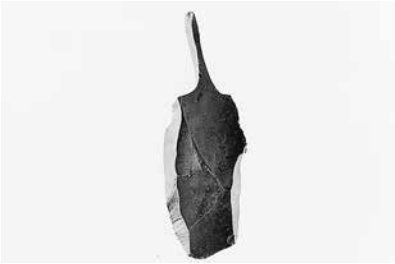
小平２遺跡　E-18出土遺物(外側)(169)

小平２遺跡　E-18出土遺物(内側)(169)

小平２遺跡　F-2出土遺物（表）（173）

小平２遺跡　F-2出土遺物（裏）（173）

小平２遺跡　E-11出土遺物（表）（175）



小平２遺跡　F-2出土遺物（表）（174）

小平２遺跡　F-2出土遺物（裏）（174）

小平２遺跡　E-11出土遺物（裏）（175）

小平２遺跡　SK11出土遺物（177）

小平２遺跡　D-8出土遺物（176）

小平２遺跡　F-8出土遺物（178）

小平２遺跡　D-8出土遺物（181）

小平２遺跡　E-8出土遺物（180）

小平２遺跡　D-12出土遺物（182）

小平２遺跡　C-3出土遺物（167）

小平２遺跡　D-8出土遺物（179）

小平２遺跡　D-8出土遺物（170）

小平２遺跡　F-7出土遺物（内側）（171）

小平２遺跡　F-7出土遺物（外側）（171）

小平２遺跡　F-7出土遺物（172）

小平３遺跡　SK11断面（↑SW）

小平３遺跡　SK11遺物出土状況（↑SW）

小平３遺跡　SK11出土遺物（183）

小平３遺跡　SK11出土遺物（185）

小平３遺跡　SK11出土遺物（184）

小平３遺跡　G-35出土遺物（表）（222）

小平３遺跡　G-35出土遺物（表）（222）

小平３遺跡　J-37出土遺物（220）

小平３遺跡　J-41出土遺物（221）

小平３遺跡　K-45出土遺物（216）

小平３遺跡　K-44出土遺物（218）

小平３遺跡　K-45出土遺物（217）

小平３遺跡　J-37出土遺物（212）

小平３遺跡　J-37出土遺物（211）

小平３遺跡　J-35出土遺物（213）

小平３遺跡　J-33出土遺物（219）

小平３遺跡　I-38出土遺物（206）

小平３遺跡　J-37出土遺物（191）

小平３遺跡　L-43出土遺物（192）

小平３遺跡　J-39出土遺物（186）

小平３遺跡　L-42出土遺物（204）

小平３遺跡　包含層出土遺物

小平３遺跡　J-37出土遺物（209）

付　　編

小平２遺跡・小平３遺跡の自然科学分析

目　　次

はじめに ····· 2
Ⅰ　放射性炭素年代測定 ····· 2
　　１　試料 ····· 2
　　２　分析方法 ····· 2
　　３　結果 ····· 2
　　４　考察 ····· 3
Ⅱ　小平２・３遺跡の焼土の考古地磁気年代 ····· 3
　　１　はじめに ····· 3
　　２　試料採取と磁化測定 ····· 4
　　３　磁化測定結果および考察 ····· 4
　　（１）　交流消磁前・後の残留磁化 ····· 4
　　（２）　残留磁化の信頼性 ····· 5
　　（３）　考古地磁気年代決定 ····· 5
引用文献 ····· 6

図表一覧

表１　放射性炭素年代測定結果 ····· 2　　表２　残留磁化、帯磁率測定結果のまとめ ····· 7
図１　パイロット試料（試料20、40、60、80）の段階交流消磁結果 ····· 9
図２　交流消磁前の全試料の残留磁化方向 ····· 10
図３　3mTの交流消磁後の全試料の残留磁化方向 ····· 11
図４　図３（消磁後）で網かけ円に含まれる試料に関する、各土坑ごとの地理的補正を施した平均方向と、近畿地方における考古地磁気標準曲線（Maenaka、1990）との比較 ····· 12
図５　前試料の磁気的性質（帯磁率と残留磁化強度の関係） ····· 12
図６　図３（消磁後）で網かけ円に含まれ、かつ消磁後残留磁化強度が$1.0\times10^{-4}Am^2/kg$以上の試料（43試料）の平均方向と、近畿地方における考古地磁気標準曲線（Maenaka、1990）との比較 ····· 13
図７　資料採集位置図 ····· 14

小平２遺跡･小平３遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

小平２遺跡・小平３遺跡は、山形県飽海郡八幡町の山間地に位置する。本遺跡では、発掘調査により平安時代の焼壁土坑・土坑・溝跡・埋没谷・柱穴などの遺構が検出され、須恵器・赤焼土器（甕・杯・塝・蓋など）・土錘・砥石などが出土している。とくに、焼壁土坑と呼ばれる平安時代の赤焼土器を焼成した土坑からは廃棄されたと思われる土器が大量に検出され、また土坑底部には焼成に伴って形成したと考えられる焼土が認められた。

今回の分析調査では、小平２遺跡で検出された焼壁土坑などの遺構の年代資料を得るために、出土した炭化材の放射性炭素年代測定と、焼壁土坑で採取した焼土の古地磁気年代測定を実施する。なお、古地磁気年代測定は、姫路工業大学大学院理学研究科の森永速男先生にお願いし、署名原稿として掲載する。

Ⅰ　放射性炭素年代測定

１　試　料

試料は、検出された土坑SK1・SK2・SK3・SK5・SK7から各１点採取された炭化材、計５点である。この中で、SK1は廃棄土坑、その他の土坑は焼壁土坑である。

２　分析方法

測定は、SK7出土炭化材については試料が少量であるため加速器質量分析法（AMS法）、その他はβ線計数法で行う。測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。なお、$\delta^{13}C$の値は質量分析器、または加速器を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、標準試料PDB（白亜紀のベレムナイト類の化石）の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差（‰；パーミル）で表したものである。今回の試料の補正年代は、この値に基づいて補正をした年代である。

３　結　果

結果を表１に示す。試料の測定年代値は、SK1出土炭化材が1310BP（補正年代1320BP）、SK2出土炭化材が2000BP、SK3出土炭化材が1660BP（補正年代1650BP）、SK5出土炭化材

表１　放射性炭素年代測定結果

遺構	質（種類）	方法	測定年代	$\delta^{13}C$	補正年代	Code No.
SK1　F1	炭化材(ブナ属)	β線	1310±90BP	-24.1‰	1320±90BP	IAA-285
SK2	炭化材(クリ)	β線	2000±100BP	-24.9‰	2000±100BP	IAA-286
SK3　F3	炭化材(サクラ属)	β線	1660±110BP	-25.6‰	1650±110BP	IAA-287
SK5	炭化材(クリ)	β線	1760±100BP	-25.3‰	1760±100BP	IAA-288
SK7	炭化材(カエデ属)	AMS	1130±60BP	-22.33±1.34‰	1170±60BP	IAAA-30094

1）年代測定は、β線計数法（β線）と加速器質量分析法（AMS法）による。
2）測定年代は、1950年を基点とした年数で、補正年代は$\delta^{13}C$の値を基に同位体効果による測定誤差を補正した値。
3）放射性炭素の半減期は、5570年を使用した。

が1760BP、SK7出土炭化材が1130BP（補正年代1170BP）を示す。なお、測定試料の炭化材については、実体鏡による木材組織の観察で樹種同定を行った。その結果、いずれも落葉広葉樹で、４種類（ブナ属・クリ・サクラ属・カエデ属）に同定された。

４　考　察

各土坑から出土した炭化材の年代測定値は、1130BP（補正年代1170BP）～2000BP（補正年代2000BP）であった。このうち、SK3とSK5は比較的近接した値が得られたが、他は200～300年の年代差がある。

各年代値の補正年代を用いて、INTCAL98（Stuiver，M. *et al,* 1998）による暦年較正を行った。その結果、SK2が１世紀初頭を中心に紀元前２世紀中頃～２世紀初頭頃、SK3とSK5が３世紀中頃～５世紀初頭頃、SK1が７世紀後半、SK7が９世紀後半を中心に８世紀後半～10世紀中頃に相当する年代が得られた。各土坑は、発掘調査所見から古代と考えられているが、SK7を除く土坑の年代は古代よりも古い年代を示し、調査所見とは一致しない。年代測定値と共伴遺物から見た推定年代が異なっている背景には、古材の再利用、樹齢の問題、古い木炭の混入等による可能性が考えられる。今回の調査では各土坑から各１点について年代測定を行った結果であるため、今後、同一遺構内で複数試料について年代測定を行うことが望まれる。その上で、測定値の分布状況を把握し、遺構の年代や古い年代が得られた背景についてさらに検討したい。

Ⅱ　小平２遺跡・小平３遺跡の焼土の考古地磁気年代

姫路工業大学大学院理学研究科　　森永　速男

１　はじめに

土壌中に含まれる磁性鉱物（酸化鉄や水酸化鉄）は堆積時の地球磁場情報（強度と方向）を記録する。この磁化（磁場の化石）を堆積残留磁化と呼ぶ。さらに、堆積後に、土壌が何らかの過程（例えば、古代人の焚き火など）で熱を受けると、土壌中の磁性鉱物は化学的に変化したり（主に水酸化物から酸化物に）、加えて熱的な残留磁化を獲得する。そういった過程を経て、土壌は堆積時よりもかなり大きな強度の残留磁化（熱残留磁化）を示すようになる（Morinaga他、1999）。同時に、その残留磁化方向は、堆積時よりもさらに正確に、受熱時の地球磁場方向と平行になることが知られている。

土壌が被熱を経て地球磁場の正確な記録を持つことを利用して、過去の地球磁場方向や強度の変化を復元する研究（考古地磁気学）が行われてきた。その成果として、過去2,000年間の地球磁場方向変化のほぼ連続した標準曲線が作成されている（Hirooka、1971、1983；Maenaka、1990）。この曲線と年代のわからない焼土の残留磁化方向を比較することによって、焼土の年代を決定できる。この方法を考古地磁気年代決定法と呼ぶ。この方法を利用するときの注意点は、標準曲線の年代軸が考古学側から与えられたもの（土器編年など）であるということである。よって、土器編年などの修正が行われることがあれば、考古地

磁気年代も修正されなければならない。

また、上記の考古地磁気標準曲線は近畿地方の考古遺物を用いて復元されている。地球磁場の永年変化には地域性があるので、山形県の考古遺物に関してこの年代決定を行う際には、地理的な違いを考慮する必要がある。現在の近畿地方（京都府）と山形県の地球磁場方向はそれぞれ、偏角 = -7.1 °、伏角 = 48.7 °（京都府）、偏角 = -7.9 °、伏角 = 52.0 °（山形県）となる。ここでは、現在の山形県と京都府の差、偏角 = -0.8 °、伏角 = 3.3 °が古代にも成り立つと仮定し、測定で得られる平均方向を京都府の値に補正して年代決定を行う。さらに、西谷（私信）は近畿地方と東北地方間では奈良、平安時代には偏角に関して地域差に加えて、- 5 °の程度の補正が必要と述べている。ここでは、以上の補正を行い、考古地磁気年代を推定する。

２　試料採取と磁化測定

小平２遺跡の焼壁土坑４基（SK2、SK3、SK5、SK13）から、定方位で112個の焼土試料が、約8㎤のポリカーボネイト製の立方体容器を用いて採取された。残留磁化測定にはスピナー磁力計を、二次的な磁化の除去には交流消磁法を用いた。４個のパイロット試料を用いて段階交流磁場消磁を実施し、二次磁化の除去できる交流磁場レベルを決定した。その磁場レベルで残りの試料を消磁し、その処理前後の残留磁化を求めた。また、MS2帯磁率計を用いて採取試料の帯磁率も測定した。

３　磁化測定結果および考察

（１）　交流消磁前・後の残留磁化

パイロット試料（20、40、60、80）を用いた段階交流消磁の結果を図１に示す。4つの試料とも残留磁化はかなり不安定であり、試料の有する特徴的磁化成分を認めることができない。しかし、3mTの消磁でわずかについた二次的な粘性磁化成分（雑音成分）が分離されているように見える。さらに、それ以上の交流磁場レベルでの消磁は、試料の有する残留磁化方向をふらつかせるだけで、安定な磁化成分を取り出せているようには見えない。よって、残りの試料については消磁前の残留磁化を測定した後、わずかな雑音成分の取り去れる3mTの交流磁場レベルで消磁し、残留磁化を測定することにした。

交流消磁前・後の各試料の残留磁化および帯磁率、さらにそれらの平均値を表２にまとめた。また、各土坑ごとに消磁前・後の残留磁化方向を図２と図３に示した。図２（消磁前）でわかるように、各土坑ごとに試料の残留磁化方向のばらつき程度が異なる。SK2がもっともまとまりがよく、SK3とSK5では、あるまとまりのあるグループ（網掛けの円で囲まれている）から大きく異なる方向を示すものが存在している。ここでの考古地磁気年代決定では、まとまりのある試料の残留磁化方向のみに着目する。よって、表２の平均方向は図２で数字を付けている試料の残留磁化方向（網掛けの円からはずれるもの）を用いず求められている。

焼土の残留磁化を調べた多くの研究例では、一般に試料は消磁後によりまとまりのいい方向を示すようになる。図３（消磁後）でわかるように、この遺跡の結果は、そうはなら

ず、いくぶんばらつきが増す結果になっている。このことは段階交流消磁で特徴的磁化成分が認められなかったことと整合的で、１）被熱程度が低かった、２）被熱後の時間経過の中で被熱による影響、すなわち残留磁化の安定性が劣化していった、３）大きく方向が異なるものついては被熱後に移動された、などが原因と考えられる。交流消磁後の結果については、まとまりのあるグループ（網掛けの円で囲まれている）からはずれるもの（図中の数字付き）を消磁前の場合以上に厳密に選択し、それらを取り除いて平均方向を求め、表２に挙げた。

（２） 残留磁化の信頼性

図４に、交流消磁後にあるまとまった方向を示すグループの平均方向を、各土坑ごとに示した。ただし、表２に示した平均方向を京都府の値に変換して示している。つまり、平均偏角値に0.8 °を加え、平均伏角値から3.3 °を引き去っている。平均方向周りの楕円は、平均値の集中度を表すもので、95%の確率で真の値が含まれる範囲を示している。図中の折れ線グラフは近畿地方における過去2000年間の地磁気方向の標準曲線（Maenaka、1990）である。また、図中の数字は西暦年である。

この図で認められるように、各土坑の方向はかなり異なっている。それぞれが異なる時代のもので、被熱したときが異なることを示しているとも考えられる。しかし、段階交流消磁や消磁後に各試料の残留磁化方向がよりばらつきを増すなど、残留磁化の安定性が相対的に低いことから、この平均方向の違いは被熱した時代の差ではなく、ばらつきと考える。

図５に、全試料の帯磁率（X軸）と消磁前残留磁化強度（Y軸）を示す。まとまりのある方向グループに含まれる試料の磁化強度や帯磁率は、含まれないもの（表２の□で囲まれた方向を持つ試料）と比べて大きい。被熱程度が高く磁気的に安定な試料は大きな帯磁率と残留磁化強度を持つことはよく知られたことであり（Morinaga他、1999）、この遺跡の結果もそうなっている。より精密に年代決定するために、ここでは消磁後の残留磁化強度が1.0×10^{-4} Am^2kg以上の試料で、かつまとまりのあるグループに含まれる方向のみを採用し、平均方向を求めた。その結果、平均操作に採用された試料数は43個で、平均の偏角 = -9.0 °、伏角 = 52.0 °、精密度パラメータ = 118.8、フィッシャーのα_{95} = 2.0 °〔dD（偏角） = 3.2 °、dI（伏角） = 2.0 °〕となった。

（３） 考古地磁気年代決定

上で求めた平均方向は、以前分析を行った小松原窯跡の焼土から得られた方向とかなり一致している。よって、時代的には同じ頃と考えられる。求められた平均方向を京都府における値に変換すると、平均の偏角 = -8.2 °、伏角 = 48.7 °となる。図６に示した標準曲線との比較（図６中の●）によって、広く見積もって西暦375年～425年、475年～550年という2つの年代範囲が得られる。

この遺跡は、検出遺物から9～10世紀頃と考えられているが、そのような年代は求められない。そこで、奈良、平安時代特有の近畿地方と東北地方の偏角差（西谷、私信）を採用

すると、補正後の平均の偏角 = -13.2 °、伏角 = 48.7 °となる。この方向と標準曲線との比較（図６中の★）によれば、広く見積もって西暦525年～550年、775年～850年、875年～925年、1025年～1075年という４つの年代範囲が得られる。対応関係からはこれらのうちの西暦775年～850年、1025年～1075年の年代範囲の可能性が高い。

引用文献

Hirooka, K., 1971 Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in south-west Japan, *Mem. Fac. Sci. Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral.,* 38, 167-207.

Hirooka, K., 1983. Results from Japan, *in Geomahnetism of Baked Clays and Recent Sediments, eds. Creer, K. M. et al.,* 150-157, Elsevier, Amsterdam.

Maenaka, K., 1990. Archeomagnetic secular variation in Southwest Japan, *Rock Mag. Paleogeophys.,* 17, 21-25.

Morinaga, H., Inokuchi, H., Yamashita, H., Ono, A., and Inada, T., 1999. Magnetic detection of heated soils at paleolithic sites in Japan, *Geoarchaeology,*14(5), 377-399.

西谷忠師、熱残留磁気による年代測定「沢田II遺跡の考古地磁気調査」、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第268集「沢田II遺跡発掘調査報告書」、94-99、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター.

Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., van der Plincht, J. and Spurk, M.(1998)INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

表２　残留磁化、帯磁率測定結果のまとめ(1)

試料	重量 (g)	交流消磁前 偏角 (°)	伏角 (°)	重量当帯磁率 (×10E-8 SI)	重量当磁化強度 (×10E-4Amm/kg)	交流消磁(3mT)前 偏角 (°)	伏角 (°)	重量当磁化強度 (×10E-4Amm/kg)	
SK2									
K63	10.77	−0.8	61.7	19.3	0.784	3.5	55.0	0.830	
K64	11.49	−18.9	69.9	16.8	0.601	−8.7	72.2	0.560	
K65	10.66	−7.1	53.0	25.9	3.096	−6.7	55.4	3.499	← 採用
K66	10.53	−10.1	50.2	49.5	6.477	−9.6	52.0	7.531	← 採用
K67	10.44	−11.0	54.3	46.4	6.485	−13.7	51.6	7.931	← 採用
K68	10.48	−15.2	46.8	63.9	8.845	−20.6	49.6	9.924	← 採用
K69	10.78	−9.8	58.8	37.6	1.809	−12.1	63.3	1.809	← 採用
K70	9.77	−8.2	49.7	46.6	4.278	−20.6	48.9	4.852	← 採用
K71	10.90	−3.4	47.5	21.0	1.349	−4.4	43.0	1.422	← 採用
K72	10.38	−15.1	52.2	47.4	8.439	−13.5	52.5	10.019	← 採用
K73	10.50	−1.6	46.3	30.3	1.495	9.3	48.4	1.533	← 採用
K74	11.73	−15.4	67.9	20.5	0.488	10.4	50.7	0.458	
K75	11.98	−6.2	10.3	17.4	0.513	−11.2	41.7	0.501	
K76	11.04	−7.2	61.8	32.8	3.080	−16.0	57.2	3.505	← 採用
K77	11.84	−15.4	50.1	23.9	1.351	−5.2	59.7	1.258	← 採用
K78	12.07	−1.4	52.3	23.0	0.388	−0.1	43.4	0.365	
K79	11.05	−6.1	57.4	27.1	2.425	−6.2	52.2	2.769	← 採用
K80	11.04	−2.2	58.3	48.6	4.764	−10.2	55.1	5.725	← 採用
K81	11.11	−20.5	62.9	30.7	1.890	−14.7	63.2	1.899	← 採用
K82	11.49	−32.6	59.0	23.6	0.500	−57.3	60.5	0.420	
K83	11.16	−4.7	61.1	27.5	1.380	3.7	64.3	1.344	← 採用
K84	11.65	−11.2	62.8	22.9	0.764	−16.8	47.5	0.845	
K85	11.61	−31.8	65.7	19.6	0.896	−38.0	63.7	0.887	
K86	11.32	11.8	61.4	17.6	0.839	12.2	63.6	0.854	
K87	11.40	3.7	58.2	21.7	1.211	18.6	58.0	1.281	← 採用
K88	10.60	−8.5	42.5	17.9	2.811	−9.9	43.2	3.104	← 採用
K89	11.81	−36.0	61.0	20.1	0.658	−16.4	71.6	0.582	
K90	10.87	−3.7	53.3	17.8	1.012	−4.7	42.4	1.067	← 採用
平均	N = 27	−9.9	56.9			N = 24 −6.1	53.0		
(□の結果を除く)	k = 81.5	α_{95} = 3.1°				k = 73.3	α_{95} = 3.5°		
SK3									
K26	9.23	−9.3	50.5	48.4	3.044	−17.3	50.7	3.629	← 採用
K27	9.73	−10.2	47.5	63.8	4.450	−8.8	45.6	5.612	← 採用
K28	9.47	−9.8	50.6	50.2	2.767	−16.4	53.8	3.020	← 採用
K29	10.05	−7.9	52.3	46.1	4.925	−7.5	51.1	6.020	← 採用
K30	9.35	−10.0	46.5	61.7	3.091	−17.1	43.8	3.583	← 採用
K31	10.18	−23.0	48.6	37.0	1.817	−3.7	47.6	1.847	← 採用
K32	10.58	−15.6	47.7	32.4	2.486	−13.3	48.3	2.713	← 採用
K33	10.20	−11.5	40.6	34.7	2.637	−9.4	46.0	2.892	← 採用
K34	9.62	−20.2	45.3	32.2	2.973	−18.6	43.9	3.254	← 採用
K35	9.80	−7.1	46.4	34.7	3.235	−12.2	47.4	3.755	← 採用
K36	10.17	−6.9	46.2	33.5	3.825	−10.5	49.1	4.376	← 採用
K37	9.32	−10.8	48.7	57.1	7.446	−8.9	49.2	8.841	← 採用
K38	10.44	−11.1	54.0	43.6	4.837	−9.8	51.0	5.900	← 採用
K39	9.20	6.7	55.9	53.2	5.533	11.9	53.6	6.707	← 採用
K40	10.66	14.2	61.7	25.3	0.684	−10.2	58.3	0.638	
K41	11.28	−8.1	53.1	21.8	0.474	−5.9	44.0	0.535	
K42	10.72	7.9	65.1	22.1	0.532	36.9	49.7	0.606	
K43	10.33	12.8	39.0	26.8	0.545	−0.4	73.9	0.641	
K44	11.12	16.0	38.2	24.9	0.908	9.0	42.4	0.796	
K45	11.09	−71.9	25.9	47.6	0.665	−107.1	40.9	0.490	
K46	9.79	−64.4	3.3	46.4	0.666	−92.5	−11.8	0.659	
K47	9.84	124.4	4.5	40.1	1.880	128.6	1.6	2.033	
K48	10.19	124.4	−34.5	24.2	2.365	127.9	−33.2	2.699	
K49	10.56	−62.7	54.4	32.4	0.579	−23.9	53.0	0.491	
K50	10.40	−20.0	52.2	27.8	0.612	−31.1	63.9	0.541	
K51	10.97	35.6	76.6	33.2	0.514	−20.0	77.2	0.532	
K52	10.60	−59.2	−17.9	36.6	0.425	−56.9	−19.8	0.481	
K53	10.99	22.2	−24.7	26.1	0.265	15.4	13.9	0.423	
K54	10.94	31.2	61.9	24.8	0.486	12.8	72.5	0.444	
K55	11.47	15.2	47.9	27.0	0.933	−1.0	40.9	0.985	
K56	10.26	−20.8	44.3	29.8	0.600	−2.6	52.0	0.540	
K57	11.55	−19.8	52.8	27.1	0.996	−18.2	53.3	1.048	← 採用
K58	10.94	−38.4	28.1	22.8	0.197	−54.4	10.1	0.242	
K59	10.41	−18.5	62.5	23.5	0.452	16.9	72.4	0.328	
K60	10.69	−13.6	64.7	19.5	0.548	−25.9	53.6	0.688	
K61	11.19	−9.9	61.6	15.5	0.741	−14.0	61.0	0.720	
K62	11.40	−48.5	18.9	16.8	0.162	−58.5	−15.5	0.046	
平均	N = 27	−6.4	52.1			N = 23 −10.0	49.9		
(□の結果を除く)	k = 51.5	α_{95} = 3.9°				k = 110.9	α_{95} = 2.9°		

表２　残留磁化、帯磁率測定結果のまとめ(2)

試料	重量 (g)	交流消磁前 偏角 (°)	伏角 (°)	重量当帯磁率 (×10E-8 SI)	重量当磁化強度 (×10E-4Amm/kg)	交流消磁(3mT)前 偏角 (°)	伏角 (°)	重量当磁化強度 (×10E-4Amm/kg)	
SK5									
K91	10.25	38.1	70.3	17.3	0.260	85.3	59.2	0.259	
K92	10.08	−9.3	−2.5	23.4	0.553	−23.6	39.6	0.400	
K93	11.32	18.1	14.5	21.5	0.245	53.3	36.9	0.353	
K94	11.53	−4.2	49.8	22.5	0.649	35.7	55.1	0.599	
K95	10.91	−12.6	27.7	25.2	0.648	21.4	35.3	0.823	
K96	10.96	−3.6	61.8	21.9	0.222	63.4	52.7	0.299	
K97	11.04	−8.7	53.0	49.3	5.933	−10.8	55.9	7.029	← 採用
K98	11.39	3.8	38.0	26.9	0.712	18.8	50.6	0.742	
K99	11.00	−6.1	36.8	22.8	0.650	−3.8	34.9	0.807	
K100	11.67	10.1	54.1	36.4	3.171	10.6	53.4	3.993	← 採用
K101	11.31	−3.1	36.9	20.0	0.530	28.3	56.7	0.669	
K102	9.98	2.1	47.5	51.2	1.934	−9.2	51.1	2.134	← 採用
K103	10.04	−0.6	50.9	33.2	1.663	−0.4	56.0	1.514	← 採用
K104	9.75	0.8	48.5	58.3	12.103	0.3	48.4	14.974	← 採用
K105	10.83	−7.6	67.2	40.1	4.838	−13.5	67.3	5.965	
K106	11.37	−69.3	−14.4	24.5	0.485	−53.0	16.8	0.615	
K107	12.12	−7.6	48.0	24.0	0.508	−32.5	57.9	0.620	
K108	10.01	−7.4	38.7	11.2	0.309	5.2	50.5	0.332	
K109	10.70	−30.7	33.0	16.6	0.369	2.0	54.0	0.466	
K110	9.85	−25.8	47.4	22.3	1.096	−26.5	42.6	1.076	
K111	10.26	−10.3	53.3	17.7	0.371	−31.6	36.4	0.275	
K112	10.71	−10.0	47.8	24.2	2.045	−6.7	51.9	2.306	← 採用
平均	N = 16	−4.8	49.0			N = 9 1.2	52.8		
(□の結果を除く)k = 66.3		α_{95} = 4.6°				k = 161.6	α_{95} = 4.1°		
SK13									
K1	9.77	−22.9	66.9	36.4	1.228	−16.7	53.5	1.249	← 採用
K2	10.76	−13.2	51.5	37.9	1.896	−18.4	53.6	1.691	← 採用
K3	9.45	−10.8	53.1	38.1	1.757	−15.8	59.0	1.651	← 採用
K4	9.04	−3.1	56.3	33.5	2.954	−5.8	59.4	3.164	← 採用
K5	10.03	−19.9	62.9	31.5	1.416	−15.6	52.5	1.585	← 採用
K6	10.43	−45.3	69.4	27.9	0.673	−57.3	69.6	0.616	
K7	9.82	8.9	52.2	25.5	0.574	11.8	51.4	0.481	
K8	9.90	5.1	45.5	35.1	0.696	32.1	67.1	0.440	
K9	10.05	−26.1	60.6	24.5	1.134	−11.4	56.6	1.144	← 採用
K10	11.30	1.0	51.6	22.2	0.554	−0.2	58.0	0.463	
K11	11.22	−12.4	47.9	25.5	0.702	−14.4	57.5	0.593	
K12	10.70	10.2	50.2	24.5	0.519	−30.7	65.5	0.352	
K13	11.41	−24.8	65.7	18.5	0.372	−6.1	41.7	0.404	
K14	10.47	16.4	67.1	20.2	0.388	14.4	47.3	0.478	
K15	10.75	52.5	71.2	28.9	0.563	−51.8	67.9	0.574	
K16	10.21	−13.5	71.3	30.0	0.576	−28.6	43.5	0.733	
K17	10.55	−59.1	78.0	26.0	0.739	−23.0	72.8	0.594	
K18	7.98	−63.6	62.5	36.1	1.391	−60.8	60.0	1.223	
K19	11.46	−15.1	51.8	36.9	0.773	−22.9	53.3	0.551	
K20	10.89	−38.3	67.4	36.4	0.726	24.5	60.3	0.754	
K21	10.29	12.4	47.2	30.4	0.637	−2.7	46.1	0.587	
K22	10.55	−3.9	49.9	29.7	0.753	−7.5	41.3	0.882	
K23	10.98	0.9	39.2	25.4	0.644	−34.6	37.9	0.552	
K24	9.86	6.6	77.3	27.7	0.441	24.7	41.6	0.514	
K25	9.69	−11.9	58.2	31.5	0.614	−5.8	41.8	0.615	
平均	N = 19	−5.3	55.8			N = 15 −7.4	52.0		
(□の結果を除く)k = 53.5		α_{95} = 4.6°				k = 78.1	α_{95} = 4.4°		

まとまりのあるグループに含まれ、
消磁後の残留磁化強度が
$1\times10^{-4}Am^2$／kg以上の
試料の平均

N = 43　−9.0　52.0
k = 118.8　α_{95} = 2.0°(dD=3.2°)

京都府の値に → **−8.2　48.7**
補正後の方向

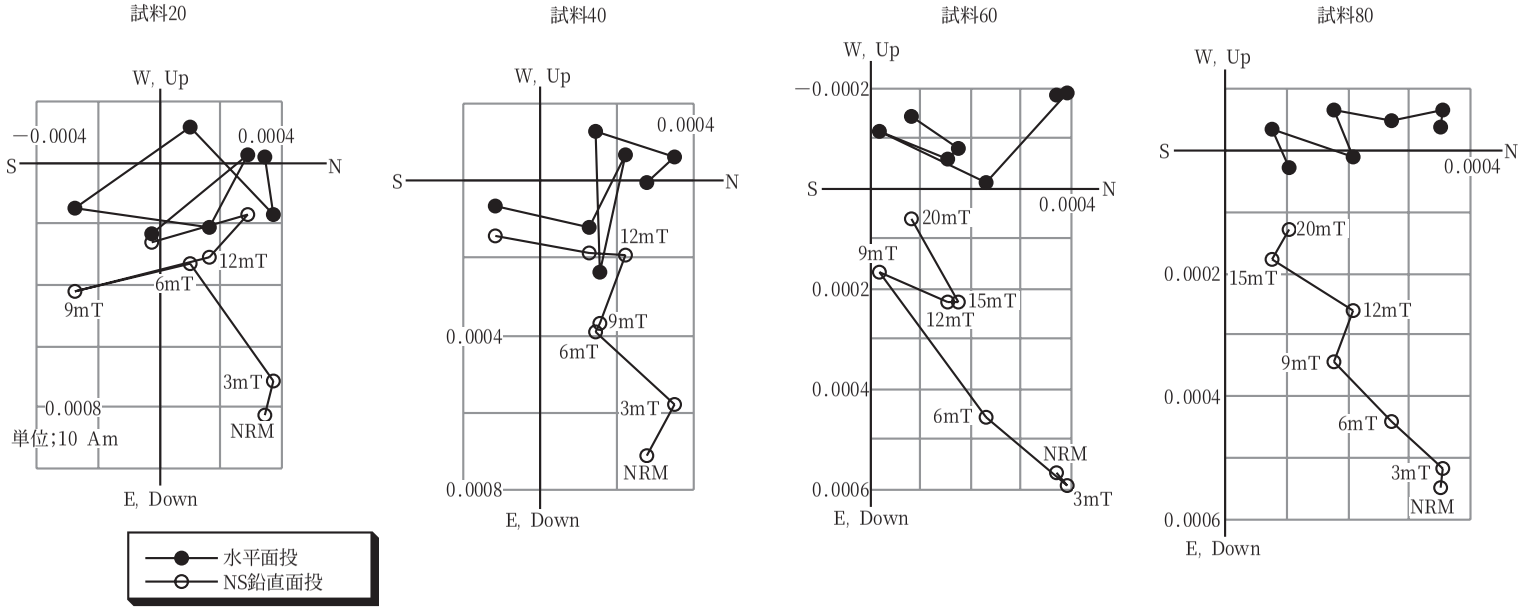


図１　パイロット試料(試料20、40、60、80)の段階交流消磁結果

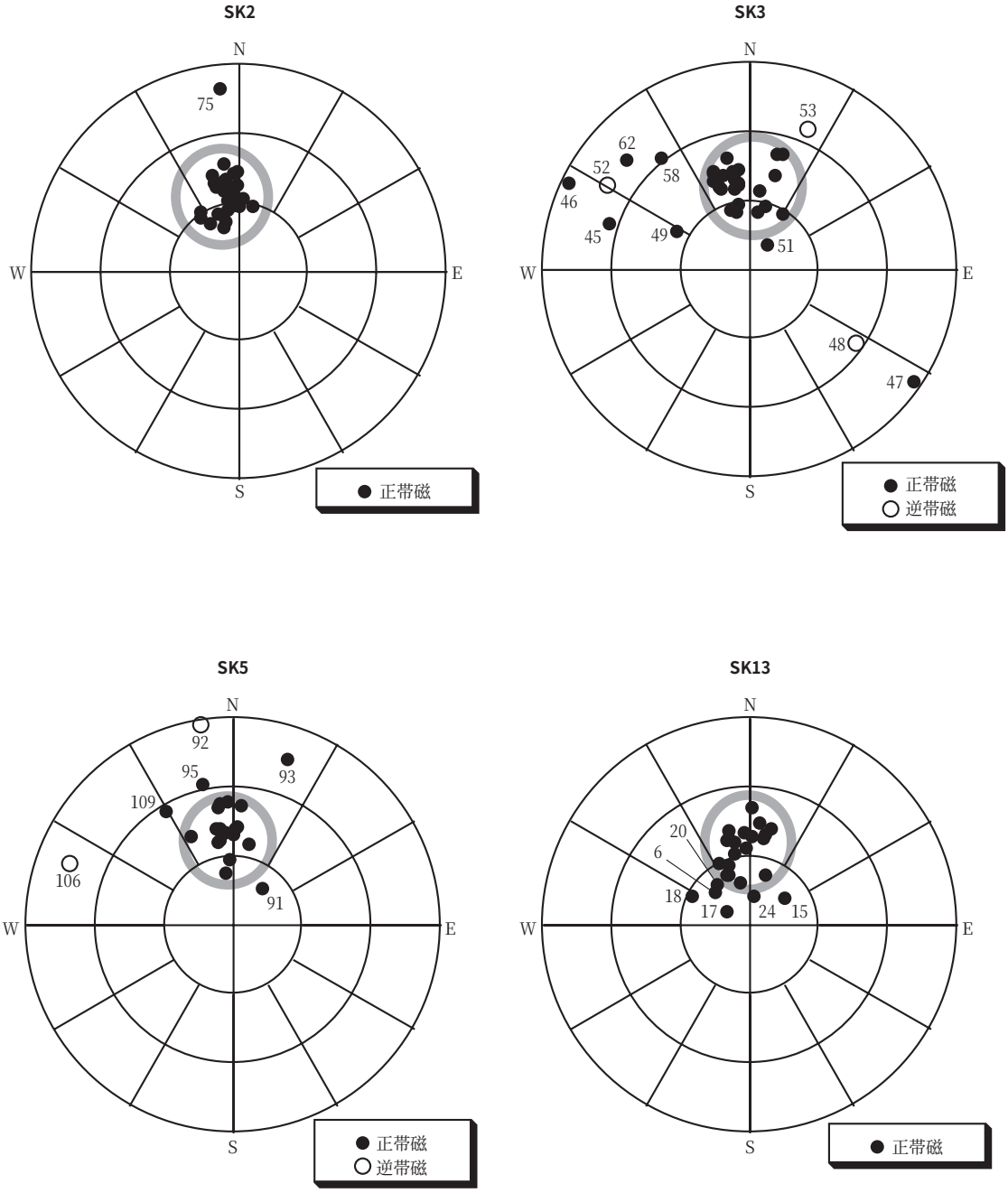


図２　交流消磁前の全試料の残留磁化方向

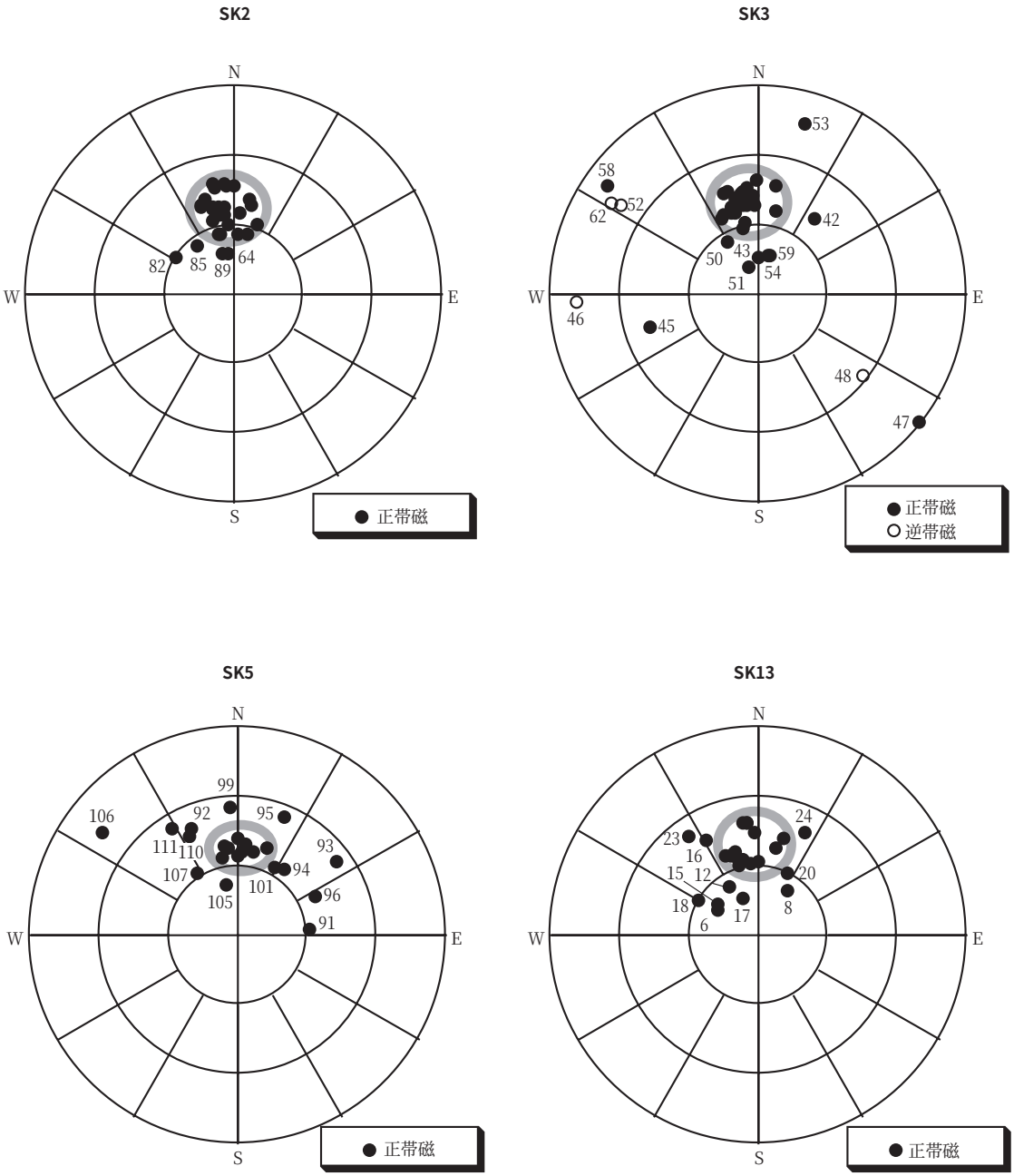


図３　3mTの交流消磁後の全試料の残留磁化方向

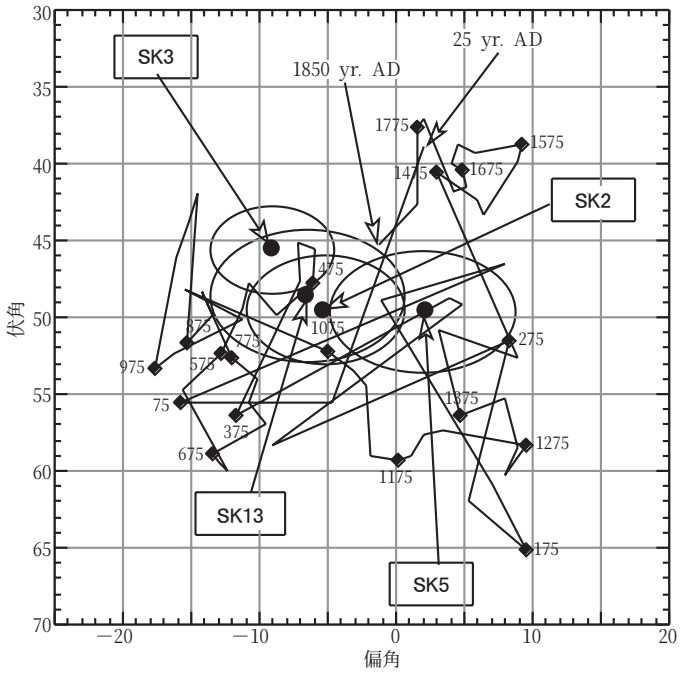


図４　図３（消磁後）で網かけ円に含まれる試料に関する、各土杭ごとの地理的補正を施した平均方向と、近畿地方における考古地磁気標準曲線（Maenaka、1990）との比較
※標準曲線の数字は西暦年。

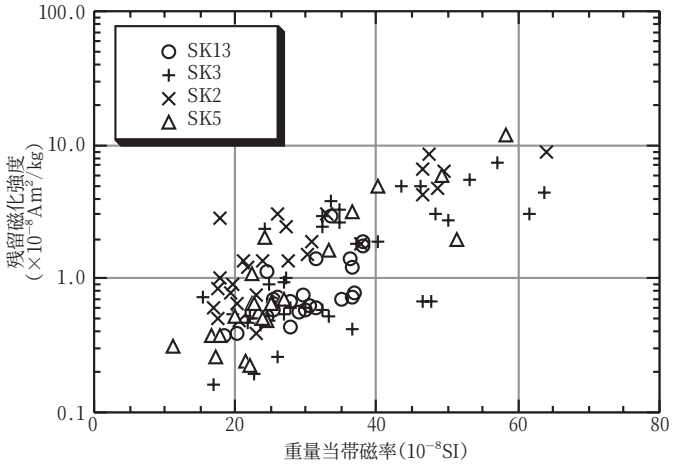


図５　前試料の磁気的性質（帯磁率と残留磁化強度の関係）
※縦軸は対数軸になっている。

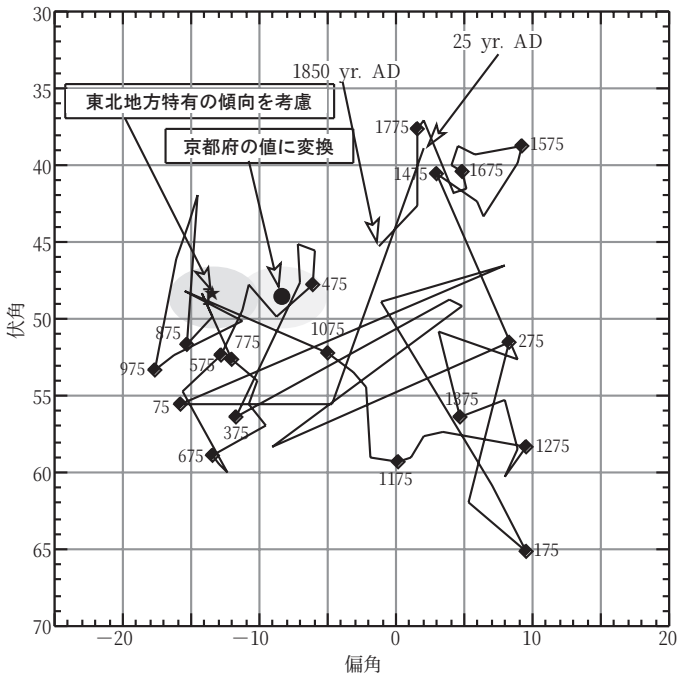


図６　図３（消磁後）で網かけ円に含まれ、かつ消磁後残留磁化強度が1.0×10^{-4} Am^2/kg以上の試料（43試料）の平均方向と、近畿地方における考古地磁気標準曲線（Maenaka、1990）との比較

※標準曲線の数値は西暦年。また、●は地理的な補正を施した場合の平均方向、★はさらに奈良、平安時代の近畿地方と東北地方の偏角差（西谷、私信）を加えた時の平均方向。

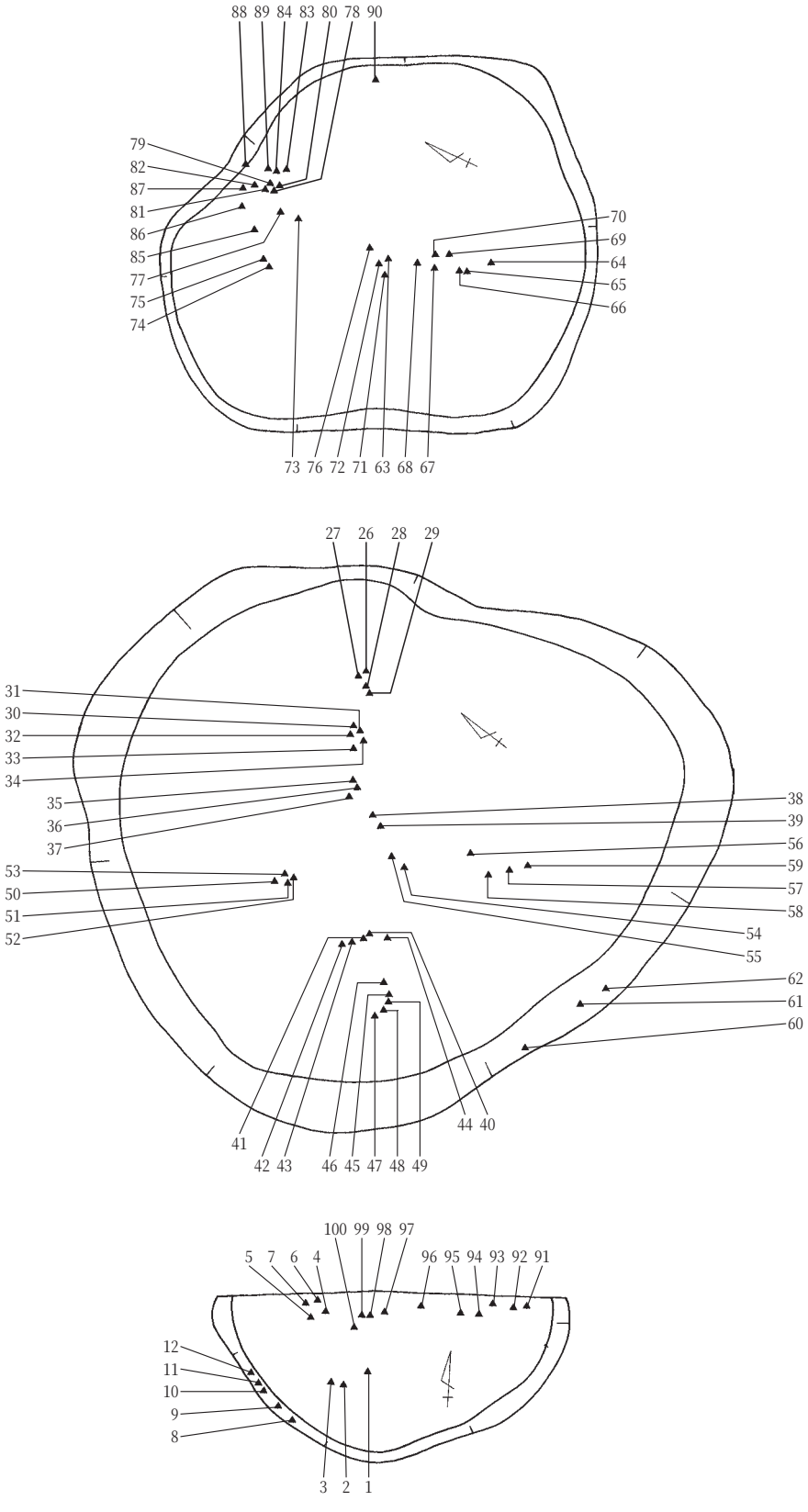

88 89 84 83 80 78 90
79
82
87
81
86
85
77
75
74
70
69
64
65
66
73 76 72 71 63 68 67
27 26 28 29
31
30
32
33
34
35
36
37
38
39
56
59
57
58
54
55
53
50
51
52
62
61
60
41
42 43
46 45 47 48 49
44 40
100 99 98 97
5 7 6 4
96 95 94 93 92 91
12
11
10
9
8
3 2 1

図７　資料採集位置図

小平２遺跡・小平３遺跡出土土器の分析

目　　次

はじめに …… 16
Ⅰ　胎土分析 …… 16
　1　試料 …… 16
　2　分析方法 …… 16
　3　結果 …… 16
　4　考察 …… 17
Ⅱ　赤彩土器の顔料分析 …… 19
　1　試料 …… 19
　2　分析方法 …… 19
　3　結果 …… 19
　4　考察 …… 20
引用文献 …… 20

図表・図版一覧

表１　胎土薄片観察結果 …… 18
図１　土器付着赤色物質のX線回折図 …… 21
図版１　胎土薄片(1) …… 22
図版２　胎土薄片(2) …… 23
図版３　胎土薄片(3) …… 24

小平２遺跡・小平３遺跡出土土器の分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

八幡町に所在する小平２遺跡・小平３遺跡は、庄内平野の東端を区切る出羽丘陵上に位置する。発掘調査では、平安時代とされる焼壁土坑や土坑、溝跡、柱穴などの遺構が検出され、焼壁土坑からはいわゆる「赤彩土器」が出土し、また土坑からは廃棄されたと考えられている須恵器なども多く出土している。

本報告では、赤彩土器を対象とし、その材質（胎土）の特性を捉え、素地土に使用された粘土や砂の採取地や素地の調整、焼成温度などの情報を得ることにより、赤彩土器の製作事情に関わる資料を作成する。また、赤彩土器の表裏面の色調は、明らかに赤色の顔料を塗布したような状態も認められるが、素地自体も赤い色調を呈する。本報告では、赤彩土器の表面に認められる赤色物質を採取し、X線回折分析をすることにより、その物質名についても検証を行う。

Ⅰ　胎土分析

１．試　料

試料は、小平２遺跡・小平３遺跡の土坑より出土した赤彩土器の破片10点である。試料には便宜的に試料番号１～10を付す。試料番号と試料との対応については、別添の写真を参照されたい。

２．分析方法

ここでは、薄片作製観察を用いて試料間のデータを比較検討する。薄片作製観察は、胎土の特徴を地質と関連づけて捉えることができ、また、素地の状態や今回のような表面の付着物の状態についても観察することができる。また、当社では、これまでにも山形県内各地の遺跡から出土した赤彩土器や須恵器について薄片作製観察による胎土分析を行っている。以下に処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部（粘土試料は樹脂による固化の後）をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03㎜の厚さに研磨して作製した。薄片は岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を明らかにし、また胎土の基質については、孔隙の分布する程度と砂の配列や孔隙などに方向性が認められるかどうか、および基質を構成する粘土が焼成によりどの程度ガラス化してどの程度粘土鉱物として残存しているかということと酸化鉄などの鉄分の含まれる程度について定性的に記載した。

３．結　果

観察結果を表１に示す。10点の試料の砂粒の状況は、ほぼ同様であり、大きく異なる試料はない。共通する特徴は、以下の通りである。砂の全体量は中量、最大径が１㎜前後で、

淘汰は不良である。砂の主体は、石英の鉱物片であり、いずれの試料にも中量含まれる。それ以外の砂粒は、いずれも微量であり、ほぼ全試料に認められるものとして、鉱物片ではカリ長石、斜長石、角閃石、酸化角閃石、緑廉石、不透明鉱物、岩石片では凝灰岩、流紋岩、多結晶石英（花崗岩由来と考えられる）、花崗岩類である。また、由来の不明な非晶質のシリカ粒子や海綿骨針および植物珪酸体などの微化石も認められる。

素地については、いずれもセリサイト質であり、ガラス化した部分は認められない。試料番号１、２、５～８には配向性が認められ、特に試料番号１と７で強い。また、素地中に認められる酸化鉄粒はそれほど多くない。

なお、薄片観察においても、土器表面に赤色物質が付着している状況が確認された。すなわち、濃い赤色部分は、素地の色調ではなく、赤色を呈する薄層が表面に付着している。この薄層中には、微粒の赤鉄鉱が認められるが、それ以外にも微細な粘土粒を比較的多く含んでいる。

４　考　察

前述のように、小平２遺跡・小平３遺跡は出羽丘陵上に位置しているが、出羽丘陵自体は、庄内層群と呼ばれる第四紀更新世の輝石安山岩質の火砕岩により構成されている（池辺ほか,1979）。また、同著によれば、丘陵の背後に広がる山地は、主に新第三紀の凝灰岩層や泥岩層により構成されている。したがって、今回の試料に認められた胎土中の砂粒構成は、小平２遺跡・小平３遺跡の立地する周囲の地質を直接反映したものとは言えない。今回の試料の砂粒の特徴の一つは、凝灰岩、流紋岩、花崗岩類の３種類の岩石片が混在するということである。このような地質を、大沢ほか（1986;1988）などの資料からみると、山形盆地から新庄盆地に至る盆地を取り巻く山地に、上記３種類の地質の分布が広く認められる。おそらく、盆地内の表層の堆積物中には、これら周囲の山地に由来する砕屑物が混在していると考えられ、さらには、最上川という河川によって、これら盆地の堆積物は、その下流域の庄内平野にも運ばれる。したがって、最上川の河川作用の及んだ範囲では、庄内平野の砂であっても、新庄盆地や山形盆地の砂と類似した種類構成を示す可能性がある。実際に当社では、これまでにも山形盆地内の遺跡から出土した平安時代の須恵器および赤焼土器の胎土分析例があるが、そこに認められる胎土の砂粒には、上記３種類の岩石片が含まれている。すなわち、山形盆地から下流の最上川流域の遺跡から出土する平安時代の土器では、胎土中の砂粒の種類構成のみでみれば、須恵器でも赤焼土器でも概ね類似した特徴を示す。ただし、詳細に見れば、例えば山形盆地の遺跡の試料では、上記３種類の岩石片に加えて安山岩の岩石片も主要な種類となっているなどの傾向も認められる。しかし、これも全体的な傾向であり、個々の土器を取り出して、安山岩が認められれば山形盆地の土器という区別ができるものでもない。

いずれにしても、現時点では、小平２遺跡・小平３遺跡出土の赤焼土器に最上川の砂が使われている可能性が高いということはできる。小平２遺跡・小平３遺跡で検出された焼壁土坑が赤焼土器の焼成坑であり、焼成に至るまでの製作もその周囲で行われていたとす

表1．胎土薄片観察結果

試料番号	注記	砂粒			砂粒の種類構成																											孔隙度	方向性	粘土残存量	含鉄量	備考
					鉱物片												岩石片																			
		全体量	淘汰度	最大径	石英	トリディマイト	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	黒雲母	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	凝灰岩	流紋岩	デイサイト	ガラス岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	火山ガラス	粘土塊	シリカ粒子	珪藻	海綿骨針	植物珪酸体					
1	SK2F1 RP21	○	×	1.2	○	+	+	+				+	+	+		+			+	+					+		+	+		+	+	△	◎	◎	+	砂粒は粗粒砂が主体。素地はセリサイト質で強い配向性を示す。
2	SK2F2	○	×	1.3	○		+	+	+		+	+		+		+			+	+				+	+			+		+	+	△	○	◎	+	砂粒は粗粒砂が主体。素地はセリサイト質で配向性を示す。
3	SK2F1 RP21	○	×	0.9	○		+	+				+	+			+			+						+			+		+	+	△	△	○	+	砂粒は粗粒砂が主体。素地はセリサイト質。
4	SK2F1	○	×	1.3	○		+	+	+			+	+	+		+			+	+				+	+			△			+	△	△	○	+	砂粒は中粒～粗粒砂が主体。
5	SK2F1 RP21	○	×	1.0	○		+	+			+	+	+	+		+			+	△				+	+			+		+	+	△	○	◎	+	砂粒は粗粒砂が主体。素地はセリサイト質で配向性を示す。
6	SK2F1 RP21	○	×	1.1	○		+	+				+	+	+		+			+	+				+	+			+		+	+	△	○	○	+	砂粒は粗粒砂が主体。素地はセリサイト質で配向性を示す。
7	SK6F1	○	×	1.1	○	+	+	+				+	+	+		+				+				+			+	+	+	+	+	△	◎	◎	+	砂粒は中粒～粗粒砂が主体。素地はセリサイト質で強い配向性を示す。
8	SK2F1	○	×	1.2	○		+	+	+			+	+			+			+	+		+		△	+			+	+	+	+	△	○	◎	+	砂粒は中粒～粗粒砂が主体。素地はセリサイト質で配向性を示す。
9	SK2F1	○	×	1.3	○		+	+	+				+	+		+			+	+		+		+	△			+		+	+	△	△	○	+	砂粒は中粒～粗粒砂が主体。
10	SK2F1・F2	○	×	0.9	○	+	+	+				+		+		+			+	+				+	+			+		+	+	△	△	◎	+	砂粒は中粒～粗粒砂が主体。素地はセリサイト質で配向性を示す。

るならば、素地土に混ぜる砂は、丘陵からおりて庄内平野の沖積低地のある場所まで採取しに行っていた状況が推定される。粘土の採取については、遺跡周辺でみれば、須藤ほか（1981）が粘土資源の調査で報告しているように出羽丘陵上の凹地に堆積した粘土や丘陵縁辺に形成された段丘構成層中に堆積した粘土層などが利用されたのかも知れない。

なお今後、山形県下における古代の土器（主に須恵器と赤焼土器）について、最上川流域内における胎土の地域性を識別することができれば、土器の製作や移動、土器を通じた地域間の関係など考古学研究における効果は高いと考えられる。そのためには、各地における分析例の蓄積を必要とするが、その際にこれまでと同様の分析をするだけではなく、薄片観察結果の定量化や蛍光X線分析による元素組成の定量など、他の識別指標を設けることも検討する必要があると考える。

Ⅱ　赤彩土器の顔料分析

1　試　料

対象とする試料は、試料番号1～10の土器表裏面より採取した赤色物質10点である。なお、赤色物質を実見したところ、いずれもにぶい橙色を呈し、赤色物質と呼ぶには赤味に乏しい状態である。

2　分析方法

土器表裏面に認められる赤色物質を剥離し、105℃で乾燥する。乾燥試料はメノウ乳鉢で微粉砕した後、アセトンを用いて無反射試料板に塗布し、測定試料とする。作成したX線回折測定試料について以下の条件で測定を実施する。なお、赤色物質抽出の際には極力赤色物質のみを抽出するように努めたが、赤色物質が薄層であるため、土器胎土の混入を避けることは出来ていない。

検出された物質の同定解析は、Materials Data,Inc. のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

装置：理学電気製MultiFlex	Divergency Slit：1 °
Target：Cu（Kα）	Scattering Slit：1 °
Monochrometer：Graphite湾曲	Recieving Slit：0.3㎜
Voltage：40KV	Scanning Speed：2 °/min
Current：40Ma	Scanning Mode：連続法
Detector：SC	Sampling Range：0.02 °
Calculation Mode：cps	Scanning Range：3～45 °

3　結　果

試料番号1～10の土器の赤色物質を抽出し、X線回折法により結晶鉱物の同定を行った結果、各試料共通して赤鉄鉱（hematite）が含まれることが確認される。なお、赤鉄鉱以外にも、石英（quartz）、曹長石（albite）、イライト（illite）などが検出されている。これら鉱物の大部分は、試料採取時に混入した土器胎土に由来すると考えられるが、赤色物質中

にもこれらの鉱物が含まれている可能性はある。

4　考　察

遺跡から検出される代表的な赤色物質には、ベンガラ（赤鉄鉱；hematite[α－Fe_2O_3]）のほか、水銀朱（辰砂；cinnabar[HgS]）、鉛丹（鉛丹；minium[Pb_3O_4]）がある。X線回折法は、これら顔料鉱物の存在を定性的に把握する手法であり、各赤色物質から赤鉄鉱が検出されたことは、これらの赤色物質がベンガラであることを指摘する結果と捉えられる。

なお、ベンガラには天然の赤鉄鉱を意味する狭義の「ベンガラ」と、含水水酸化鉄を焼成して得られる赤鉄鉱や含水水酸化鉄あるいは含鉄粘土を塗布し、焼成によって発色させるなどの場合も範疇とする広義の「ベンガラ」とがある。今回の調査対象とした赤色物質については、その色調が淡いことや、赤鉄鉱以外にも他の鉱物が含まれる可能性があることから、現段階では広義の「ベンガラ」とする。前述のように、薄片観察では、赤色物質の薄層のなかに、赤鉄鉱以外の砕屑粒子も認めている。

今後、電子顕微鏡を用いたベンガラ粒の構造観察を実施することによって、材料となった出発物質や製法に関する知見を得ることを期待したい。

引用文献

池辺　穣・大沢　穠・井上寛生, 1979, 酒田地域の地質. 地域地質研究報告（５万分の１図幅）, 地質調査所, 42p.
大沢　穠・三村弘二・久保和也・広島俊男・村田泰章, 1986, 20万分の1地質図幅「仙台」, 地質調査所.
大沢　穠・広島俊男・駒沢正夫・須田芳朗, 1988, 20万分の１地質図幅「新庄および酒田」, 地質調査所.
須藤定久・船山　博・寒河江清毅, 1981, 山形県北部地域の瓦粘土資源. 未開発陶磁器原料資源調査報告書（昭和55年度）, 16-36, 地質調査所.

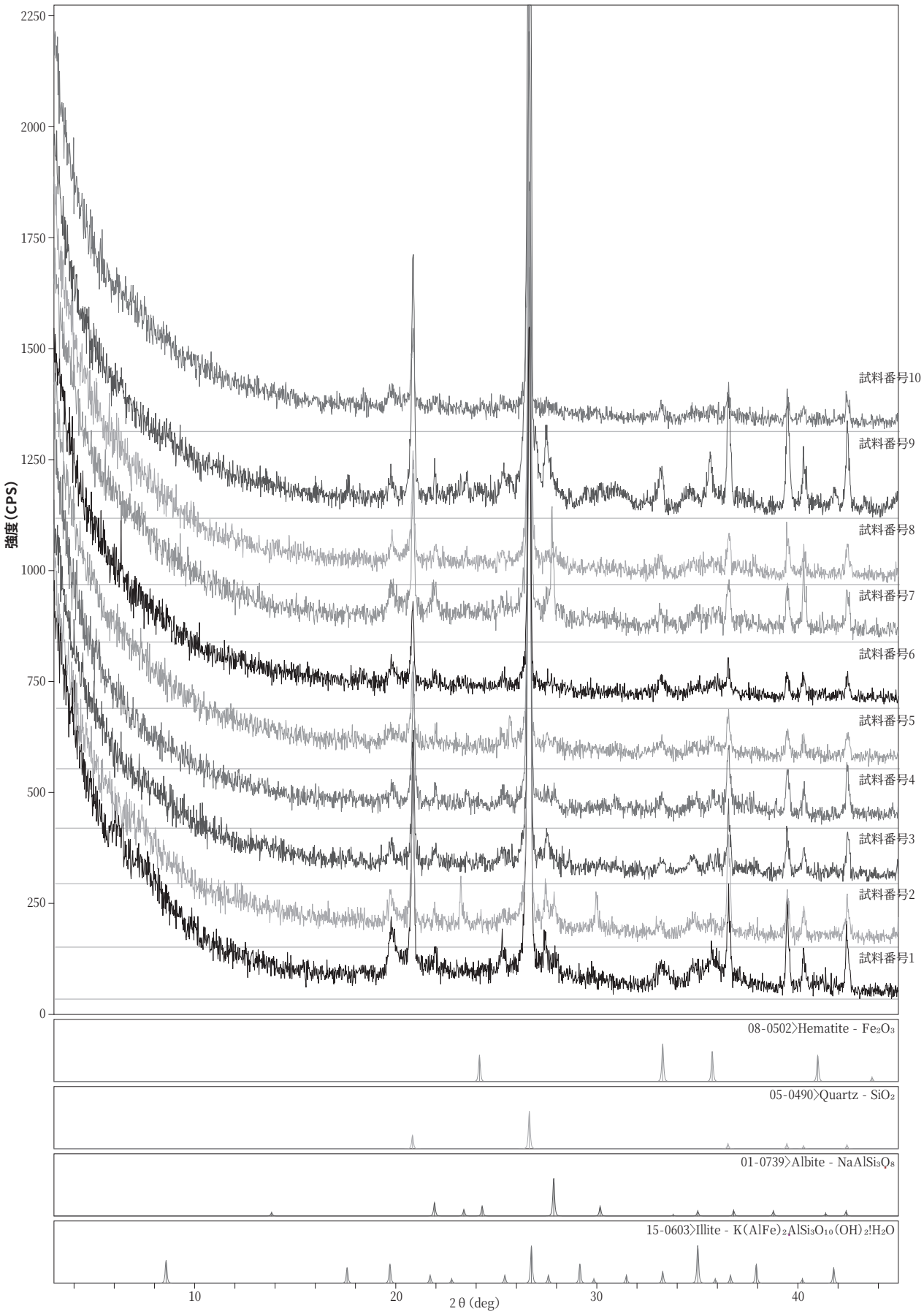
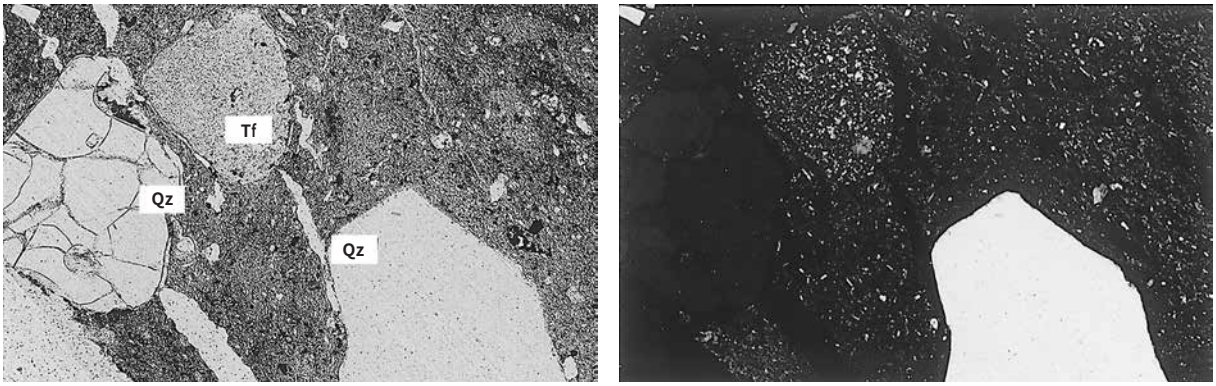
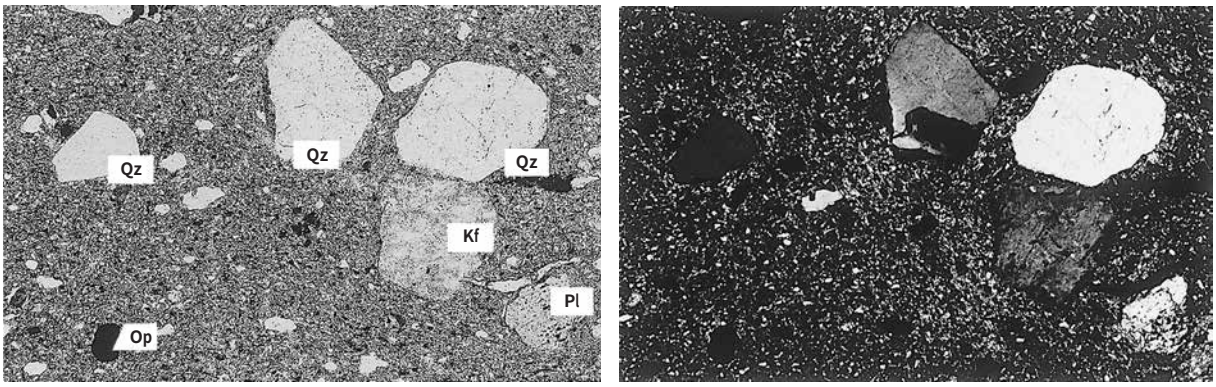


図1．赤彩土器の顔料のＸ線回析図

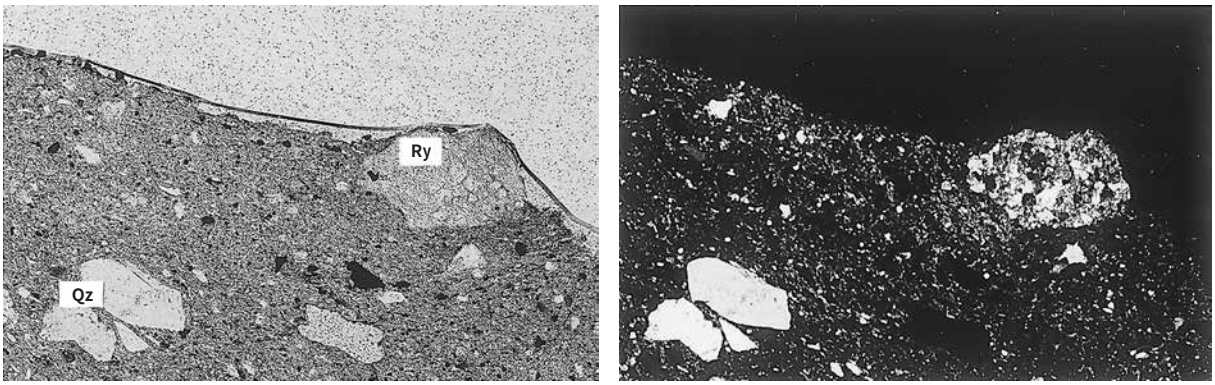
図版１　胎土薄片(1)



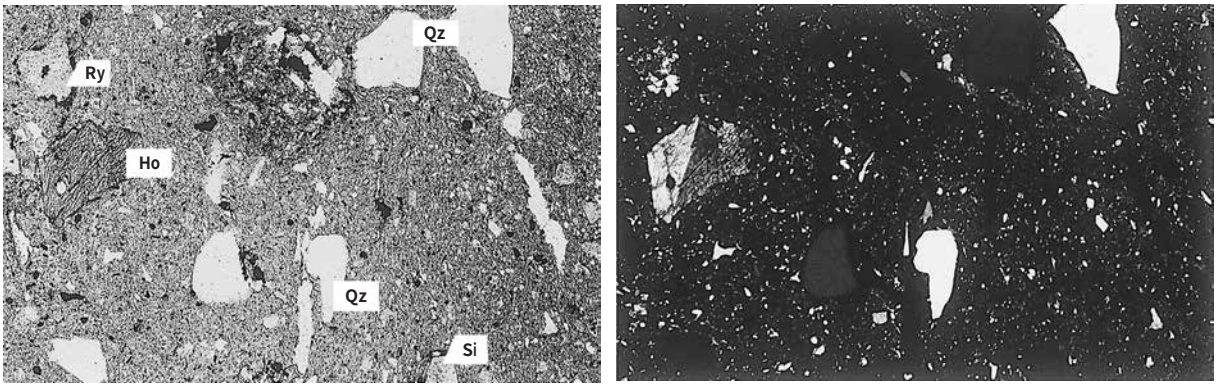
1．試料番号１　小平２　SK2F1　RP21



2．試料番号２　小平２　SK2F2



3．試料番号３　小平２　SK2F1　RP21

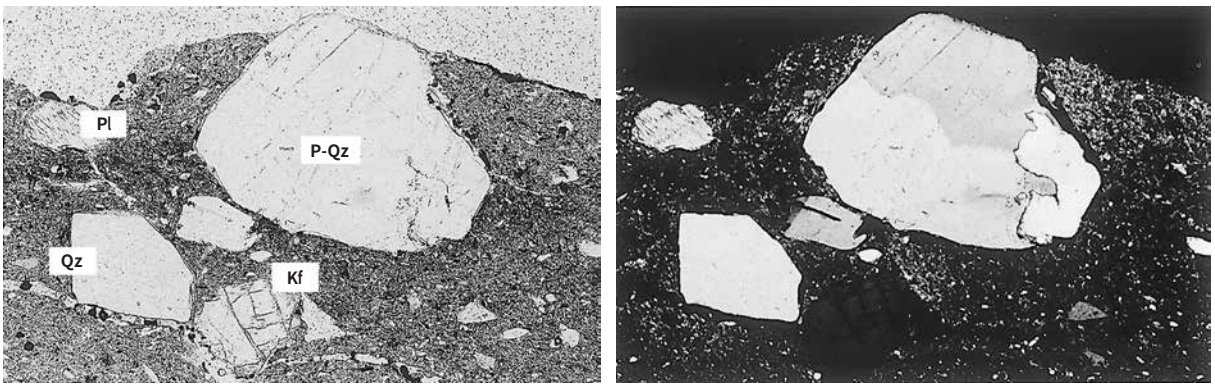


4．試料番号４　小平２　SK2F1

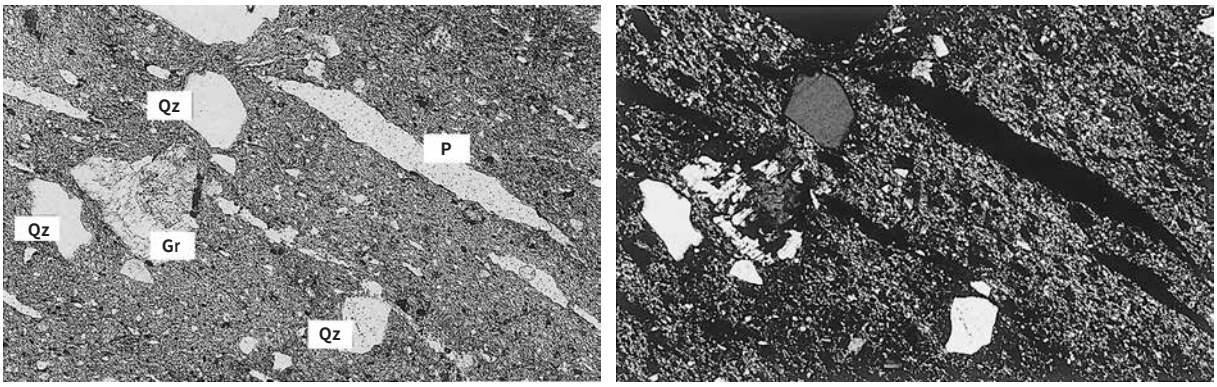
0.5mm

Qz:石英　Kf:カリ長石　Pl:斜長石　Ho:角閃石
Op:不透明鉱物　Tf:凝灰岩　Ry:流紋岩　Si:シリカ粒子
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

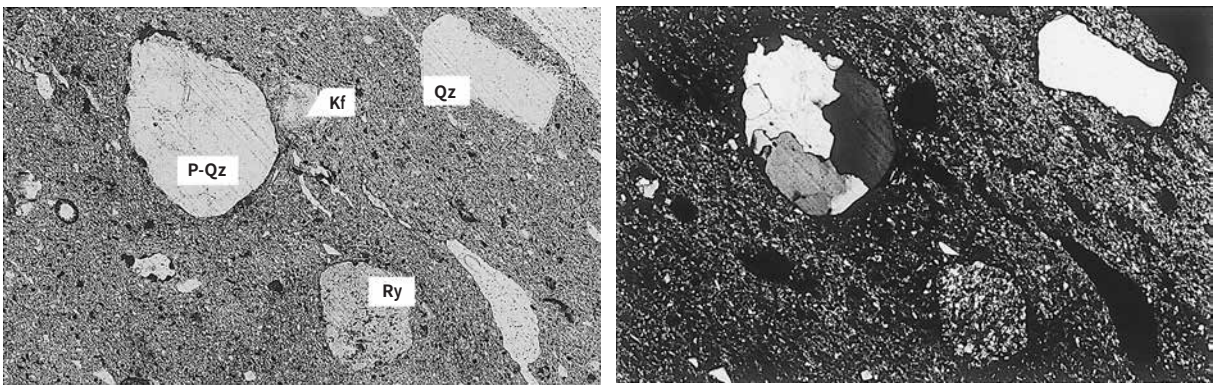
図版２　胎土薄片(2)



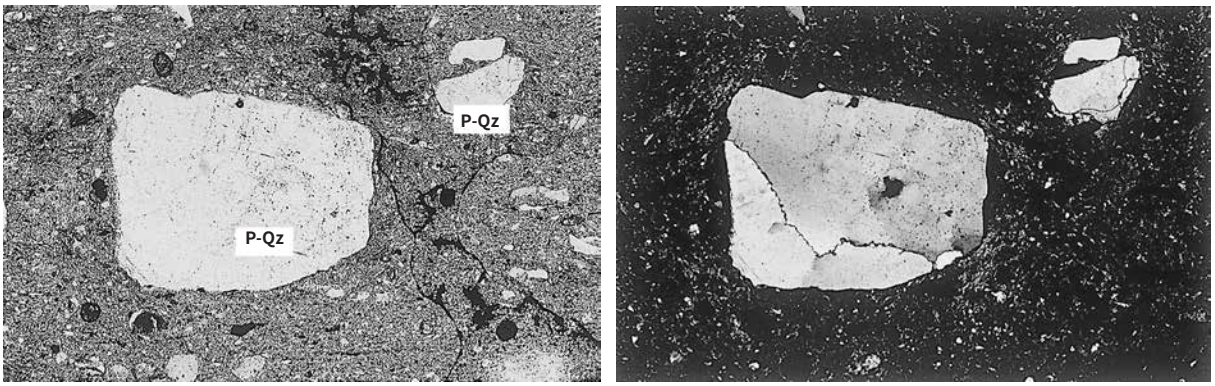
5．試料番号５　小平２　SK2F1　RP21



6．試料番号６　小平２　SK2F1　RP21



7．試料番号７　小平２　SK6F1

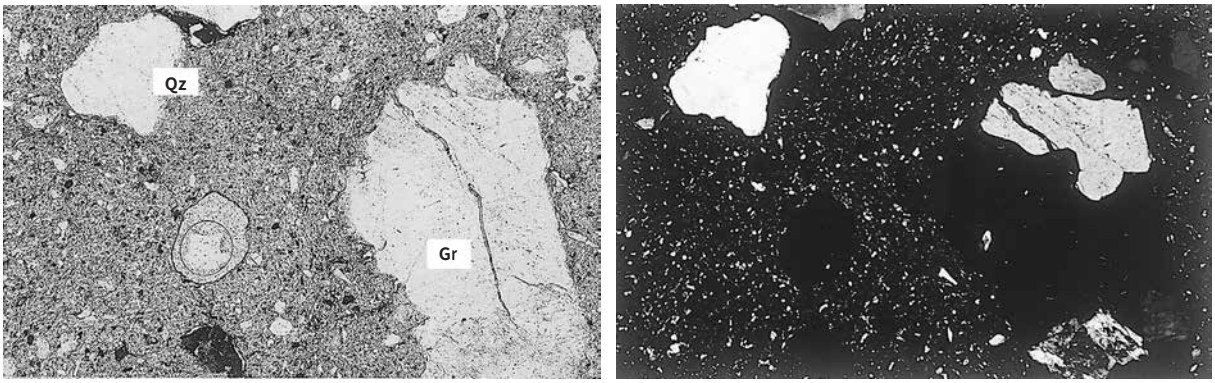


8．試料番号８　小平２　SK2F1

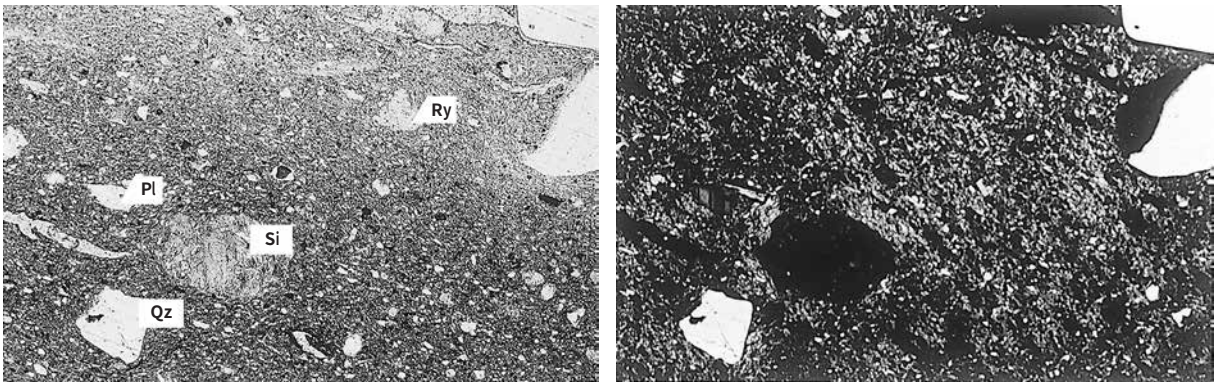
Qz:石英　Kf:カリ長石　Pl:斜長石　P-Qz:多結晶石英　Ry:流紋岩　Gr:花崗岩　P:孔隙
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

図版３　胎土薄片(3)



9．試料番号９　小平２　SK2F1



10．試料番号10　小平２　SK2F1･F2

0.5mm

Qz:石英　Pl:斜長石　Ry:流紋岩　Gr:花崗岩　Si:シリカ粒子
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

報告書抄録

ふりがな	こだいら２いせき・こだいら３いせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	小平２遺跡・小平３遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第128集
編著者名	山口博之
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号　TEL 023-672-5301
発行年月日	2004年3月26日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小平２遺跡（こだいら いせき） 小平３遺跡（こだいら いせき）	山形県（やまがたけん） 飽海郡（あくみぐん） 八幡町（やわたまち） 市条字小平（いちじょうあざこだいら） 他（ほか）	6462	平成14年度登録	38度57分19秒	139度56分51秒	20010917〜20011115	小平２ 1650 小平３ 1636	中山間活性化ふれあい支援農道整備事業

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	旧石器時代		旧石器	旧石器〜奈良・平安時代まで断続的に居住した遺跡
	縄文時代（早期・前期・中期）	土坑	縄文土器	
	奈良・平安時代	土坑 柱穴 溝	須恵器 土師器	
	近現代		陶磁器	

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第128集

小平２遺跡・小平３遺跡発掘調査報告書

2004年３月26日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号
電話　023-672-5301
印刷　山形印刷株式会社
〒990-2323　山形県山形市桜田東３丁目７番31号
電話　023-622-6291